
魔法の使えない魔法使い

マウンテンデュー（クロウバイツ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の使えない魔法使い

【Nコード】

N3372L

【作者名】

マウンテンデュー（クロウバイツ）

【あらすじ】

ナギの幼馴染として転生した主人公原作通りに・・・進めるわけねえだろ！ネギの立てるフラグをばっきばきに折り、新しいフラグを建てる！でも魔法が使えない！それはもともと魔力がないそうだが、でもなんとかなるだろ。原作ブレイク、キャラ崩壊、オリ設定、ご都合主義などが含まれています。主人公最強系です。でもそこまで最強ってわけじゃないです。素人で、これが処女作です。

プロローグ（前書き）

どうも、クローウバイツです。

まずはこのような小説を読んでもくれる皆様に感謝を。

文才が無く、誤字脱字があるかもしれません。

皆様を不快にさせる表現、未熟なので至らない部分もあるかもしれません。

よくある二次創作ですがよろしく願います。

プロローグ

「全くお前は何をしているんじゃない！」

「ふん！」

俺の名前はナギ・スプリングフィールド、魔法学校の生徒だ。なぜ俺が怒られているかというと……

「先生方の机の引き出しに虫を入れ、あまつさえ隙を狙って暴力を振るうとはどういうことじゃ！」

とまあこんなことをしたからだ。でも俺だってただ理由もなく悪戯したわけじゃない。

「大体あの教師が悪いんだよ！あいつのこと馬鹿にしゃがって！」

「確かにあの先生にも悪いところはあったじゃろうが、お前も悪い。それに今回の悪戯はまずい。なにせ全治一ヶ月の怪我を負わせたからう。おそらく停学処分になるじゃろう。」

「で、次はないってか？」

「うむ、まず間違いなく退学になるじゃろう。」

ふん！あいつのことを馬鹿にするこんな学校にもう行く必要はね

えな。

「はっ！こんな学校こっちから願い下げだ！今すぐ退学してやるぜ」

「な！何を言っておるんじゃナギ！」

爺が何かいつてるがまあ無視だ。さっさとこの学校とおさらばしよう。

「じゃあな爺さん」

俺は爺を残し部屋を飛び出していった。

「さーってこれからどうすっかな？」

勢いで学校出ちまったけどマジでどうしよう？家には帰れないな。帰ったら怒られて爺のところに行行だし……

「よし！あいつのところに行こう！何とかしてくれるだろ！」

あいつは俺の相棒だからな、どうにかなるだろ！

プロローグ（後書き）

まずはここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

まだプロローグなので主人公は次の話から出てきます。

感想や誤字脱字の報告もあつたらお願いします。

不定期更新になりがちですがよろしくお願いします。

マグナ、ナギと旅に出るの巻

「ふっ！はっ！せいっ！」

「どうも皆さん、はじめましてマグナ・ラグナイト・ヴァ ミリオ
ンです。」

いま俺が何をしてるかって？それは……

「南斗獄屠拳！南斗迫破斬！」

はい、南斗孤鷲拳を使っております。え？なぜ俺が北斗の拳を使
えるかって？そりゃー俺が転生したからですよ。

細かいところははっというか大体転生って小説でよくあるから想像
してくれ。主に作者の都合で。

で、俺が願った望みは、

一つ、北斗の拳の技を使えるようにしてくれ

二つ、あらゆる技を達人の域で使えるように

三つ、自分の考えたものを作り出すことができる（材料有）

まあそこまでチートじゃないかな？・・・え？十分チートだつて？こまけえこたあいいんだよ！

そして転生した場所は、なんとナギの相棒という。うれしいのかどうかわからん。

まあ紅き翼に入れるからいいかな？

「おーい！マグナー！」

つとこの声は・・・

「ナギか？どうしたんだ一体？つーか学校は？」

「やめてきた！」

……はいはい原作道り原作道り

「……へー。これからどっすんの?」

「どっすればいい!」?

え〜こっちに丸投げですか?だったら……

「旅にでも出たら?」

「旅……か……」

ここでナギが旅に出たら紅き翼の始まりだろう。

「そつだな、世界の色々な所を見て回るのも面白そつだ!」

よし!紅き翼開始!k t k r!

「もちろんマグナもいくよな?」

「愚問！俺はお前の相棒だぜ？行くに決まってるんだろ！」

「よし！じゃあ早速用意して出発だ！」

じゃあ家に戻って準備するか。

「なあマグナ。」

「ん？なんだ？」

「これからもよろしくな相棒。」

本当にこいつはいい相棒だ

主人公設定

本名マグナ・ラグナイト・ヴァーミリオン、転生前の名前は不明。

身長 190

体重 75

年齢 ナギと同世代（作者が知らないだけ。）

容姿 銀髪蒼眼、髪の毛はショート イケメン。

性格 普段は落ち着いている。めんどくさいことが嫌い。すこし快楽主義者。

技

魔法は使えない。転生したときになんか使えなくなっていた。

世界中の格闘技、武術、忍術などの技も使える。

体中に暗器を仕込んでいる。そのほかに銃器、投擲物なども仕込んでいる。

マグナ特製の鋼糸を使って魔法を吸収したり、武器として使う。

吸収した魔力を使って鋼糸を強化、不可視にしたりできる。もちろん自分に使える。

北斗、南斗の拳を使うことができるが普段は使わない。

能力

一つ、北斗の拳の神拳をすべて使えるがあまり使うことは無い。

二つ、材料さえあればあらゆるものが作れる。

なぜ材料有かというと本人が創造しただけで出てくるものなんてつまらない、そうだ。

三つ世界中の格闘技（ry）を達人の域で使えるようにする。もちろん銃器も入っている。

カード

地獄の奇術師

徳性 狂気

方位 ？

色調 金

星辰性 北斗七星

数字 666

アーティファクト スベテヨキザムトケイ
効果、カードが懐中時計にかわる。

生物以外のあらゆるものの時を操ることができる。

もちろん時を止めることができるが止めていられる時間は静止時間
内で20秒。

その後また時を止めるには30秒のインターバルが必要になる。

ぶっちやけD.I.Oの『ザ・ワールド世界』

紅き翼ができた。(前書き)

ぎゃあああああ！投稿ミスったあああああ！

本当に申し訳ありません。そして報告してくださった皆さん有難う
ございます。

これからミスしないようにがんばります。

紅き翼ができた。

あれから数年俺達は多くの人達に出会い、事件に巻き込まれたり、いろんなことをして世界を回った。

そして今俺達は戦争に巻き込まれている。

……どうしてこうなった?!

旅を続けるうちにナギ絡みでどんどん仲間が増えていった。

最初はナギと二人旅だったけど今は俺を含めて八人になった。もち紅き翼だけだな。

紅き翼として行動しているうちに俺たちの功績が認められた。

しかし、その中に俺は入っていない。なぜなら俺は戦うときには長いフード付のローブをかぶり、ピエロがつけるような仮面をつけて戦っているからだ。

そのときの俺はロウガと呼んでもらっている。

ついた二つ名が『絶望の道化師』という厨二くさい二つ名。

マグナのときの俺は『武神』。

これは最初のほう、自分の体一つで戦っていたからである。

ちなみにロウガのほうは鋼糸やナイフ、体中の暗器を使っていたので道化師となった。

で、今は原作通りにアリか姫を紹介された。

「まあ、お姫様。俺たちに任しときゃあ問題ないさ、わはははは」

「気安く話しかけるな、下衆が」

ラカンが撃沈された、と思ったがラカンは下衆という単語が分からなかったらしく、アルに「下衆ってなんだ？」とか聞いているのであまりダメージは無いつばい。

俺はああなるのわかっているのでスルーする。どうせナギに惚れるからな。

ちなみに今の俺の格好はロウガの姿だ。

「む、おいマグナとかいう奴がおらんぞ？」

あ、やべ。気づかれるか？！

「あああいつは今別行動中だ。情報が必要だからな。」

ナイスナギ！さすがは俺の相棒！

「ふむ、では俺はそろそろお暇するとしよう。やることがあるのでな。」

口調を変えて皆に伝え、そのままその場所から離れる。

後ろで何か言っていたっぽいが無視する。

「おい、お前らこれ見てみる」

「なっ?!これは……」

「ん?どれどれ……ってこいつぁ……」

「これは本当に確かな情報なんですか?」

「ああ、俺が調べ上げたんだ。マジの情報だ。」

「だけどこれはさすがに……」

「だが、奴らの行動もこの情報に照らし合わせれば納得がいく。」

「?どついうことだ?わかりやすく教える。」

「お前に教えても意味ないと思う。」

たぶん「めんどい」とか「だるい」とかいいそうだし。

「ま、そっちはおまけ。本題はこっち」

ファイルを皆に見せる。ナギはお姫さんとデート中。妬ましい。

「はっ?!こいつは今の執政官じゃねえか!?国のナンバー2まで
完全なる世界」の手先なのか?!」

驚くのも仕方がない。実際上層部は黒どころか真っ黒だからな。

「こっちの情報はまだ確定したわけじゃない。ほかの奴らに喋るな
よ。」

ドオン！！！！

「どうしたんだ？」

「魔法による爆発だ！」

「あつちには確かナギ達がいる場所か?!」

sideナギ

「姫さん、無事か？」

「うむ、大丈夫だ。」

「しかしこんな街中で広範囲魔法をぶっ放すか？普通」

「今の魔法は……」

「十中八九あいつ等だろうな。だが俺と姫さん、どっちを狙ってっかわかんねーな。」

この威力だと両方か？

「ようやく尻尾を出しやがったか。追跡の魔法をかけたからな。にげられねえぞ。姫さんは皆の所に戻ってる。俺はあいつ等の本拠地をつぶえ！」

姫さんに襟を捕まれた。首が！

「私も行くぞ。」

「はあ？」

危ないところに行くぞってのに何行ってるんだ？

「私をここに一人にするほうが危険だとわからんのかこの愚か者が。それに私の魔法は役に立つことを忘れたか？鳥頭。」

「へっ！上等！ついて来い姫さん！」

「……で 貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れ回した挙げ句その敵本拠地とやらを壊滅させて来たっていうのか！」

「まあ……」

「何のために秘密裏に調査してると思ってるんだ！万が一殿下に怪我でも負わせたらどうする気だ！！」

「姫さんノリノリだったぜー？楽しかったーっってたし」

「嘘をつけどうせ貴様が・・・」

あーうるせえなあ本当だったっつもの。詠春は真面目すぎんだよなあ。

「詠春さーん」

おっタカミチにお師匠

「いま廊下でお姫さんがナギさんにお礼を言ってくれと。」

「な？そつだろ？」

「・・・っ」

「それに・・・ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

どつよ「」の執政官の会話映像

偽者ってだいたいですぐにはれる(前書き)

原作が手に入ったので省略したところを追加しました

偽者ってだいたいですぐにばれる

「あの執政官コンスルがテロに関与?!それは確かな情報なんだろうね
?ヴァンデンバーグ元捜査官」

「ハ 確たる証拠があります。」

「よくやった。これで上手くいけば・・・これ以上の無意味な戦争
拡大を防ぐことができるかもしれぬ。」

『弾劾手続きが必要だな。法務官フラエトルを呼ぼう。証拠の品とナギ君、マ
グナ君を連れてきてくれ。』

「了解しました。」

そういつて連絡を切るガトウ。

「で、なんだって?」

ナギが後ろに手を組んでガトウに聞く

「なんでも、弾劾手続きをするらしい。君とマグナを連れて来てくれと。」

それを聞いたマグナは難しい顔をする。

「どうした？何かあったのか？」

マグナはフツと元に戻って

「いんや、なんでも無い。じゃあ行くわ」

「マクギル元老院議員」

「御苦労、証拠品はオリジナルだろうか？」

「ハ・・・
法務官はまだいらっしやいませんか。」

「ガトウが背中を向けて外を見ているマクギル元老院議員に確認を取る。」

「ブラエトル法務官は・・・来られぬことになった」

「・・・ハ？」

元老院議員の答えに意味が分からないといったようなガトウ。

「・・・あれから少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦、ここに来てあわてて水を差すのはどうかと思ってね?」

「ハア」

「いや・・・その・・・」

歯切れが悪そうに言葉を続けるマクギル元老院議員

「私の意見ではない。そう考える者も多いというわけだ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうがココはいったん手を引いて

」

「待ちな」

元老院議員の話遮るナギ

「？」

「あんだ・・・マクギル議員じゃねえな？何もんだ？」

ナギがそうだった瞬間マグナが袖を振り回しマクギル議員に向かって幾つもの武器を飛ばす。

武器が着弾し、土煙がマクギル議員を包み込んだ。

「ナイス、マグナ。」

ナギが土煙に目を向けたままにし、戦闘体制を取る

「ちょー！ー？！マグナおまつ……何やってんだよッ！元老院議員に向かって武器を投げつけて……」

「バーカよく見てみな？ガトウ。」

詰め寄るガトウに土煙に指を向けるマグナ

土煙が晴れるとそこにいたのはマクギル議員ではなく、白髪の青年が佇んでいた。

「……よく分かったね、『武神』……いや、『絶望の道化師』と
いったほづがいいかな？」

「わかってんならどっちでもいいさ。」

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら既にメガロ湾の底だよ。」

「てめえっ！」

ナギが白髪的青年に向かって駆け出すが、

「通しませんよ」

「くらえ」

「!?!」

ドン!

何処からとも無く現れた二人の男が青年を守るようにして魔法をナギに食らわせた。

ザシャアアと音を立てて戻ってくるナギの顔には笑みが張り付いていた

「強えぞやつら！」

その言葉にラカンが笑う

「ハツハ！だが生身の敵だ！政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ・・・」

ラカンがアーティファクトの『千の顔を持つ英雄』を肩に担ぐ

「万倍！！！！戦いやすいぜッ！！」

それをフツと笑った青年はどこかに通信を掛けた。

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！」

青年の声だけ聞こえるがマグナがあつとしたような顔をした。

「ああ、うむ確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ……スプリングフィールド ラカン ヴァンデンバーグ
ヴァーミリオン

奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ”今も狙われている、
軍に連絡をッ……”

涼しい顔で連絡を取る青年をみてやつと状況が理解できた三人

「げ

「やられたな

冷や汗をかきながらナギとガトウがつぶやく。

ドンツと音を立てて青年に殺到するナギ達、しかし

「君達は少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

フツと手を上げると地面が盛り上がりつつ建物を破壊した。

それに巻き込まれる前に海に飛び込んだナギ達は

「昨日までの英雄が一転反逆者か・・・ヌツフフ、いいねえ人生波乱万丈じゃなくっちゃな」

反逆者になったにもかかわらず軽い調子で楽しんでるラカン

「タカミチくんたちは脱出できたかな」

他の仲間達の安否を案じるガトウ

「どづしてどうなるかねえ？」

愚痴をこぼすマグナ

そしてナギは・・・

「……………姫さんがやべえな」

子供って無邪気だけどたまにむかつく時がある

あれから俺達は英雄から犯罪者になってしましまして……え
？飛びすぎだつて？だつて作者が面d（テーレツター

いや、ナンバー2を攻撃したら中からももたげフンゲフン。フ
エイトがでてきて俺たち犯罪者になりました。

今まで味方だったやつら相手に戦闘するわけにもいかなかったか
ら大変だった。嵌められて連合からも帝国からも追われる身になっ
てしまったからな。紅き翼は辺境を転戦していき、

アリカ姫を救出するために古代遺跡が立ち並ぶ『ノクティス・ラビリントゥス夜の迷宮』に向
かった。

ドゴオンー！

「よう、きたぜ姫さん。」

「遅いぞ、わが騎士」

はいはい省略省略

そのあと俺達は紅き翼の隠れ家にきていた。

もちろんヘラス帝国第三皇女のテオドラもいる。

「これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば掘っ建て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリが」

「むっ無礼者 わらわをだれじゃと思ってる。」

「ヘラスの皇族には貸しはあっても借りは無いんでね」

ラカン・・・ベロベロバーってお前・・・

「なんじゃと？貴様何者じゃ。」

「俺様は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ」

「なっ貴様が千の刃だと・・・こんな馬鹿が・・・」

「なんだとこの「はいはいストップストップ」・・・マグナ」

「なに子供相手に熱くなってんだ？」

「む、わらわは子供ではない！おぬしも挨拶せんか！」

めんどくさいなあ。やりたくないなあ。

「俺の名前はマグナ、マグナ・R・ヴァーミリオンだ。」

「なっ!?!なら貴様が『武神』か?!」

「まあそついわれてはいるな。」

「うそじゃ!こんなもやしが武神なわけがあるまい!」

・・・

「命は投げ捨てるものではない・・・。」

「馬鹿!やめろ!相手は皇族だぞ!」

ラカンが俺を羽交い絞めにする。

「大丈夫、北斗有情拳使うから。」

「そついう問題じゃねえから!」

「や・・・やれるものならやってみるがよい」

「ではゆくぞ！」

「ぎゃー や、やめるのじゃ〜！わらわが悪かった〜！」

「大丈夫、死ぬ間際天国が見えるから！痛みは感じないから！」

逃げるテオドラを追いかけるオレ（遊び）。ラカンもオレの様子から遊びとわかって笑っている。

おっ、ナギ達が話し始めたな。

「あのやけに元気な少女が・・・」

「ええ　ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下ですね　アリカ姫と交渉のため出向いたところを一緒に捕えられたようです」

あいつらもう仲良くなったのか。

「さーて　姫さん　助けてやったはいいけどこっから大変だぜ　連合にも帝国にも・・・あんたの国、オスティアにも味方はいねえ。それに今や俺等は犯罪者だしな。」

「恐れながら事実です　殿下のオスティアも似たような状態で・・・最新の調査ではオスティア上層部が最も黒いという可能性もあがっております」

「そうか・・・　我が騎士よ」

「だから姫さんその『我が騎士』ってなんだよ　俺はクラスで言うたら魔法使いだぜ!？」

恥ずかしいこの上ない。騎士って柄じゃねえしな。」

「もう連合の兵でないのじゃろ ならばお主はもはや私のものじゃ」

「な・・・」

理論おかしくね？姫さん。つーか俺物かよ。

「連合に帝国・・・そして我がオステイア 世界全てが我等の敵という訳じゃな。じゃが・・・主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

と姫がくすくす笑った。

「ふふ 世界全てが敵 良いではないか こちらの兵はたったの8人だが最強の8人じゃ」

「今世界は『完全なる世界』に操られておる。ならば我々が世界を救おう！我が騎士ナギよ我が盾となり我が剣となれ」

「・・・へ」

世界を救う・・・か いいじゃねえか！

「やれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

姫さんの前で頭をたれる。

「いいぜ 俺の杖と翼あんに預けよう」

墓守人の宮殿・最終決戦！（前書き）

いつの間にかお気に入りか70件超えていました（ ）（ ）（ ）
。（ ）（ ）アワワワワ
これからも精進したいと思います！

墓守人の宮殿・最終決戦！

あの後頭脳派と肉体労働派に分かれて行動した。主に頭脳派は相手の敵味方を判断し、それを肉体労働派が潰して行くといったようなものだ。

そして映画なら三部作、漫画なら十四巻分くらい（ラカン談）であろう六ヶ月の死闘の末、ついに奴等の本拠地を突き止めた。

そこは世界最古の都、王都オスティアの空中王宮最深部、「墓守人の宮殿」！・・・正直ネーミングセンスが無いと思った。

そういえばゼクトはここで死んじゃうんだっけ？・・・なんとかなんねえかなあ？

そして今、俺達は帝国とアドリアーネ混合部隊の準備とガトウ、タカミチ等の連絡を待っていた。

「嫌に静かだな……。」

「舐めてんだろ 悪の組織なんてそんなもんだ」

「もしかしたら神様にでも祈ってるのではないか？ブルブル震えながら、おお、神よ！我々に勝利をお与えください！なんて感じだな。」

「ははははは！そうに違いねえな！」

「まっただくだ！」

俺の冗談でラカンとナギが笑う。最終決戦なのにどこか楽しげだ。

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました！」

お、若かりし頃のセラスカ。なんだかやる気に満ち溢れてるな。
若気の至りってやつ？

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達の本丸に突入できる。頼んだぜ？」

「ハッ！そ、それであの……ナギ殿、ロウガ殿……。」

ん？顔赤くしてどうしたんだ？

「ん？」

「サ、ササ、サインをお願いできませんか！」

……あれ？これってナギだけじゃなかったっけ？

まあいいや。とりあえずサインしてやるっ。

「ああいいぜ！……っとほら、ロウガ。」

「……ほら。」

「あ、ありがとうございます……！」

うむ！何かいい気分だ！

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

漫画では分かってたけど実際に聞くと緊張感が違うな。

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています…」「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今、彼等の手にあるのです」

世界を無に帰す儀式……厨二ですねわか（ry

つとじじいぢやあつとせ居をば……

「世界を無に帰す儀式……か……。」

「おい、ロウガ大丈夫か？」

予想通り皆が心配した目つきで見ってくる。

「……ああ、問題ない。それよりもナギ、開戦だ。一声頼んだぞ。」

ナギが頷く。これでいいだろう。

「どんな目的があるにしても誰かを犠牲にするなんての許せるはずがねえ。奴らを必ず倒すぞ」

「「「「おっっ！」「」「」」

「では、まず俺が初撃を担わせてもらおう。」

sideセレス

「紅き翼」と帝国・連合・アリアドネーの混成部隊はこの戦争を操る真の敵、「完全なる世界」を倒す為に王都オステイア空中王宮最奥部、「墓守り人の宮殿」にやって来た。

まず最初に驚いたのは敵の数。空中を飛びまるで1つの雲のようになっている。地上にいる者もそうだ。

「なんて数なの…」

思わずそう呟いていた。そ、そうだ！準備が終わった事をナギ殿に知らせなくては！

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混合部隊の準備完了しました」

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ？」

ナギ殿が屈伸運動をしながら答える。相変わらず綺麗な顔だ。羨ましい。

はっ！これはサインをもらう、千代一隅のチャンスでは！？

「ハッ！そ、それである……ナギ殿、ロウガ殿……。」

「ん？」

ナギ殿が首を傾げ、ロウガ殿と一緒にこちらを見てくる。恥ずかしくて顔から火が出そうだ……。

「サ、ササ、サインをお願いできませんか！」

……噛んでしまった……鬱だしのう……

「ああいいぜ！……っとほら、ロウガ。」

ナギ殿が書き終え隣の柱に寄りかかっていたロウガ殿に手渡す。

「……ほら。」

や、やった！ついにナギ殿とロウガ殿のサインをもらったぞ！

そう心の中で狂喜乱舞していると同じく紅き翼の一人のガトウ殿から連絡があった。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう、決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ、彼らはもう始めています…「世界を無に帰す儀式」を。世界の鍵「黄昏の姫御子」は今、彼等の手にあるのです」

紅き翼の人たちが真剣な面持ちで話している。とうとう決戦なのか……。

とロウガ殿が寂しげな声で、

「世界を無に帰す儀式……か……。」

と顔を俯かせた。

何か過去にあったのだろうか？聞きたいのだが、聞けない。話したくないものもあるだろうから……。

どんな目的があるにしても誰かを犠牲にするなんての許せるはずがねえ。奴らを必ず倒すぞ」

「「「「「おうっ！」「」「」「」

一人で考えているとナギ殿が皆に気合の一声をかけていた。するとロウガ殿が最前線に進んでいった。

まるで、何かを振り払うように。

「では、まず俺が初撃を担わせてもらおう。」

懐から何か糸のようなものを何本も取り出す。

それらを敵の軍勢めがけ投げつけ、絡ませる。

「 曲技 鎌鼬 」

そう呟き、手に絡ませていたいくつもの糸を振り回す。

すると敵が見えない何かに切り裂かれるようにバラバラの肉片になっっていく。

そうか、あの糸は鋼糸か！鋼糸を振り回すことによって敵を切り裂いていくのか

そうこうしている内にロウガ殿の攻撃は終わったようだ。

よし！私は私の仕事を成そう！彼らの力になるために！

side out

詠春と俺が敵を切り裂きながら墓守人の宮殿に進入していく俺達。外では混合部隊が敵を抑えているだろう。

「サウザンドマスターやあ千の呪文の男、クラウンデイスペアー絶望の道化師。これで何度目だい？僕達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ」

「ふむ、その二つ名も久しく呼ばれるな。」

なんてっ たって呼ばれる前に相手を消すからな。

「まあお互い長話するつもりは無いだろうっ？」

「そうだね、さっさとけりをつけようか。」

と原作通り俺達は勝ち、ナギがフェイトの首を掴んでるシーンが来た。

……つてやべえ！この後は……！

「ナギ！そこから離れる！」

「あ？どうし？！ ガアッ！」

思った通り、造物主ライフメイカーの攻撃がナギの腹を貫通した。

「誰だ！？」

「いかんッ！」

造物主の攻撃か！まずい！

「はあああああああ！」

自分の鋼系に魔法吸収の効果を付与させ展開させる。

造物主の攻撃が鋼系に吸収されていくがやがて限界が来たらしく消滅してしまった。

攻撃を終えると造物主はまるで見下すようにこちらを見ている。

こっちの被害は甚大だ。ラカンが両腕が吹っ飛び戦える状態ではない。

詠春も同じようなもの。アルは俺の後ろにいたらしくそこまでひどい怪我は負っていない。しかしここまで来るまでの戦い、そして造物主との戦いで魔力が底を尽きかけていた。

ナギとゼクトは障壁を展開させていたらしく軽傷ですんでいる。そして俺は……

「?!マグナ!貴方右目が……!」

「ああ、仮面も壊れちゃった。ありゃあお気に入りだったんだが……」

そう、俺の右目は先ほどの攻撃で使い物にならなくなっていた。仮面も壊れて素顔がバレバレだった。他に誰もいないのでまあ良いだろう。

「待てコラてめえっ！！！！」

「任せなジャック」

吠えるジャック。立ち上がり行こうとするナギ。

「い・・・いけませんナギ！その身体では」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治療では！」

「30分もてば充分だ」

「ですがッ・・・」

「なら俺も行くか。唯一無二の相棒だからな」

「マグナ！無茶です！！」

「二人ではないぞ？わしも行くぞ。」

「ゼクト！貴方もですか！無理です！」

「バーカ無理でもやるんだよ。」

「ナギ！ゼクト！マグナ待て！奴はマズイ！奴は別格だ！死ぬぞ！。
ここは態勢を立て直してだな・・・」

「んなことしてたら世界が終わっちまわあ。今、ここでやるしかないんだよ。らしくねえなラカン。それに」

ナギと目を合わせる。言いたいことは伝わっているだろう。

「俺には相棒がついてるからな！」

「俺は千の呪文の男だぜ？負けるはずがねえ！お師匠もこいつもそ

黒い、禍々しく、巨大な魔方阵が造物主の周りに現れる。

「はははははははは！私を倒すかつ！人間がッ！それもよからう
！」

笑いながら魔力を魔方阵につき込む造物主。

「私を倒し、英雄となれ！羊の慰めにもなろう！」

マグナの隣にいたナギがしぶてえ奴だぜと吐き捨てた。

それをまったくだと苦笑しながらマグナは返した。

「だがゆめ忘れるな！すべてを満たす解など無い！」

造物主の前に数多の魔方陣が現れる。

「いずれ彼等にも絶望の帳が下りる！貴様等も例外ではない！」

その魔方陣から黒い閃光が二人に向かって放たれる

「やらせつかよ！」

マグナがナギの前に立ち気を放出させ黒い閃光を打ち払っていく

それは造物主の黒い閃光を打ち消す白の閃光だった。

「わりいな！マグナ！」

「気にすんじゃないねえ！さっさとコイツ倒して帰るぞ！」

振り返らずに造物主に向かって突き進む。

と、ナギが一瞬閃光の雨が止んだ瞬間に突撃した。

「グダグダ……」

右の拳を血が出るほど握り締め、

「つうるせえええッ！！」

思いつきり造物主を殴り飛ばした。

造物主が吹っ飛び閃光が止んだ。

その隙に素早くマグナが造物主の後ろに回りこんだ

「南斗・獄屠拳！」

背中に飛び蹴りを打ち込み、ナギのほうに返す。

ドガガガガガ！

「たてえ！世界が今日、明日滅びようとも！」

ナギのパンチの連打が造物主の体を削っていく。

「これが俺の最高の技だ！」

マグナが後ろから手をゆっくり回す。それが何本もの手の残像を生み出していた。

「クツクク・・・貴様もいずれ私が語る「永遠」こそが
」

「
「全て」の「魂」を救いえる唯一の次善解だと知るだろ
う・・・」

二人の男は諦めなかった。

一人は魔力があるのに悪戯ばかりし、学校を中退になった『落ちこぼれ』
『

もう一人はもともと魔力がなかった『落ちこぼれ』

『落ちこぼれ』だった二人はいつしか英雄になろうとしていた

「人 間 を」

ナギは右手に雷の槍を、マグナは左手に凄まじい闘気を宿す、世紀末覇者拳王の技。

「なめるなああああああああああ！」

槍が造物主を貫き、魔力がボツと圧縮される。そこに追い討ちを掛けるようにマグナの北斗・剛掌波が打ち込まれた。

それが起爆の合図とばかりだというように凄まじい爆発が起こった。

「ハア……ハア……やったか……。」

「ああ……よくやく倒したな……。」

二人で顔を合わせながら笑いあつ。とここでナギがふと思ひ出したように、

「そついえはお師匠は何処だ？」

「ん？そついえはそつだな。たぶんそこらの岩に乗ってんじやないか？」

キヨロキヨロと周りを見渡しているナギを見つつマグナもゼクトを探す。

瞬間、ドツと衝撃波が二人を襲った。

「なっ！ ガア！」

急な衝撃波に対応できなかった二人はそのまま地面に倒れた。

力を振り絞って衝撃波が来た方向に顔を向けると、

「お、お師匠……？」

そこにいたのはゼクト。頭から血を流しながら微笑を浮かべていた

「クククツ 武の英雄に未来を造ることはできぬ……貴様らには結局何も変えられんよ……。」

微笑を浮かべたまま二人に話しかけるゼクトのようなもの。その話し方はまるで……。

「ゼクト・・・お前・・・まさか・・・。」

膝を付きながらマグナがゼクトを睨む。

「だが果たして・・・自らに問うがよい・・・ヒトとは自らの身を捨ててまで救うものなのか・・・？」

「人間は度し難い。英雄よ貴様らも我が2600年の絶望を知るがいい・・・さらばだ。」

それだけを言うとフオオオオと体が塵のようになり、風に吹かれて消えていった

マグナの隣からナギのうめき声が聞こえてくる

墓守人の宮殿・最終決戦！（後書き）

うーむ結構長くなってしまいました（；。°。）
最後のゼクトの話は結構悩みながら書きました。皆さんの反応が怖
いです（；。°。）

目があ・・・目があ・・・!!!!!!

「・・・・・・・・知らない天井だ・・・。」

えっ？やっぱりこのセリフは言わなきゃいかんでしょっ？

「やっと起きましたか。」

「おお、アルか。なあ俺はどのくらい寝てたんだ？」

「ええ、三日ですね。」

「そうか・・・他のやつらは？」

「はい。全員いますが・・・しかし、ゼクトが・・・。」

む・・・あのゼクトは造物主みたいなしゃべり方をしてたんだが・・・しゃべらないほうが良いかな？

「……」

俺とアルが暗い雰囲気を出していると扉の向こうからドドドドド
ヨジョも真つ青な音が聞こえてきた。

バァン！

「おいアル！マグナが起きたってのは本当か？！」

あいも変わらず騒がしいナギ君でした。

「いようナギ。やったな。」

「ああ！お前のおかげだ！」

そういわれるとちょっと恥ずかしい。

「そういえばマグナ、右目はどうなりました？」

「包帯巻いててわかんねえな。」

「んーいや。治ってるばいけど何かおかしい。」

そう、何か目が覚めたときから右目がおかしい。まるで何かが目の中にいるような感じた。

「どれどれ………って?!」

「どうしたんですかナ………?!」

ん?どうしたんだろう?俺の目になんか異常が?

と気になったので傍にあった鏡をしてみる。そこには………

「………時計?」

そう、俺の目がローマ字の時計になっていた。あれ?何かこれ見たことあるんだが………

そう見ていると何かが目の中を通り過ぎたみたいだ。よく見ると………

「カトブレパスウ!？」

そう、あの某漫画の大？魔、カトブレパスだった。

「なんなんですか？そのかとぶればすというのは？」

「かいつまんで説明すると、異界ですら危険と恐れられた大？魔なんだ。その瞳には猛毒が仕込まれているから、それを見た者は命の時間までも止められてしまうんだ。」

「……まさにバクキャラですね……。」

「そうだな……。」

「いやナギ、お前だけには言われたくないんだが……。」

ナギも大概なバグキャラだし

「まあこのまま包帯つけて過ごすわ。」

と右目に包帯を巻きつける。

「そうですか……そうそう、式典があるんですが……。」

「ロウガで行く。仮面は……ストックがあるからいいや。」

「ストックあったのかよ……。」

だっってお気に入りになんだもん!!

で、式典が終わり、パレードの真っ最中です。

「ははは！何か気持ちがいいな！」

「ラカン、暴れすぎだ。人が飛んでるぞ。」

「そうですね、なかなかこんな機会はないでしょうからね。」

「つーか普通無いだろ？普通の人生では。」

「……………」

返事が無い、ただのタカミチのようだ。緊張しすぎだな。

とここで振り向いたら目の前いっぱいラカンの腕が！

ゴンッ！

パキィ！

いてえ、思いつきり顔面に当たった。血は出てないが仮面が割れちった。いやゴツメーン じゃねえよ。

┌

そう諭してやると納得してくれたようだ。

認めた後ギヤース力皆が喚いていた。

何、ありえないだの やっぱりだの 封印が解けられたとか
フ
ア
ン
ク
ラ
ブ
を
合
併
し
な
け
れ
ば
と
か。

後後ろの二人はこっち来い。ぶん殴ってやるから。

そうだ、旅にでよう。うん。

まずは旧世界から周ろつかない？

目があ・・・目があ・・・！！！！（後書き）

カトブレパスは造物主の攻撃を受けたマグナに前世の記憶の中からカトブレパスの記憶がそのまま目に宿ったみたいな感じだ。だって造物主だよ？造物ですよ？転生者であるマグナだからなつたというオリ設定でよろしくお願いします。

仮契約について指摘があったので修正しました。

オスティア崩落、そして姫と道化師の逮捕（前書き）

申し訳ありません。テストがあつたので遅れてしまいました。これから投稿ペースを上げていきたいです・・・。

オスティア崩落、そして姫と道化師の逮捕

轟音をたてて空中王都オスティアが崩れていく

「空中王都の崩落拡大中！！本館の周囲にも強力な魔力消失現象！
即席の対抗呪紋塗装甲がいつまで持つか……」

そんな言葉をアリカ姫が一蹴する

「泣き言はいらぬ！！後数時間持てば充分じゃ！」

次々に戦艦の者に対して命令を飛ばしていくアリカ姫

「もつとも的確に市民を救えるよう最大効率で舟を回せ！ただし！
！捨てて良い命は無い！一人も救いもらすな！これは厳命じゃ！！」

しかし、そんな言葉をもってしても事態は好転しない。

「スラム貧民島の避難作業が難航中！このままでは……」

「理由は……！」

「街の構造が複雑な上……不法移民が多く、全住民の把握が……」

「……ッ」

苦い顔をして報告を聞く

「わかった。ここは任せる。」

裾を翻し、カツカツと靴を鳴らしながら歩いていくアリカ姫にクルトが

「陛下！いったい何処へ！？」

「貧民島は妾が直接赴き島ごと不時着させる。」

「しっしかし・・・」

クルトが流るがアリカ姫は止まらない

「妾の魔法ならこの魔力消失現象の中でも無効化されぬ」

「いけません！女王陛下！！」

クルトが叫んで止めようとした瞬間通信が入った

「ゴルアアーンツ！！こんの馬鹿姫！！！！」

その声に反応してクルトとアリカ姫が顔をそちらに向けた

「やいアリカてめえ！どどういうこったコレは！！！！」

「ナギ……………」

通信の主はナギだった。だがそんなナギの言葉にも煩わしいとい
ったように

「見ての通りだ。世界を救うために自らの国を滅ぼした。案ずるな
妾も遠からず地獄に落ちるだろう。」

「……………」

ナギが言葉を失う。がすぐにアリカ姫に問う

「なんで話さなかったこの唐変木！」

その問いに対してアリカは嫌に冷静に返す

「話しても無駄であろう。戦いしか能のない主が一人で何の役に立つ。」

「くそッ今からそっちに向かうから待ってけテメェ！」

「ここにそなたの力はいらない！妾を助ける暇があったら避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する！」

「まだ崩落を始めていない地区を頼む！ただしこの魔力消失現象の中ではそなたも満足に飛べまい。」

「我らの逃亡生活中に使用したボロ舟にも対抗呪紋処理を施してある！それを……」

アリカ姫の言葉を遮ってナギが叫ぶ

「もう乗ってる!!」

「ならば良い。では救出活動に全力を尽くした後そなた達はココを去れ。二度と戻るな。最後の命令じゃ。」

「何!?!」

アリカ姫の冷たい命令にナギが驚愕する。

「それはどーゆー・・・」切るぞこの通信の間にも民が死んでいく。
「オイ！待て！！」

「魔力消失現象ってさ、魔力で飛ぶ奴は飛べなくなるんだよなあ。」

ポツリとカベによっかかっていたマグナが呟いた。

「ええ、言葉の通り魔力が消失しますから・・・。」

アルが真剣な顔で説明するのを目を瞑りながら聞いているマグナ。
横でナギがアリカ姫と言いつ争っているが聞いていない。

アルが説明し終わり、通信ではクルトが紅き翼の皆に説明をしている。
いる。

チラッと見るとラカンと詠春はナギを抑えており、ナギは通信に向かって叫んでいる。

(・・・今だな)

アリカ姫に呼ばれたアルが通信器に向かっている。

誰一人としてマグナに注意を向けていない。

気づかれないように甲板に出て行く。

後ろを確認するが追ってくる気配は無い

フツと笑みを浮かべるとマグナは自身の気を利用して空を飛んでいった。

舞空術。マグナがドラゴボールに憧れて取得した技。もともと気を扱い空を飛ぶこの技は魔力を使わないため魔力消失現象の影響を受けない。

民の頭上に落ちていく浮遊岩を破壊するために。多くの民を救うため。

まあ他の地区はナギ達が行ってくれらるだろうと検討をつけたマグナはどんどん浮遊岩を破壊していく。

それが、処刑台への第一歩だと知らずに……

「おい、そういえばマグナは何処に行った？」

通信が終わったが未だ納得がいかないといったようなナギはメンバーにマグナが居ない事を確認したナギは皆に聞いていた。

「ん？いや俺はお前を押さえつけることでいっぱいだったからしらねえよ」

ラカンの言葉に横に居た詠春もそうだといわんばかりに肩を竦めた。

ナギはアルに顔を向けると

「アルは知っているか？」

「いえ・・・私はマグナと話した後アリカ姫に呼ばれましたから・・・」

「・・・なあアル。お前マグナと何を話していたんだ？」

詠春が疑問に思ったようにアルに聞いた

「ええ。マグナが魔力消失現象について聞いてきたのでその説明を。」

すらすらと答えていくアル。

「魔力消失現象・・・魔力・・・まさか?!」

ナギがはじかれたように顔を上げる。その様子に一同がナギに視線を集める

「何か分かりましたか？」

「あの馬鹿！姫さんと同じ事をしやがって！！」

ガンツ！とカベを殴りつけるナギに三人は困惑した。

「いったいどうしたんだ？マグナがどうしたって？」

「……アル。魔力が使えなかったら飛べないよな。」

確認するようにナギがアルに聞く。当たり前だというようにアルが首を縦に振った

「じゃあマグナはどうやって空を飛んでたんだ・・・？」

「それは・・・！？」

言いかけようとしてアルの顔が一気に強張った

「どうしっただって?!」

ラカンがナギとアルに詰め寄る

「・・・アイツ、舞空術で他の奴らを助けに行ったんだ・・・。」

「「?!」」

力なくうなだれるナギが放った言葉は二人に衝撃を与えるのには充分だった。

「オイオイ！それはマジなのか?!」

「ええ。今連絡がありました。紅き翼の一人マグナ・ヴァーミリオ
ンが次々に浮遊岩を破壊、停止させていると。」

通信器片手に報告するアル。

「なんで……なんでお前が……!」

手が白くなるほどに握り締めたナギが掠れた声で呟いた

そんな様子のナギに掛ける言葉が見つからないメンバー達は皆目
を伏せた

「アリカ……マグナ……ッ」

えれば奇跡的な数値かと・・・」

「1 / 5%・・・マグナの野郎も手伝ったからな。だが数が少ないからって割り切れる女じゃねえだろ。むしろこつからだ。大変なのは。」

崩落が終わり、一つの浮遊岩に舟を止め、休む紅き翼。崩落が終わったのにその顔が浮かない。

アリカ姫の事もあるがメンバーの一人。ナギの幼馴染のマグナが国を滅ぼした一人として拘束捕縛され、連合最辺境ケルベラス無限監獄に収容されたと聞いた。アリカ姫も収容されていると聞いた。

民は彼女のことを災厄の女王と呼ばれている。本当に世界を救ったのは彼女だというのに・・・。

「・・・・・・・・」

ナギは何も言わない。ただただ虚空を見つめているだけ。

その見つめる先に何かあるのだろうか。

世界を救ったという希望？アリカ姫、マグナが捕まったという絶望？それとも……

それは彼しか知らない。

彼はただただ虚空を見つめていた。

オスティア崩落、そして姫と道化師の逮捕（後書き）

アクセス100 / 582 ユニーク17 / 956人・・・？

（。。。）？

（。。。）・・・

（。。。；）！！！！

（。。。；；。。。）

感激の極みです！有難うございます！これからも精進し続けたいと思います！今後ともこの作品をよろしくお願いします！

姫は希望に包まれ道化師は狂気の笑いを浮かべた

二年後……

連合最辺境のケルベロス無限監獄の中、マグナとアリカ姫はまだ其処にいた。

「なんだよ、また食べなかったのかい女王様。」

「まったく死なれると困るんだがなーと呟いたのは監獄に勤務する兵士だった。」

当のアリカ姫は何も答えずに部屋の隅に座ってどこかを見ている。

その姿は以前の威厳は無く、顔も既に生を諦めているような顔だった。

マグナといえば……

「まったく、ここの飯の味って薄いんだよな。もっと味濃くしてくれよ。」

と頭で逆立ちをしながら兵士に文句を言っていた。その顔はアリカ姫とはまったく逆の顔をしている。

生氣のある顔をし、あまつさえ兵士に文句を言っているほどに。

「我慢しろ。というかそれを何時まで言い続けるつもりだ？」

「味が濃くなるまでだが？」

なにをいつてるんだといったように言い放つ。

マグナはココ監獄に来て初めて食事を取ったときから味が薄いと文句を言い続けていた。

が、一回も味が濃くなったことは無いのだが。

「まあいい。フン、庶民のお味はお口には合わねえってか？」

綺麗に食べられた食器と手をつけられてない食事を持ち上げる。

アリカ姫に顔を向けた兵士が鼻で晒った

「ヘッ……しかし今のアンタにゃお似合いだな。」

「なんせアンタはあの戦争を起こした張本人だろ？アンタに味方する奴なんていねえ。……全くだよ。」

皮肉交じりに兵士が言うが言われているアリカ姫は反応もせず
虚空を見続けている。

マグナは何も言わない。いったところで何か変わるわけでもない
ということが分かっているからだ。

彼はただ兵士とアリカ姫を見ていた。……無論逆立ちのまま
で。

と、カッーン、カッーンと規則正しい音が近づいてきた。マグナ
はこの音が誰の者であるかこの二年で分かっていた。

「あっこれは議員……こんな辺境にわざわざ……」

「つむ、し、苦勞様だね。下がちなさい。」

「し、しかし・・・！」

兵士の狼狽する声が聞こえるが低い声がそれを制する。兵士としてはいかに偉い地位の者だろうとも簡単に通してはいけないのだから。

「大丈夫だ。話は通してある。」

なだめるように兵士に話しかけ、下がらせる。と、アリカ姫とマグナに顔を向けた。それはマグナとアリカ姫をこの監獄に入れたメガロメセンブリアの議員だった。

チツと内心で舌打ちするマグナ。そんな心の内も知らずに議員が見下したように、

「これはこれは・・・見るにも耐えぬみすばらしい姿ですな。」

その顔はフードで隠してあるため見えない。

「最古の王家の末裔にこのような仕打ち・・・まことに心が痛みます」

その仕打ちをしたのはテムエらだろうが　とマグナは口の中で呟くが議員には聞こえていないようだ。

ゆっくりとアリカ姫に近づきながら話す議員

「刑の執行は十日後になりました。　　　その前に今一度お尋ねしましょう。」

ニヤニヤ笑いながらまた一歩また一歩と近づいていく。

「黄昏の姫御子と共に封印された墓所の最奥部・・・其処に到るための方法を貴女は知っているはずだ。」

「・・・・・・・・」

そういわれる壁に目を向けたまま答えようとしないアリカ姫に苛立った議員が彼女の髪を掴み語気を荒げる。

「言つのです！！これは世界を滅びから救つためでもあり、最愛のアスナ姫をお救い為でもあるのですぞ！！」

「・・・・・・・・」

議員に目を向けるが喋らない。使えぬ女だと悪態を吐くと髪を離した。ズルズルと壁にもたれかかりながら座るアリカ姫と出口に向かつていく議員を厳しい目でマグナは見ていた・・・・いまだ逆立ちのままです。

「いや失礼これは言い過ぎました。貴女はこれから十日後の死によつて十分に世のためとなるのですな。そう」

「世界平和の礎となつて。」

それだけ言うともう用はないとばかりに背を向けて出口に向かつて歩き出す議員に静止の声がかかった。それはいままで二人のやり取りを見ていたマグナからでた言葉だった。

よつと と振り子のように体を逸らし飛んで両足で着地したマグナは議員に訝しげな目を向けて

「つーか何で俺はココに捕まつてんだ？自分で言つのもなんだけど一応英雄なんだけど・・・」

ちよいちよいと自分を足で（両手は使えないので）指しながら聞く議員は何を言ってるんだと言う様に

「そんなもの簡単ですよ。紅き翼の戦力を減らす為ですよ。ああ心配は要りません。貴方の処刑は非公開で行われますから。」

では御機嫌よう英雄マグナ殿といって今度こそ牢から出て行った。ガゴンと扉が閉まり、部屋に静寂が戻る。

とアリカ姫はマグナ肩を震わせているのを見た。処刑を恐れているのかと思っただがそれは違った。なぜなら

「ククククク……ハハハハハハ……」

「だってよお・・・ククク・・・俺達が礎だって・・・処刑されるってさ！アハハハハハ！！」

堰を切ったかのようにまた笑い出す。そんな答えに目を逸らしアリカ姫は呟いた。

「・・・何を言ってるのだ？もう妾達が処刑されるのは明らかだろ
う・・・」

それに、とアリカ姫は

「妾は災厄の女王・・・処刑されずとも民達に忌み嫌われる存在、
紅き翼の皆も・・・」

「何言ってるんだよ。来るに決まってるんだろ？」

そんな呟きを一蹴するマグナ。

「何故？って顔してんな。理由は二つある」

「まず一つ。俺は紅き翼あかきつばを信じてる。だから俺達は死なない。」

「それは……」

言いかけたところで首を横に振られ、その言葉を遮られる。

「俺が何年ナギあいつの幼馴染幼馴染をしてると思ってるんだ？アイツは仲間を見捨てるような奴じゃ無い。」

その迫力に喉まで出掛かった言葉が引っ込む。二つ目と気にせず
に続ける。

「まあこれは簡単なことさ。うん、とても簡単なこと……」

「……………」

首を傾げるアリカ姫を見て苦笑するマグナがこつ言った。

「アリカ姫お姫様を助けるのはナギ騎士の役目だろ？」

そういった瞬間アリカ姫がプツ　と噴出した。

「ははははは！そうか姫を助けるのは騎士の役目か！はははは！」

そういつて笑うアリカ姫の顔は先ほどまでとは違う。「生きる」という顔をしていた。

「とまあこれが俺達が死なない理由だ。・・・何か問題はあるかい？」

片目を瞑りながら意地悪く笑い問いかける。それをクスクス笑い

ながらアリカ姫は答えた。

「いや・・・そうだな。問題なぞ無い！」

十日後

重要戦争犯罪人 アリカ・アナルキア・エンテオフユシア
重要戦争犯罪人 マグナ・ラグナイト・ヴァーミリオン

処刑執行日当日

二人は谷にかかっている橋に立っていた。両手は枷に縛られ、処刑の時間が刻一刻と迫っている。しかし

二人の顔は晴れやかだった。それは生を諦めた結果の開き直りではなく、紅き翼の面々が助けに来るだろうという確信から来るものだった。

歩け！という背中から兵士の槍が突きつけられマグナは橋の淵に立った。下を覗いて見ると魔獣が今か今かとばかりに口を開いてこちらを伺っていた。

フツと後ろを向いて議員達に言葉を贈る。

「諸君。まさかこの俺がココに突き落とされたぐらいで死ぬと思っているのか？クククツそれはあまりに浅はか！愚か！愚の骨頂！ハハハ！さあさあ皆さんお立会い！世にも奇妙なケルベロス溪谷からの脱出劇！ああ御代はお金ではなくて結構。御代は私達の自由で手を打ちましょう！では皆々様決して目を逸らさずにご覧ください。それでは！」

謡うように言った後背中から橋から落ちたマグナは手枷が外れ、両手が自由に成るのを感じた。両手の感覚を確かめっているとすぐ目の前に魔獣の口があるのを見た。

久しぶりの戦闘だ　と言ってマグナは右手を振りかぶった。その右手は鉤爪のように曲がっていた。そしてその手を下から振り上げるように魔獣に放った。

「南斗・迫破斬！！」

その拳が当たった魔獣は縦に裂かれて崩れ落ちた。その肉塊に群がる魔獣共を見ながら底に着地したマグナは辺りを見渡した。

そこらじゅう魔獣だらけ。おそらく死んだ者は獣も人間も関係な

く食われるのだらうと思ったマグナは近くに何か着地した音を聞いた。

其処に目を向けると、アリカ姫を抱えたナギが居た。

「久しいな、ナギ。」

「ああ本当に久しぶりだな。マグナ。」

フツとナギとアリカ姫に影がかかったかと思うとナギは其処からいち早く離脱した。その一瞬後ナギが居た場所に魔獣が襲い掛かった。

「おお」「エエ」

と、魔獣を避けながらナギの隣に並びながら横顔を見る。魔力と
気が使えないためか額には汗が張り付いていた。

ドゴオオンと渓谷の崖の上で爆発が起こったのをマグナは見た。
おそらくナギ以外のメンバーが暴れているのだろう。

その間にもナギの体力は減っていく。もう息切れもしており、今
にも崩れ落ちそうに成っている。

マグナは疲れたように息を吐くと隣のナギに声を掛けた。

「ナギ！今から俺が合図する！合図したら俺の足に乗れ！」

「はぁ！？何言ってるんだ！いきなりそんな事いわれたって

」

そんなナギの叫びを無視して右足を突き出しながら台図を出した。

「おら！乗れエエ！」

「ちいいい！」

右足に何とか乗ったことを確認したマグナはグツ　と右足に力をためる。

ナギが何か言っているようだったが何を言われようが無視するつもりだった。

「アル・メ・ドレール
空軍・・・」

力を溜めた右足はバネのように撓んだ右足の力を解放する！

「パワーシュート！！！！」

ナギを乗せたままの右足を振りぬいたマグナは飛ばされたナギとアリカ姫を見て満足そうに笑みを浮かべた。幼少の頃から鍛錬を欠かさずにしてきたマグナの蹴りは気を使わずともヒトを飛ばすことは出来ていた。

これからするのは彼らの目の毒になってしまう。それにその姿だけは彼らには見せたくは無かった。だからこそ彼らを先に行かせた。後で必ず行くから。待っていてくれと。

立ち止まり再度周りを見渡す。魔獣に取り囲まれ、今にも襲い掛かりそうな者までいた。だがそれを見てもマグナは笑った。

邪魔する者はない。これならやれると思って彼は

血と獣の濃厚なケルベロス溪谷の空気を肺一杯に吸い込んだ。そしてカキン と何かが変わる音がした。

向かい来る魔獣を南斗の技で切り裂く。獣達の鮮血が溢れ出して彼の髪を、顔を、服を、全てを赤く 紅く 赫く染めていく。

溢れ出した鮮血が体にかかる度に恍惚とした表情で甘美な息を吐いていたマグナは次の手段で獣達を蹂躪することに決めた。

服をバサッ とはためかせると服の間からそれが出てきた。

マグナの身長と同じくらいの大きさのモーニングスターが。

しかし唯のモーニングスターではなかった。スパイクの付いた鉄球が鎖につながれており、モーニングスターよりもフレイルといったほうが的確かもしれない。

その、スパイクの付いた巨大なモーニングスターをマグナは

撃つ。構えや作戦など無い。ただただ狂気に身を任せて戦う。

気がつくのと彼以外に動く者はなかった。魔獣達の屍の上に立ち肉塊となったモノを無感情な目で見つめていたマグナはやがて彼の仲間の間で居るところに歩いていく。

体中を紅く染めて。歩いた道を紅く染めて。彼は仲間の所に歩いていく。その目には狂気は無く、しっかりと理性がその目に宿っていた。

はぁ と疲れたような息を吐き出して彼は何時ものやる気の無い表情で

「まったく真っ赤って言うのは俺にはにあわねえんだけどな……。」

「

ふと見るとナギとアリカ姫が杖に乗ってキスをしていた。

それを彼の仲間たちは微笑ましく、祝福するように見ている。

ふとマグナは自分の格好を確認してみた。

髪：血で赤くなっている

顔：血糊でべったり

服：もう赤を通り越した赤

手：南斗神拳でベタベタ（血で）

足：スパイクを蹴ったが怪我は無い。でも赤。

「こんな状態であそこに行っても場違いなだけだよなあ……」

憂鬱な気持ちになったマグナはとりあえずシャワーを浴びようと決心した。

処刑された筈の姫は騎士に救われた。その騎士に手を貸した道化師はいつの間にかその場から消えていた。

騎士と姫は結ばれて、子を産むだろう。その子は英雄の息子として晴れ晴れしい道を歩んでいく。しかしその道は決して平坦ではない。

多くの出会いや事件。喜びや悲しみ。希望と絶望が織り交ぜられたドロドロの道。彼が歩む道には何が残るだろうか？

マグナという転生者イレギュラーの介入によって何が変わるのか？マグナ自身英雄の息子については興味が無く、むしろござったい様に感じていた。

マグナは英雄の息子に何の影響を与えるのか。それはまだ誰も知らない。

唯一分かっていることはいつか英雄の息子と道化師の道が重なっていくことだけだった。

姫は希望に包まれ道化師は狂気の笑いを浮かべた（後書き）

書いた後ちよつと布団で文章を見て悶えてました。ボタンボタンと。自分的には結構長く出来たんじゃないかなと。

空軍パワーシユートはワンピースからとりました。

うーむこれから誰と絡ませようかな？結構迷いますねコレ。

懐かしの再会ってドラマじゃ抱き合っつのをよく見るけど実際はそんなことはい

麻帆良学園

この学園は日本……いや世界一と言っていいほどの広さを持つ学園である。

今は真夜中だからか人気どころか生物の気配すらない。

そんな闇と静寂が支配する学園の通りに動く影があった。

それは少しぶかぶかのジーンズに白いシャツ、黒いコートを羽織った人影。かつて魔法界での大戦時に紅き翼の一人として戦い、英雄になった男 『武神』マグナ・ラグナイト・ヴァーミリオ

そんな男がこんな真夜中に通りを歩いているのには訳があった。

不意に懐から一通の手紙を取り出す。それは彼が此処に来るきっかけとなった手紙。

数秒それを見るとまた懐にしまいこんで、マグナは嘆息した。

それは呆れなどから来るそれではなく、疲れから来るものであった。

事実彼は魔法界からの旅で疲れていたのだが、理由はそれだけではなかった。

また一つ嘆息して、此処までの経緯をマグナは思い返した。

「俺に手紙？珍しいな……。」

彼がその手紙をもらったのは数日前のことであった。

彼は大戦の後行く当ても無く毎日テオドラの相手をしていた……
たまたに依頼を受けて仕事に行くこともあるが。

そんなある日テオドラからもらったその手紙は大戦後別れたつき
りのタカミチから来たものだった。

封を破ってその手紙を見る。魔法の手紙ではなく手書きのものだ。

「お久しぶりですマグナさん。タカミチです。今僕は旧世界の麻帆
良学園という所で教師をしているんですが、実は魔法関係者の人手
が足りなくなってしまうんです。貴方にこんなことを頼むのは失
礼かと思いますが麻帆良学園に来て教師をやっていただけでし
ようか？久しぶりの連絡なのにこのような頼みごとをしてしまって
申し訳ありません。では、返事を待っています。」

高畑・

T・タカミチ

「んーなるほどねえ。麻帆良学園で教師を……。」

手紙を読み終えたマグナは懐かしさに思いを馳せていた。と同時にもう原作に入るのかとも考えていた。

「のうマグナ。なんて書いてあったのじゃ？」

テオドラが手紙を横から覗いて文章を見ているのにも気づかずにとりかかろうとするか考えるマグナ。

「(さて、どうするかねえ？原作には入りたいたいんだけどなあ……上手くいくかどうか心配だな……)」

そんなことを考えているとテオドラが服の裾を引っ張ってきた。それに気づいたマグナは

「どうしたテオドラ？」

「むー……マグナ、お主旧世界にいくつもりか？」

「そうだなあ……向こうに行ったら行ったらで楽しそうだし、行くかなあ……」

「……本当に言ってしまうのか？」

今にも泣き出しそうな表情でマグナに問いかけるテオドラを見て彼は安心させるように頭を撫でた。

「大丈夫だよ。一生合えないって訳でもないし、長期休暇にはこっちに戻ってくるからさ。」

「本当か？本当なのじゃな？！」

「ああ、約束するよ。」

夏休みには嫌でもこつち来る事になる事を考慮しての言い訳だった。だが結果的にはいいかなと思ってしまふマグナであったが。

しばらく俯いて考えるような仕草をしていたテオドラは意を決したかのように顔を上げて言った。

「バクティオーならば妾と仮契約するのじゃ!」

「……………は?」

いきなりの仰天発言に脳の処理速度が着いていけないマグナを尻目に淡々と仮契約の準備を進めていくテオドラ。

「っておいおい！それはまずいんじゃない　むう！？」

パアアアアアアアアア！

テオドラを阻止する間もなくマグナとテオドラの唇が合わさり仮契約成立の光が魔方阵から溢れ出す。

「ぶはあ・・・これで妾の従者になったな？マグナ。」

そういうテオドラの顔は羞恥心が恥ずかしさか真っ赤になっていた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・もういいや、うん。」

もはや諦めの境地に入っているマグナはため息をついた。まあ仮契約しなきゃ行かせてくれなさそうだったからな　という考えは少

し悲しみが入っていた。

「まあとりあえず仮契約をしたからカードは……っとコレか。」

ヒラヒラと舞い降りてくるカードをキャッチして確認する。カードにはマグナが半分になった仮面を顔にしており、両腕の服の袖からはあらゆる武器が飛び出していた。

「ほう？地獄の奇術師か……なかなか的を得ているカードじゃない。色調は金、まあお主じゃから当たり前じゃ。徳性は……狂気？」

マグナのカードを見ていたテオドラが徳性の部分で眉を潜めたが、マグナはコレに納得していた。

彼が渓谷で魔獣を狂気で虐殺したことを知っているのは誰も居ない。

「アーティファクトは『スベテヲキザムトケイ』か……。まあ出してみるに限るか、来たれ^{アテアット}」

その言葉に反応し、カードが光ったかと思うとマグナの手には懐中時計が浮かんでいた。

「へえ？コイツはかなりのアーティファクトだな。」

「このマグナ、このアーティファクトはどんなことが出来るのじゃ？」

一瞬で懐中時計の力を知ったマグナにテオドラは興味深々の様子で聞く。

ああそれは と言いながら懐からナイフを取り出し壁に向かって投げつけたのを見たテオドラは首をかしげた。あのままでは壁に突き刺さってしまうのではないか と思ったテオドラだったがその考えは大きく外れることとなった。

投げられたナイフは突き刺さらずにゆっくりと壁に向かって直進していた。

「なっ?!これは……?」

「コレの力は時間だよ。時間を操ることが出来るアーティファクトだ。そこらの時間操作系とは桁外れの力を持ったものだけだ。」

驚いているテオドラにマグナはゆっくり進むナイフを見ながら説明する。

「コイツの能力のすばらしい所は時を『止める』って所さ。普通の時間操作系のアーティファクトは時を止めるなんてのはできないからね。他にも物体を早くしたりすることも出来るっぽい。」

まあ生物には作用されないけど と彼は笑って言った。

「さて、仮契約もしたことだし俺はそろそろ用意していくからな。」

席を立ち、扉に向かって歩いていくマグナ。今度はテオドラの制止の声もかかることも無かった。

仮契約した自分のカードを取り出して思い出していたマグナは前から何か来るのを感じた。

だが戦闘体制は取らない。なぜなら前から来る気は懐かしいものだったからだ。

「お久しぶりですマグナさん。」

闇から出てきたのはタカミチだった。顔に髭を生やしているその姿はまるで亡くなったガトウのようにも見える。

「おう久しいなタカミチ。まあ再開を懐かしむのは後でいいからさつさと学園長の所に連れて行ってくれ。」

欠伸を噛み殺し目の端に涙を溜めて話しているマグナを見て苦笑するタカミチ。

「そうですね。それでは案内するので着いてきてください。」

そういうと背を向けて歩き出す。背中姿もガトウにそっくりだった。それはまるで亡くなったガトウを真似リスペクトしているかのようだった。

その後ろ姿を見ながら歩いていくマグナはポツリとタカミチにも聞こえないような小さい声で呟いた。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか……。」

その眩きは誰に聞かれることも無く風に乘って消えていった。

懐かしの再会ってドラマじゃ抱き合うのをよく見るけど実際はそんなことはい

ACって面白いですね。PS3のACを買ってハマった作者です。

武器や機体の選択だけではなく、それぞれのパーツも選択でき、さまざまな戦術が使って中々奥深いゲームですね。

クリアしたらゲームアーカイブスにある最初のACをかってやってみます。皆のトラウマ、ニンボール・セラフに挑戦したいと思っています。

はっ！・・・ニンボール・セラフ・・・・・・・・やってみるかな？（ー）

そんなことを考えていますがコレで後書きを終わりたいと思います。

まくなは きょうじになつた！ えう、あんじえりんの のろいが とけた！

「いやね？確かにさ？俺が鬼とか蛇とかいったけどさ？まさか妖怪が出るとは思わなかったが。」

「いや、初対面なのに酷くない？わしの扱い。」

タカミチに連れられて来たのは麻帆良学園の学園長室。つまり一番偉い人が居るところなのだが……。

「いやいや、お前の頭を見たらえ？アンタ人間？って感じになるからな？学園ちょ……ぬらりひよん。」

「いや言い換える必要なくない？しかもわしちゃんとした人類だからね？生粋の日本人だからね？」

ちょっと涙目になっている学園長の近衛近右衛門。名前が某猫型ロボットに似ているというのはマグナ談である。それにかまわずにソファに寝転がって何処から取り出したのか、ビーフジャーキーを咀嚼しているマグナは訝しげな目を学園長に向けて

「そんなことはどうでもいいからさっさと本題に入ってくれよ。」

「そんなことって・・・まあいいじやろう。君はタカミチ君の手紙で大体は知っているとは思うが今この麻帆良学園の魔法先生の数が少なくなっているのじゃ。それは学園内に侵入者を許してしまい、生徒達に危険が及んでしまう可能性があるのな、君に手を貸してもらいたいのじゃ。」

「まあ別に教師になりたくないって訳じゃないし、別にいいけど。」

そんな学園長の申し出に了承の意を表すマグナだったが内心どうでも良いといったような心境だった。

その理由は二つある。

一つは、原作介入のチャンスがもらえたからである。こちらから出向かずに原作介入のチャンスを向こう側から与えてもらえたのであるからそれは幸運なことであった。

二つ目は、今説明しているのが建前だナリフということだからである。今は原作開始一ヶ月前である。メルディアナ魔法学校からサウザンドマスターであるナギの息子のネギが最終課題として此処、麻帆良学園にくるということは既に伝えられているだろう。大方父親の間である彼を利用してネギを立派な魔法使いマキステル・マキにするためのいわば踏み台にするつもりであろうとマグナは検討をつけていた。

そんなことも知らずに学園長は内心ほくそ笑んでいた。

「(ほっほっほっ都合よくマグナ君が教師を引き受けてくれて助かったわい。これで一カ月後に来るネギ君の教師としての仕事と魔法

関係のサポートはきまったの。まあナギの息子であるネギ君のサポートを断る道理も無いじゃろうし。」

そんなことを考えている学園長だがマグナにはそれが全て分かっているということには全く気が付いていない。マグナは教師関係ではサポートするつもりだが魔法関係については全くサポートをしないと決めていた。学園長が計画してきたものが早くも崩れ去っていくのを当の本人は未だ分かっていない。

「それで、俺は何の教師なんだ？一応大体のことはできるが……」

「うむ、実は一昨日社会の教科の先生が辞めてしまったの？君にはその埋め合わせをしてもらいたいのじゃ。」

「社会の教師ね……。まあいいでしょう、引き受けたよ、その仕事。あと警備員の件は……。」

「それは明日の夜の10時に世界樹前の広場にきてくれんかのう。皆との顔合わせをしなければならぬからの。」

顎鬚を手で梳きながら喋る学園長を今度はスルメを啜えながら話を聞いていく。

「はいはい、明日の夜10時ごろ世界樹前広場だな。わあつたよ。で、俺の寢床は」

しかし彼はそれ以上続けられなかった。それは何故か。ドアがいきなり開いて疾風のごとく部屋の中に入り込み、マグナの首の襟を掴み高速で揺らす金髪の少女が居たからである。

「貴様！マグナ・ヴァーミリオン！！何故貴様は3年たつても此処にこなかった？！私が何年待ったと思ってる？12年だぞ！12年！思えばあの忌々しいサウザンドマスターに呪いを掛けられてから15年の月日がたっているというのに！3年たつたら貴様が呪いを解きに来ると言っていたのに！何故貴様は私を12年も放置し続けた？！答える！さもなければ八つ裂きにしてくれる！さあ答える！今すぐに！答えるおおおおおおおおおお！！！！！！」

固まるエヴェンジェリンを見ながらさらに言葉を続ける。

「いや、だから俺はそんな事知らないって。第一俺とナギは連絡取り合ってねえもん。」

「、」

口を開いたまま呆然とするエヴァンジェリンに止めを刺すかのよう
うにマグナは口を開いた。

「それに俺は魔法が使えないんだぜ？どうやって呪いを解くんだよ
？」

その言葉に全身の力が抜け、床に両手と膝をつけてまさしくorzの体制になったエヴェンジェリン。それを見て流石に不憫だなあと思ったマグナは懐から一本のフラスコを取り出した。エヴェンジェリンは床に視線が行っているが、フラスコの中を見た学園長とタカミチの顔が引き攣った。

そのフラスコの中に入っている液体は、見る視点を変える毎に色を変えて鈍く光り、別に熱くも無いのにボコボコと灰色の泡を吹き出しているその液体はもはや劇薬にしか見えなかった。

それをあろうことがマグナは未だに呆然としているエヴァンジェリンの口の中にその液体を流し込んだ。

「そおい！」

「むじゅー!」

急にフラスコを口の中につつまれ、液体を流し込まれたエヴァンジェリンは抵抗も出来ずにその液体を嚙下していく。後に彼女はこう語った。あれはやばかったと、不死なのに三途の川が見えた気がする、と

飲み終えたのを確認したマグナはフラスコを口から放してまた懐に収めた。ビクンツビクンツと痙攣しているエヴェンジェリンはその痙攣が治まりつつあるのか射殺するような目つきでマグナを睨みつけ、

そしてバキン、と何かが壊れるような音が部屋の中に響いた。

なっ？！ とその場に居たマグナ以外の全員が驚愕した。なぜかというところ封印されているはずのエヴァンジェリンの体から魔力があふれるほど漏れ出していたからだ。

「これは……全盛期の……？」

自分の体を信じられないような目で見渡すエヴァンジェリンを視界に入れながらタカミチはマグナに聞いた。

「マグナさん。貴方いったい何をしたんですか？」

「何、大した事じゃない。あらゆる呪いを解く魔法薬をアイツにぶち込んだだけだよ。」

「ああサンキューな。」

ホレ鍵じゃ と投げ渡させた鍵を受け取り背を向けて出て行く
とするマグナに待ったの聲がかかった。

「マグナ・R・ヴァーミリオン。遅くなっただが呪いを解いてもらっ
たことに礼を言おう。」

とエヴァンジェリンが軽く頭を下げたのを見てマグナは苦笑して、

「いいって。もともとあの馬鹿ナキが起こしたことだからな。幼馴染の
俺にも原因はあると思っし。」

そういつて頭を撫でてやるとちよつと紅くなってやめる！ と叫
んだのをみて面白そうに笑ったマグナは今度こそ背を向けて部屋か
ら立ち去った。

600年間孤独だった彼女に道化師は希望を与えた。それは彼女にとって暖かく、そして明るいものだった。

道化師の役目は観客を驚かせ、楽しませ、喜びを与える。

ゆえに彼は踊る。踊らせる。人々に希望を与えるために。だから彼は躊躇わない。自分の手を、足を、体を汚すことに。自分自身が汚れて誰かが幸せになるのなら、喜んでこの体を汚そうと。

彼は汚れる、皆のために。自分に、仲間に、大切な人に敵対する全てに絶望を振りまきながら……。

まくなは きょうしになった！ えう、 あんじえりんの のろいが とけた！

A C f aの大量虐殺ミッションでオペ子に見放されて心が折れた。

速攻ミッション放棄したけど以来そのミッションがトラウマになり

ました(´；；；´)

オペ子好きだったのに・・・。 o r z

よくはしゃぐクラスは明るいけどそのクラスの担任って苦労すると思っ。

「ん……むう……」

朝、そう遅くない時間にマグナは起きた。彼が寝ていたのは学園長に割り当てられた通りの一軒家の部屋の一室で熟睡していた。

もともと旧世界への旅で疲れていたマグナは部屋に着いた瞬間ベッドに倒れ込み直ぐに睡魔に襲われているのにこの時間帯に起きるのは流石というべきであろう。

「くあああああ……」

大きな欠伸を一つしてズルズルとスウェットのズボンの裾を引きずりながら台所に朝食を作りに向かう。寝ぼけているためか向かっている場所からいい匂いがするのをマグナは感じ取れなかった。

「……………あれ？」

「どうしたんだ？早く朝飯を取らないのか？」

「マグナ様の朝食です。どうぞ。」

そこで見たのは椅子に座りながらテーブルの上の朝食を食べているエヴァンジェリンに、マグナが来たことに気づいた茶々丸が彼の分の朝食をテーブルの上に置いていた所だった。

「ほれ、さっさと席に着かんか。」

「ああ……………うん。」

急かされて席に着くマグナ。食べながら聞こえと食べ始める。

「で、どうして此処に居るんだ？」

一旦箸の手を止めてエヴェンジェリンに目を向ける。向けられたエヴェンジェリンは味噌汁を啜りながら、

「ん、まあ呪いを解いてくれた礼の様な物だ。」

「いや、お前の礼じゃなくて茶々丸の礼だろ？朝飯作ったのお前じゃないし。」

「う、うるさい！茶々丸は私の従者だから良いんだ！」

「あ、この出汁巻き卵つめえ。」

「ありがとうございます。マグナ様。」

「様なんでつけないでくれ。何かムズムズするからさ。」

「では……マグナさん、と……。」

「まあそれで良いかなあ。」

「お前ら私の話を聞けえ……！」

箸を振り回しながら喚くエヴェンジェリンをマグナは澄ました表情で、

「おいおい、箸は振り回す物じゃないぞ。」

「マスターお止め下さい。」

茶々丸にも止められしょんぼりするエヴァンジェリン。その姿は
「ダイク・エヴァンジェリン闇の福音と呼ばれている時とは大違いである。カリスマ（笑）」

「ご馳走様。美味しかったよ茶々丸。」

「お褒め頂き光栄です。」

「（・・）」

「でだ、俺が副担任になる教室って此処か？」

「ははは、そうですね……。」

朝食を食べ終え学校に着いたマグナは早速タカミチに連れられタカミチが担任する教室の前に来たのだが……。

「あのさ？ドアの間に黒板消し（チョークの粉たっぷり）が挟まってるってどんな教室だよ。主に生徒と時代の面で。」

「ははは、元気のいい生徒達なんですよ。」

その生徒をフォローをする発現をするタカミチだったが、その笑い声は乾いた物だ。

「じゃあ私が行くので呼んだら来てもらえませんか？」

頷くのを確認したタカミチは2・Aへ足を踏み入れた。といきなり黒板消しが落ちてくるが手で防ぐ。その他にもロープやバケツな

どさどさまなトラップが襲い掛かるが全て避けて教壇につく。

「はい皆お早う。早速だけど今日から新しい副担任が来ています。」

その発言に生徒達が一気に盛り上がる。

え？どんな人なのかな？ 男の人？女の人？ そんな話聞いてないよお！

そんな騒ぎも何時も通りといった様に注意もせずにマグナを呼ぶ。注意しても無駄というのが分かっているのだろう。

「では、マグナ先生入って来てください。」

その呼びかけに溜息一つ。自分も2・A魔窟に入っていた。

「これは人の声か?」と思えるほどの爆音で声を出した。その声の衝撃波でガラスはミシミシと音を立てるのをマグナは確かに聞いた。

ふと窓際の席を見てみると少し透けた少女が席に座ってこちらを見ているのに気づいたが気にするほどでもないかなあ　といった具合で目を逸らした。というか今の質問攻めにあっているこの状況を打破しなければいけないのが最優先事項だった理由もあるが。

「え?!この人が副担任?!　　というかそのやる気のない目は何?」
「!　　包帯もしてるし・・・」

「ぎゃいぎゃい質問を自分にぶつけられる。いい加減やめて欲しいなあ　　と思った矢先、」

「はいはい!質問ならこの朝倉和美にお任せだよ!」

赤い髪を一纏めにした活発そうな少女がこちらに寄ってきた。そのせいか一旦質問の嵐が止む。

「えーじゃあ早速質問に行きたいと思います！まず身長体重生年月日年齢担当科目を！」

「えー身長は身長190体重75生年月日は11月15日年齢は秘密で科目は社会。」

「む、じゃあ何でそのやる気のない目をしてるんですか？」

「んーそれはね。ここに入る前から面倒くさいクラスだなあと思っちゃったわけですよ。」

「ヒドッ！といわれるが実際そんなテンションしてるほうが悪いと思うマグナだった。」

「じゃあその右目の包帯は何でしてるの？」

そう聞かれるとちょっと考える仕草をしたマグナは右目に触れながら、

「昔此処に傷が付いちゃってさ。隠してるだけなんですよう。」

「えー？先生実は邪気眼とかじゃないんですか？」

不意に深緑色の髪の毛をした少女がふざけた調子で聞いてきた。それに対してマグナは、

「うるせーぞ早乙女。そのアホ毛触覚引き抜いて殺虫剤をぶちまけんぞ？」

ひい！ と頭 詳しくはアホ毛だが を抱えてお
びえた表情に変わる。 と朝倉が何かに気づいたかのように、

「あれ？先生名前分かってるの？」

「まあな。一応副担任なんだ、受け持つクラスの生徒の名前ぐらいは来る前に覚えとくもんだ。」

何をいつてるんだ？といった様に答えるマグナに皆は内心驚いていた。

「で、最後の質問なんだけどこのクラスの中に気になる人なんかいる？」

ニヤリと笑って爆弾を投下する朝倉。がそれすらも道化師マグナには効かない。

「えー？まだまだ皆子供ですよ？そんな感情なんてないからね・・・
・・おーいあからさまに舌打ちをするなー。」

舌打ちをする朝倉に注意をしたマグナはああコレは面倒くさいことになりそうだなあ 一人ぼんやり思っていた。

『ようこそ！2 - Aへ！！』

そんな言葉と共に始まった歓迎会はかなりの盛り上がりを見せていた。

学園内人気ナンバー1の屋台である「超包子」が料理を振る舞い皆それぞれパーティーを楽しんでいるように見える。

マグナは主役であるという理由で中央の席で飲み食いをしている。

「おい。なんで此処に酒があるんだー。先生は一時間ほどそいつに問い詰めたいんだが？」

「まあまあ細かいことは気にしなさんな。今は楽しもー！」

といった具合にはぐらかされてしまうのだがマグナ自身一々未成年の飲酒ごときで説教するつもりは更々無いのだが。

177

「せんせー！携帯とか持ってないの？」

「ああ？携帯は・・・っとコレだけd」かりるよー！」・・・あれ？」

ポケットから愛用している携帯を取り出した瞬間明石教授の娘で

ある明石裕奈にもぎ取られそのまま皆が集まっているところに突撃していった。

マグナ先生の携帯ゲット！ マジで！？メルアド教えて！ 私にもー！

などといった声が聞こえてくるが気にしたら負けだと思い込み酒を啣る。

「ああ・・・うめえ。」

ジャーキーを取り出し噛みながら酒を飲む。とマグナを見て何か気づいた和泉亜子が近づいてきて、

「先生、今それ何処から取り出したんや？」

「ん？それは手品だよ。」

ひらひらと手を振りながら答える。その答えに興味を示したのか
さらに、

「へえ、先生手品できるのかな？ちょっとやってみてくれへん？」

「いいよー」と返事をしたマグナは手を振る、と其処にはいつの間
にかナイフが握られていた。

「おおー」と感嘆する和泉を尻目にまた手を振ると今度は指の間に
ナイフが四つ挟まれていた。

それを放り投げて服の袖の中に入れ袖を下に向ける。が入れたは
ずのナイフは落ちてこない。驚いている皆　手品をやつて
ると聞いて集まってきたようだ　を見て少し笑うと反対の
袖を下に向けると違う方の裾に入れたはずのナイフが落ちてきた。
それをすかさずまた指で挟んで皆に見せる。

少し呆然としていた生徒達だったが直ぐに気を戻すと惜しみない拍手がマグナに降りそそがせる。指に挟んだナイフを振ると一瞬で消えた。それを見た皆ははた拍手をマグナに送った。

当のマグナはナイフをしまつと席に着き、またジャーキーを食べながら酒を飲んでいた。

マグナが行った手品は本当は手品ではなく暗器を使った見せ掛けだった。それに気づいたのは極僅かの生徒だけであったが。

マグナの暗器に気づいた生徒達はいったい何を思ったのか？

お嬢様を守る剣士はお嬢様に危険が及ぶものか見極める事を決心

した。

若いスナイパーの傭兵は面白い人が来たものだとして心の中で口笛を吹いた。

甲賀中忍と中国拳法の使い手はただただ手合わせを試みたいとうずうずしていた。

この思いが彼に何をもちたらすのか？……………まあ大体厄介事なのだろうが。

よくはしゃぐクラスは明るいけどそのクラスの担任って苦労すると思う。

（後書

考えたんですが南斗と北斗のこの技を出して欲しい！みたいなのを募集したいと思います。技の名前（南斗　　というように）どのような技なのか、あればどんな風に使って欲しいのか　などなど募集します！どんどん書いてください！もしかしたら君の書いた技が小説内で使われるかも？！みたいなノリで行きます。

どれ・・・手合わせ願おっか！） D I O分は皆無です）（前書き）

ちよつと早めの更新

どれ・・・手合わせ願おうか！） D I O分は皆無です）

夜、俺は学園長に言われた通り、世界樹前の広場に来ている。

「では、皆に紹介しようかの。紅き翼の一人である『武神』のマグナ・R・ヴァーミリオンじゃ。」

「まあよろしくな。」

周りがざわざわする。具体的には、「あの紅き翼の?!」「とか」「サインを・・・」とかだった。

「さっそくで悪いんじゃが実力を測りたくてのう。タカミチ君と戦ってもらえるかの?」

「はいはい、わかりましたよーっと。」

そういつと周りにいた俺とタカミチ以外の人は離れていく。

「おい、タカミチ相手に負けるなよ?」

「では、失礼します。マグナ先生」

うん、茶々丸はいい子だな。

「貴方と手合わせするのは久しぶりですね。」

「紅き翼にいた頃以来だな。」

「では、行きますよ。」

side 三人称

タカミチがポケットに手を入れて構える。

それに対してマグナはタカミチと同じ構えを見せている。

「マグナさん、どうして僕と同じ構えで来るんですか？」

タカミチがわずかに動揺しながら聞いてくる。

「なに、あの爺共に俺の手の内を見せたくなくてな。これじゃ不満か？」

おどけながら答えるマグナにタカミチは苦笑する。

「いえ、どんな形にせよ貴方に僕の全力を出せることには変わりありませんから。」

「そうか、じゃあ……」

パン！

マグナとタカミチの間に乾いた音が鳴った。

「へえ？これには反応できるか。」

「僕だって成長してるんですよ。」

パパパパパパパ！

マグナとタカミチの間で見えない何かが衝突しあっている。

それはどんどん速く、そして確実に多くなっている。

まるでマシンガンを打ち鳴らしているような爆音が夜の街に響いていく。

タカミチの顔を見ると苦しそうにしているが、それに対してマグナは涼しい顔で居合い拳を放っている。

パン！

とマグナの放った一発の居合い拳がタカミチの顔に直撃した。

「あてててて、やっぱり威力が違いますね。」

「まあそれは仕方が無いさ。錬度が違うからな。」

直撃したところをさすりながら立ち上がるタカミチ。その手には魔力と気。

「そろそろ本気でいきます。」

その手を合わせて威卦法を使う。マグナはそれを見て笑う。

「おう、それを使えるようになったか。じゃあ俺も全力で居合い拳を打とうか。」

ドオン！とまるで大砲を撃ったような轟音が響きまた、マグナとタカミチの間で衝突する。

ふと、マグナがタカミチのほうを見るとそこにタカミチはいなかった。

背後に殺気を感じ横に飛ぶ。

一瞬後、マグナのいたところに豪殺・居合い拳が打ち下ろされる。

「ヒューー あぶねえあぶねえ。」

「嘘つかないでくださいよっ！」

容赦なく放たれる豪殺・居合い拳を全力の居合い拳で打ち消し、飄々とよける。

と、さっきまで動いていたマグナが止まり、タカミチも技を放つのを止める。

「いやはや、想像以上に成長したな。」

「これでも、鍛錬は欠かしてませんから。というより僕の咸卦法の居合い拳を普通の居合い拳で打ち消せる貴方が以上だと思えますけど……。」

「まあ、これでも大戦時紅き翼の一人として戦ってたからな。で、お前の力はわかった。その力に対して南斗の技で迎えよう。」

そういつて向き直るマグナ。南斗という単語に対して警戒を強くするタカミチ。

ひゅううううと木の葉が舞い上がり静けさが場を支配する。

と舞い上がった木の葉が地に落ちたその刹那、マグナが技を放った。

「南斗・残鳥斬」

目にも留まらぬ速度でタカミチに肉薄し、そのまま通り抜ける。警戒していたタカミチは少し拍子抜けしたような感じで振り向こうとした、がそれはマグナの一言で動作を止めることになる。

192

「動かないほうがいい。動いたら死ぬから。」

それを聞いたタカミチはピシリと石化したように動きを止める。遠くで見ていた魔法使い達は何故そんな子供だましのような言葉で止まるのか？ と己の内に疑問を膨れ上がらせるが、エヴァンジェリンは違った。

『闇の福音』である彼女はマグナがすれ違い様タカミチの体を神速ともいえる速度で切り刻んだその瞬間が見えていた。

だが、切り刻まれたのになぜタカミチは生きている？ という疑問が自分の中に出てくるのを感じた。

それはタカミチの前に来たマグナの説明を聞いて啞然とする。

「何をした　って顔をしているな？　いいぜ、教えてやろう。」

そういうとマグナは豪殺・居合い拳で抉れた地面にある岩を手に取りながら、

「すれ違い様お前の体を神速で切り刻んだ、それだけだよ。お前が今生きてるのは南斗水鳥拳の研ぎ澄まされ過ぎた拳で切り刻まれたからだ。切断されてるけど暫くの間動かなければ癒着するけど大体の相手はそんな事知らずに動いてバラバラになって死ぬけどな。」

「そんなことが……。」

「ゆえにお前は動いちゃいけない、動いたらバラバラになって死ぬからな。まあアレだ。洗礼された刀と技で切られても相手は切られたことを認識できないみたいな事だよ。」

手に持った岩を高速の手刀で切り裂くが、岩は切られてのにもかわらず依然その形を保ったまま。切断線もない。それをタカミチが見たのを確認したマグナが岩の両端を手で持ち、上下に少しずつ。そう少しだけなのに岩は元から切れていたかのように綺麗な切断面を見せながら上下に分かれた。

簡単にいうがその技を使えるようになるまでにどれだけの修練を積んだのだろうか？どれだけの苦痛を伴ったのか？その説明を聞いた全員がそう思い、背中に冷たいものが滑り落ちる。もし彼が敵になったら……ということ想像したのだろう。ただでさえ恐ろしい技を持っているのにこれ以上に危険な技を持っているとしたら……？

「おい、爺。これでいいだろ？」

「う、うむ実力はわかった。では解散じゃ。」

見ていた学園長たちに実力を十分見せたと思ったマグナは緊張の色を隠せない彼らに確認をとると、動揺しながらも解散の合図をだして魔法使い達を戻させる。背中を見せて帰る彼らの背には恐怖と畏怖が張り付いていたのをマグナは見逃さなかった。

195

疲れた様に溜息を吐くと、とぼとぼと自分の家に帰る。その横にはエヴァンジェリンと従者である茶々丸が付いてきていた。

「……何のようですかい？マグナさんはさっさと帰りたいんですけど？」

「タカミチに使った南斗水鳥拳について教える。茶々丸のデータベースにもなかったからな？」

そうエヴァンジェリンが言うと茶々丸は少し申し訳なさそうな顔をした。マスターである彼女の役に立てなかつた悔しさから来るものだろう。

その質問をマグナは興味なさそうな声色で、

「駄目ですよー。一応俺の隠し技みたいなのだからねえ？教えるわけにもいかんでしょう？」

そういつと機嫌を損ねたのか、顔をそむけた。と今気づいたかのように未だ動けずにいるタカミチに、

「ああ、そうだ。タカミチー俺その技で切り刻まれた面が癒着する時間知らないからねー？」

「ええ?!じゃあいつ僕は動けるようになるんですか?!どうにかしてくださいよ!」

と悲痛な叫びを聞いたマグナは目を閉じて考える様に俯く。その姿をみたタカミチは助かったと安堵の息をもらす。

と目を見開いたマグナはタカミチに近寄ることもなく背を向けてひらひらと手を振りながらだるそうに言った。

「帰って寝る。今日はしんどい。」

「マグナさあああああん??!!」

世界樹前広場に一人取り残されたタカミチは誰に聞こえるわけでもないのにまた、悲痛な叫びを上げた。

その後結局タカミチが動いたのは朝方になってからだ。タカミチ曰く何時動けるのか分からなかった。精神が恐怖とストレスでガリガリ削れた。アレは動かなくても十分危険な技だ。と疲れたように学園長に話したという。

どれ・・・手合わせ願おうか！(D I O分は皆無です)(後書き)

今回は感想にあった南斗残鳥拳を出しました。

他にも技は募集しているのでどしどし感想に書いてください！

なんか最近PCの調子がおかしい。いきなりアンノウンエラーとか出てきて書き途中の小説が何度パーになったことか・・・orz

あ！acfaの大量虐殺ルートクリアしました！何度レイテルパトラッシュに撃墜されただろ・・・？

普通とか常識とかいつてるやつは大体非常識の世界に踏み込んでくるのが当た

2・Aの生徒である長谷川千雨の嫌いなものは3つ、『人ゴミ』と『予想のつかない事柄』そして『非常識』である。

だが、この学園はその嫌いなものをすべて満たしているといっても過言ではない。

テンションの上がり過ぎているクラス。その中でも忍者（本人は否定）や異常な戦闘能力を持つ戦闘中毒者、バトルジャンキー中学生の癖に頭脳が大レベルに達している生徒もいる。

朝は異常な数の生徒数で駅のホームは溢れかえり、登校途中に科
学研究部のロボットも見ることもしばしば。

そんな学園で千雨はある結論に達した。ああこの学園は異常なんだということに。

そんなことを千雨は早めの登校中に考えていた。早めに登校するのは人ごみに巻き込まれないためである。

そんなこれ以上カオスになるのか？すら思っていたクラスがまたカオスになる原因になる教師が入ってきた。

それは銀色の髪の毛に蒼い目。しかしその目はやる気が一欠けらも見受けられない。その右の目には傷を隠しているという名目で包帯をつけており、ネクタイを外して首を自由にしている。授業中には時々喫煙しどこからともなく食べ物を取り出して貪る。あれ？これどう見ても教師じゃなくね？

千雨の常識からすればマグナはまさに『非常識教師』、少なくともクラスの連中には常識は通用する。しかしあの教師にだけは常識が通用しないのだ。

授業はだらけきっているし、分かり易いように説明しているが、説明途中で急にめんどくさいなどの理由で授業をつぶし、自由時間にさせたりもしていた。

「（っーかありえないだろ？常識的に考えて。銀髪蒼眼とかこの二次元だよありえないだろ！学園も学園でおかしいし、っーかロボットが普通に一回ってるってどういうことなんだ？ホダのA B Oより発達してんじゃねーか！おかしい、おかしいだろ子の学園は！あれ？おかしいのか？おかしいのは私のほうなのか？アレ？なんか分からなくなってきた。」

と頭の中で熟考している千雨は前から来る、その悩みの中心でもあるマグナが来ていることには気づかなかつた。

「あーだりい、マジだりいよー。月曜とか半端なくダルいだろ？そう思わない？世界の皆さん？」

とメタ発言をしながらぼやいているマグナは空を見上げているのと同じく千雨を視認できていない。

そんな状態で彼女たちはどんどん近づいて行って、

「ん？わあっ！」

「オウフ」

正面からぶつかってしまった。マグナは少しよろけ、千雨は尻餅をついてしまう。痛む尻を擦りながら立ち上がり、謝ろうとする、がマグナの姿を見てげっと言葉を漏らしてしまった。幸い気づいていないようだがこの非常識教師と一緒に居たくはない。

「あ、すいません先生。ちょっと考え事をしてたもので……。では私はこれで。」

手早く荷物を持ちマグナの隣を通り抜けその場を離れようとした。そう離れようとした

「ああそうだな。ネットアイドルさん」

その一言で千雨は凍りついた。なぜ？なんでこいつが知っている？まだ誰にもバレてないのに……。そんな考えが頭の中を駆け巡るがそんな考えを一蹴してマグナに詰め寄る。

「ちょ、なんでそのことを知ってるんだ?!」

「いやー。ネットサーフィンしてて見たことあるなーと思ってさ。更新暦とか見ると中学の時間割、しかも2・Aがやっつてることがわかってねえ。ピンクの髪をして、なおかつ身長も普通。お前しか居ないんだなーこれが。」

すらすらと答えていくマグナ。その答えを聞いて千雨は段々顔が真っ赤になっていくのを感じていく。

「ウギヤアアアアアアアアアア！」

と羞恥心に耐えられなくなった千雨はついに絶叫した。するしか羞恥心を紛らわせる方法がなかったのだ。

「ああ、安心しろ。皆には言わないでおいてやるから。」

「本当だな？絶対言うなよ！」

ちよつと涙目になりながらマグナに鬼気迫る様な気持ちで確認を取る。それが本当だとわかるとその場で頭を抱え、うっかり悩みを吐き出してしまった。

「はあああ、どうしてこの学園は異常なやつが多いんだ・・・？」

その悩みにちよつと驚いた表情を見せたマグナは頭を抱えている千雨に一言漏らした。

「へえ？千雨はこの学園の異常性に気づいてんのか。」

「………は？おいそれどういうことだよ？」

漏らした一言に敏感に反応する。マグナの言ったことはまるで普通はこの学園の異常性を理解できない、という風を感じ取れたからだ。

その理由を聞き出すべく千雨はマグナに疑問をぶつけた。ぶつけられた本人はいたって普通に、

「そのまんまの意味だよ。考えてもみる、この馬鹿デカイ学園にその学園の中心にある世界樹、中学生とは思えない頭脳、身体能力。さらに発達した科学分野にぬらりひよんの学園長。これでニユースにならないほうがおかしいんだよ。」

いや、学園長の話は関係ないだろ と心の中でつつこんでおくがその説明にひどく驚愕していた。自分の悩みをずばずば言い当てられたからである。

「あんだ・・・一体何を知っている？」

強い疑惑を感じさせられる言葉で千雨は聞く。その質問にマグナは、

「この学園がどうしてここまで異常であり、なおかつ外で騒がれないのか。ぶっちゃけた話この学園の秘密だな。」

「、」

その発言に好奇心を覆っていた常識^{仮面}が崩れていくのを感じた。脆く、土でできたボールが水に溶かされ崩れていくようなそんな錯覚。そしてマグナはついにその一言を繰り返した。

「長谷川、お前は真実を知る気はあるか？」

その発言にさらに崩れるスピードが上がるが、それを無理矢理心の奥にねじ込む。

「……私は普通に暮らしたいんだ。そんなもの知っても意味がない。」

好奇心を押さえ込み、苦し紛れに答える千雨にマグナは、

「まあいいさ。どちらにせよお前はこちら側に踏み込んでくる。知る時期の差ってやつだ。」

「……どついでとだ。」

「こちら側とは一体何なのか？こちらに踏み込むとはなぜそういえるのか？」

「簡単なことさ。長谷川、お前はこの学園の異常性を正しく認識している。そう、この学園は異常だと。それを理解できているお前は異常なんだよ。」

「異常……？私が異常……？」

「ああそうさ。この学園の異常を理解できているやつが異常なのさ。」

「こちら側に踏み込むって何でそういふことが言える？」

その質問にマグナは

「いったらどう？お前はこの非常識を正しく理解できている。だからこちら側に踏み込んでくる。それだけだ。」

「お前がこちら側に来るのは確実なことだ。時期を早めて対策を練るのもよし、このまま知らずに後々から来るのもいいだろう。さあ選べ。」

こちら側って言うのはこの学園の異常性の原因だけど と付け足した。マグナは嘘を言っているように見えない。しばらく考えた後疲れたようなため息を吐き出した後千雨は決心した。

「……ったくわーったよ。乗りかかった船だ。知ってやるうじやないか、この学園の秘密ひそいひそいっていうのを。」

その答えにニヤリと口の端を歪めるマグナ。

「お前の答えはわかった。いいだろう教えてやるよ。この学園の秘密つつーのをな。」

「で、その秘密ってのは何なんだ？」

「ここで話すのは拙い。放課後俺の家に来い。そこで教えてやる。」

「あんたの家って・・・！」

指定の場所を聞いてちょっと赤くなる千雨。マグナはそれに気づかず、

「そこが一番安全だからな。じゃあ放課後こいよー。」

と言つとさつさと職員室に向かつていく。その後ろ姿を見ていた千雨は我に返り自分の教室に向かつていった。その足取りはどこか軽く見えた。

普通とか常識とかいつてるやつは大体非常識の世界に踏み込んでくるのが当た

テスト勉強に打ち込みたいので六月いっぱいには更新が遅れると思います。何卒ご容赦を。

説明って言うのは中々に疲れるものだ(前書き)

テスト勉強中にもかかわらずに投稿
遅くなりました。

説明って言うのは中々に疲れるものだ

放課後、千雨はマグナの家に居た。この学園の秘密を知るために。

「それで？この学園の秘密ってのは何なんだ？」

「ああ、そうだったな。この学園の秘密、それは

「

無意識に周りの空気が張り詰めたものになる。千雨の体も自然と固まり、心臓の音が煩く聞こえ、喉が唾液を飲み込む。そして彼の口からその秘密が放たれた。

「魔法だ。この学園は魔法使いの本部みたいなものになってるんだよ。」

それを言うとマグナは珈琲を入れたカップに口を付ける。その秘密を聞かされた千雨はというと、

「……………はあ？」

呆れていた。それもそうだろう。いきなり魔法が存在するなどといわれてもそうなのかと納得できる訳が無い。二次元の中でしか存在しない魔法というものが。

「聞いてたか？長谷川。魔法だよ、魔法。」

「いや、聞いてたけどよ……………」

戸惑う千雨にマグナは苦笑する。

「まあその反応も仕方が無いけどな。いきなり魔法がありまーすなんていわれてもな。」

バスケットの中に入っているクッキーを一つまみし、千雨に勧める。それを一枚取り口に運ぶ。

「その証拠みたいなものはあんのか？」

クッキーの甘味を珈琲で打ち消し、口をスッキリさせてマグナを見る。その視線にまだ疑惑が入っていることにまた苦笑し、

「証拠、か……。魔法を見せれば納得できるんだらうけど……。」

「だったら今ここで見せてくれよ。魔法そのことを知ってんだっいたら使えるってことだろ？」

その催促にちよつと寂しげな表情を見せたマグナは、

「悪いけど魔法を見せることはできないね。だって俺使えないもん、魔法。」

「は？だって魔法を知ってるんだろ？だったら……。」

「んー、詳しい話は省くけど、俺は元々魔力が無いんだよ。特異体質みたいなの？まあ所謂落ちこぼれだねえ。」

被せる様に千雨の反論を封じ込み、その理由を伝える。

「落ちこぼれ？それだとしてもちよつと位はあるんじゃないのか？」

「残念ながら少しも無いね。0だよ、ゼロ。いいか？長谷川。人の魔力は例えてみればタンクだ。そのタンクに魔力が入っているんだ。」

どこからか紙とペンを取り出しスラスラとタンクのような千雨の絵を描いていく。

「魔法を使うってことはタンクの中の魔力を出して使うって事と同じだ。・・・これはわかるよな？」

コクリ　とうなづく千雨。ゲームなどを好む彼女にとってこの説明は判りやすいものだった。ドラ　エでいうMPという風に千雨の脳内で変換されている。

「当然魔力が無くなれば魔法は使えなくなる。まあ生命力を糧にすれば使えるけど死つていうリスクが付きまとう。で、俺の場合だけど・・・。」

目を罰にして倒れる千雨を書き、自分の絵を描く。

「俺の場合は魔力タンクは存在してるんだ。けどそのタンクの中が全部コンクリで埋められてるみたいな感じだ。」

ペンを置き、改めて千雨を見る。千雨もマグナを見るが、その視線は納得したものに変わっていた。

「ふーん。いろいろと大変なんだな、先生も。」

「そうですねー大変なんですよー。」

気だるげに答えるマグナに千雨はため息をついた。

「まああんたが魔法を使えないことは判ったけどやっぱ納得はできねえよ。」

「そつだろつな。やっぱり本物見せないと納得はできねえよな。」

「まーな。でどうやって魔法を見せてくれんだ？」

急かされるマグナはちよつと笑い、

「ああ、ちよつと待ってな。後もう少しで来るはずだから。」

誰が、とは考える必要は無かった。それは家のドアを開けてやってきた。

「じゃまするぞ。マグナ。」

「お邪魔します。」

「おーい、いっしょに。」

入ってきたのは千雨のクラスメートである、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと絡繰茶々丸だった。エヴァンジェリンは千雨を一瞥すると、

「おい、何故私のクラスメートの長谷川千雨がいるんだ？」

「こんにちは、長谷川様」

エヴァンジェリンはマグナに問い、茶々丸は律儀に千雨に挨拶をする。はあ と頭を少し下げ、挨拶に答えるとエヴァンジェリンとマグナの話が聞こえてきた。

「何故貴様はいいつに魔法が存在することをを教えた？」

「あいつにはこの学園にかかっている認識障害魔法が効き難いらしくてな、近い未来あいつはこっちに踏み込んでくる。じゃあいつそのこと今こっちについて教えよう みたいな感じだな。」

「……私には貴様の考えがわからん……。」

頭を抱えたエヴァンジェリンをみたマグナは思い出したように、

「あ、丁度いいからエヴァ、俺に魔法サキタ・マキカの射手撃ってくれ。そうでもない」と長谷川が納得できないらしいからな。」

溜息を一つ吐き出したエヴァンジェリンは何も言わずに手を翳し光の矢をマグナに向けて放った。驚く、というよりはやっぱり言った様な表情を指定いる千雨を尻目に片手でバスケツトの中に入った自作のクツキーを摘むと迫ってくる魔法の射手の方さえ向かずにまるで自分の周りを払うように、手首のスナップを効かせて目前まで迫ってきた魔法の射手に当てる。魔法の射手は拳に当たると八方に霧散し、少し光ってから消えていった。

「どうだ？これで信じるか？」

「…….…….…….こんなもん見せられて信じない方がバカだろうが……」

。」

疲れたような表情と声色の千雨の答えに満足そうに頷いたマゲナはピッと指を千雨の前で二本立てた。

「で、魔法を認識したお前には身を守る術が必要だ。その方法は二通りあってな、一つ目は……。」

立てた指の一本を折る

「魔法を実際に学ぶことだ。これは自分で魔法を使い戦うことになるから危険度が跳ね上がるがな。んで二つ目は……。」

残りの指を折りつつ説明する。

「バックティオー仮契約をする。仮契約ってのは簡単に言えば仲間になる契約みたいなもんだ。」

その説明を聞いていた千雨が首を捻った。

「それが私の身を守ることと何の関係があるんだ？」

するといままで口を閉ざしていたエヴァンジェリンが口を挟んできた。

「仮契約をすると仮契約カードバクティオーというものがでてくる。それが武器にも防具にもなりうるかもしれないからな。」

「あんたは誰かと契約でもしてんのか？」

ゴソゴソと懐を探して自分のカードを3人に見せる。

「これが俺のカード。」

3人はまじまじとカードを見ていたがエヴァンジェリンがひらめいたように顔を上げた。

「これを使えば千の呪文の男とコンタクトが取れたのではないのか？」
「サウザンド・マスター」

その問いかけにマグナはガリガリと頭を掻くと

「あーそれナギと契約したものじゃねーんだよ。」

ナギ、千の呪文の男という人名に千雨は疑問符を頭の上に浮かべるが聞くのは後にしようと思った。

「は、ほう、ではナギではないならば誰と契約をしたのだ？」

ちよつと米神に青筋を浮かべて聞くエヴァンジェリンの背後には心なしか阿修羅が背後に見える。それに気づかないのか、はたまた気づいているがスルーしているのかのんきな声で

「テオドラだ、テオドラ。」

「なっ！？帝国の第三皇女のか?!」

「またもや聞きなれない単語が出てくるが第三皇女という単語だけは聞き取れた。」

「ちよつと待ってくれ、第三皇女？どういうことだ？」

「こいつが仮契約した相手は魔法界に存在するヘラス帝国の第三皇女のテオドラという女だ。」

苦々しげに言うエヴァンジェリンに千雨はまた首をかしげた。

「なんでそんなお偉いさんといつが仮契約できてんだ？」

「？なんだマグナ、お前まだ自分が英雄だということを話してないのか？」

「……は？」

「後々言つつもりでしたー。だってめんどくさグオ！」

「そんな理由でか……。」

言い方と理由の二面でイラついたエヴァンジェリンはパンチを一発マグナの頭に叩き込んだ。

「英雄？コイツが？」

未だにゴロゴロと床を転がって痛みをどうにかして緩和しようとしているマグナに残念ながら英雄のえの字さえも見受けられない。

「事実だ。コイツは大戦時、魔法界を救った英雄の一人として尊敬されているが本人はこうだからな、無理もないだろう。」

「だからそんな偉いやつと契約できたのか……。」

「まあそんなことはどーでもいーからどっちにすんの？魔法か、仮契約か。」

その問いかけの答えはもうでていた。

「決まってる、仮契約だ。魔法を習って態々危険の中に身を晒す必要もないしな。」

「じゃあ決まりだ。仮契約するぞ。」

そういつとマグナと千雨の足元に仮契約の魔方陣が浮かびあがった。とここで千雨が気づいたように、

「そっいえば仮契約の方法はどうやるんだ？」

「それは二通りある。一つはお互いの血液を交換する。で二つ目は接吻、所謂キスだな。」

「キス!？」

その方法に驚くが何を今更といったようにマグナは

「はあ………はあ………」

千雨は恥ずかしさのためか未だ赤くなっている。仮契約の瞬間を見ていたエヴァンジェリンはフリーズから立ち直りマグナに詰め寄った。その時茶々丸がどこか寂しげな顔をしていたのには誰も気づかなかった

当のマグナはエヴァンジェリンの怒りに備えながら呟いた。

「どっつしてこつなるかねえ………?」

普通の世界から見れば普通ノーマルに見える彼女はしかし、異常の世界からすれば異常アブノーマルとして捕らえられていた。

異常アブノーマルの彼女は道化師の誘いに乗り、異常の世界に踏み込む決意をした。

彼はそれを歓迎し、迎え入れた。

だが原作は大きく歪められる事になる。ネギと仮契約するはずの千雨が彼と契約をしたのだから。

それによって彼は、彼女は、そして世界の人々はどんな物語を創り出していくのか。

決められていた道は崩れ去り、新しい道が霧によって霞む。

この先は誰にも、道を歪めた彼にさえもわからない。

しかし彼らは一步一步確実に進んでいく。それがどんな道であろうとも。

発明品は世のため人のため！（前書き）

学校のテストは終わったけど明日模試あるんですよ・・・。
O R Z

発明品は世のため人のため！

「で、お前のアーティファクトが戦闘向きでも支援向きでも無かった為、急遽俺自作の魔道具をあげたいと思いまーす。」

その後マグナはエヴァンジェリンにこっそり絞られ、やっと開放してもらったら千雨は茶々丸にアーティファクトの出し方としまい方を教えてもらっていた。教えてもらったやり方でアーティファクトを出してみたら原作通りのアーティファクト。コスプレに使えるなんていつていたがぶっちゃけ戦闘では全く使えない。そのため、マグナの自作の魔道具を渡すことに決まったのだが……

「あんま落ち込むなよ。一応コスプレには使えんだから。」

「うるせー！アーティファクトがネット系ってどういうことなんだチクショーー！」

とこんな具合に混乱している。無理も無い、実際何が出るかわか

らないというドキドキ感をまさかのネット系で攻められたのだから仕方が無い。密かに合ってるな、なんて思ったのは秘密だが。

「まあお前自身ネットやってるからだろ？諦めろ、アーティファクトは変えられないからな。」

「うう、なんでここにきてまでネットなんだ……。」

沈み込んでいる千雨を慰めながらマグナは懐から大きな瓶を取り出した。その中にはボトルシップのごとくりゾート地があった。

「それは”別荘”か？」

怒りが収まりクッキーを貪っていたエヴァンジェリンが瓶に気づく。

「まあな。これも俺が自作したやつの一つ。お前の”別荘”をモデ

ルにしているけどな。」

「ほう、ではそこにお前の魔道具があるのか？」

「だな。じゃあさっさと入ろうぜ。」

そっぴいなながらマグナは床をつま先で二回突く。すると彼らの目の前に扉が現れた。扉が出てきたのを確認したマグナは瓶をテーブルの上に置く。

「え？何この扉？」

「ほれ、さっさと入りな。」

千雨の背中を押して扉の中に入れながらふと気づいたように、

「ああ、そういえば茶々丸メンテあつたんだっけ？」

「そうですか？」

「だったら……。」

そういうとマグナの目の前にパソコンのキーボードらしきものが現れ、それを操作していく。不思議に思ったエヴァンジェリンが、

「何をしているんだ？」

「んー？茶々丸のデータをこの”別荘”の鍵に変換中。」

「どっぴいっことですか？」

「っとしゅーりょー。いわば俺がさっきやったみたいになれば茶々

丸が床突いてもこの扉が現れるって訳。」

「なっ！ズルイぞ！私のデータも入れる！」

「ああ、私のも頼む。」

「ケケケケケ、俺ノモ頼ンダゼ」

「あーハイハイ……ってアレ？」

聞きなれない声にキーボードをたたく音がいったん止まる。声の主を探していると……。

「おいチャチャゼロ！勝手に喋るな！」

「ダツテゴ主人黙ッテノモ案外疲レルンダゼ？」

「だとしても一寸ぐらい黙ってる！」

「・・・何アレ？」

エヴァンジェリンが棚の上にある人形（？）と口喧嘩をしていた。というか一方的にエヴァンジェリンが人形（？）に言い放ち、人形（？）が柳のように受け流しているだけなのだ。

「おい、言い争いはいいからそいつの紹介をしてくんね？」

「オッ！ソイツハ解ッテンナ！」

「クッ！・・・まあいい、コイツはチャチャゼロ。私の初代の相棒^{パートナー}だ。」

「マアヨロシク頼ムゼ。」

とてとてと柵から落ちてマグナの前に来ると手を出してそう言った。その手を握りながらマグナは

「ん、よろしく頼む。」

手を離すと3人のデータをに入れるためにキーボードを打ち込む。
エヴァンジェリンの殺気が酷いが……。

「うーっし、データのインプット終了。これでお前等がやっても大丈夫だ。」

「おお……そうか。では遅くなったが貴様の”別荘”とやらを見せてもらおうか。」

「では私はメンテナンスに行ってきますので。」

エヴァンジェリンが扉の中に入り、それを確認した茶々丸が一礼をして外に出て行った。マグナはチャチャゼロを抱えると千雨の背を押して、

「お前もさっさと入っちなまえ。」

「ケケケケ！後ガツツカエテンダ。」

「わーっただよ！ったく……。」

深呼吸を一つすると意を決したように扉に手を掛け、開けて中に入ってしまった。チャチャゼロとマグナは目を見合わせて、

「才前モ大変ダナ？」

「全くだよ。」

「はー、中々いいところじゃないか？」

「クッ！負けた……。」

二人(?)が中に入ると千雨は素直に感嘆し、エヴァンジェリン

は何故か落ち込んでいるのを見た。

「イキナリダナ。」

「だな。……おいそろそろこっち来ーい。」

呼びかけると千雨は早足に、エヴァンジェリンはふらふらとした足取りで近寄ってきた。エヴァンジェリンの落ち込みの理由は聞かずに、

「じゃあお前に俺の魔道具渡すからちょっと待ってる。」

「ああ……。」

「（、）（、）（、）」

エヴァンジェリンがすごい顔をしていたが無視してまたキーボードを取り出して今度は物凄いスピードで叩き始めた。それに呆気にとられた千雨は恐る恐るマグナに聞いた。

「お、おい。何でそんなにキーを叩くんだ？」

その問いかけにマグナは目を向けずに

「この速度じゃなきゃ防壁解除セキュリティするのに一時間は掛かるぞ。」

「一時間?!」

一時間掛かって解くセキュリティなんて聞いたことが無い。なんてことを考えているうちに、タンツ、とエンターキーを叩くとまた扉が現れた。ただしそれは先ほどの扉ではなかった。いや、扉ではない。一言で表すなら機械の壁。壁に何か数字とローマ字が付けられており、ピカピカと光っている。それに手を伸ばし、何回かローマ字と数字の入り混じったパスワードを入れるとマグナの手に何かが見えた。

「……ネックレス、か？」

マグナの手にあっただのは銀の十字架のネックレスだった。それを千雨に渡して付けるように指示する。付けた千雨は、

「何にもおこんねえぞ？」

「当たり前だ。おいエヴァー！いつまでも落ち込んでないでこっち来て手伝え！」

「（……）（……）ツハ！私はいったい何を……？」

ようやく正気に戻ったエヴァンジェリンがマグナの近くに行き、何か耳打ちされている。と一寸面喰らったような表情のエヴァンジェリン。その目は、本当にいいのか？と言ったような目だった。それを見たマグナは頷き、エヴァンジェリンに催促する。とエヴァンジェリンとマグナが離れていき、千雨は突然のことに驚きを隠せな

い。一体何が始まるのだろうか？と考えていると離れたエヴァンジェリンがぶつぶつと何か言っているのに気がついた。

「リ・・ラ・・・ラック・ラ・ック・・た・・氷・・、闇の・・
闇・・従・・・・雪け常・・吹雪
」

遠くでエヴァンジェリンの手が持ち上がりその手が光る。それを
淡々と見ているとエヴァンジェリンが叫んだ。

「闇の吹雪！！」

光り輝く手をこちらに向けて叫んだかと思うとゾッとする寒気を
感じ前を確認するとそこには、

「はぁ！？」

吹雪が指向性を持ってこちらにやって来ていた。通り過ぎた大地
は凍りつき、その勢いを弱めることも無くこちらに向かってくる吹
雪をみて呆然として見ていた。避けられない。ああ結局こうなるの

か……。こうなるんだつたら一発殴つとくんだった……。そう
思いながら向かい繰る吹雪をただ見ていた。
そしてその吹雪が、

ネックレスが光り輝き、千雨を守るようにして現れた巨大な障壁
が吹雪を打ち消した。

「……………は？」

「おー成功だな。やっぱ成功しただろ？」

「まあ中々じゃないのか？」

全くついでに行けない千雨は我に返るとマグナに詰め寄った。

「おい！いきなり何すんだ！死ぬかと思ったじゃねーか！」

「いやーお前に渡したネックレスの効果の確認さね。だからそんなに怒るなよ。」

「これが怒らずにいられるか！説明もなしに行き成りやるんじゃないえ！」

「いやだつてお前そんなこといったら絶対拒否するだろお前。」

言葉に詰まった千雨をみて息を吐くと、

「そのネックレスだけだな。いちおう最上級魔法以外は障壁で防げるようになってるから。」

「まあ貴様にはそれで十分だろう。」

「……まあお前等がそういうならいいんだろうが……。」

長い溜息を吐くとネックレスを弄りだした。マグナからの贈り物だということを変更して認識したのだろう、ちょっと顔を赤く染めて。

それを面白くないように見ているエヴァンジェリンがマグナに何か言おうとした時茶々丸が戻ってきた。

「お待たせしました。」

一礼するとエヴァンジェリンの隣に並ぶ。それをマグナは、

「おーお帰り。……………」

マグナは誰もいない所に目を向けると溜息を吐いて冷たい言葉を言い放った。

「では、招かれざるお客様にはご退場して貰いましょうか。」

袖から投擲用のダガーを両手の指に挟んでそれを躊躇無く誰もいないはずの空間に投げつけた。

その投げられたダガーは誰もいないはずの空間に音を立てて突き刺さった。

「……………え？」

「ふん……………」

「はぁ……………」

「……………」

三者三様の反応をし、茶々丸は申し訳なさそうな顔をした。そしてそのダガーが突き刺さった空間が歪み、人影が現れた。その人影は……………。

「いたたたたた……………」

「これは拙いネ……。」

マグナの生徒である、万能の天才・超鈴音とマッドサイエンティストでもある葉加瀬聡美だった。

発明品は世のため人のため！（後書き）

部活に入るので更新が遅れる可能性が・・・orz
出来るだけ更新を遅れないようにしたいのですが遅れてしまったら
申し訳ないです。

なにコレ・・・ふざけてるの・・・？(前書き)

反省も後悔もしてない。むしろよくやったといいたい、自分に。

なにコレ・・・ふざけてるの・・・？

麻帆良学園 2 - A の超鈴音は俗に言う天才である。

留学生ながら学年1位の学力であり、スポーツも万能の無敵超人「麻帆良の最強頭脳」の異名をとる。多くの研究会で重要なポストに就き、東洋医学研究会では会長の任も務める。

所属している研究会はお料理研究会、中国武術研究会、ロボット工学研究会（大学）、東洋医学研究会、生物工学研究会、量子力学研究会（大学）など普通の中学生ではまず入ることのない研究会に所属している所もある。

だが、彼女は唯の天才ではなかった。

超鈴音は100年以上先の未来からきた未来人だった。目的は世

界征服、といった今の時代小学生でも考えないような、壮大な目的。しかし、彼女にはそれができる方法があった。

魔法。

魔法の存在を全世界に公表し、それによって歴史を改変する。普通の魔法使いが聞いたら卒倒しそうなやり方。

しかし、彼女はやるしかないのだ。彼女の時代の、世界の未来を変えるために……。

「で、未来人兼火星人である超が何故ここにいる？」

「アイヤー、そこまで知られているのか。流石は「武神」のマグナ・ヴァーミリオン。」

超と葉加瀬のステルス迷彩がマグナによつて破壊された二人は現在マグナの前に正座させられ尋問・・・というよりは質問しているのだが、マグナの迫力がその認識を許さない。それほど自分の”別荘”に無断で入られたことが気に食わないのだろう。その侵入の手引きをした茶々丸は罰としてエヴァンジェリンにネジを巻かれている。

「いーから質問に答えろー。先生はこつ見えても怒ってるんですよ？」

いつものやる気のない目で二人を見据える。表情は変わらないが威圧感が増す。と、ここで超が答えた。

「茶々丸がああ、の武神が魔道具を作り出していると話してくれてネ、私と葉加瀬が興味を持ったからダヨ。」

いつもの明るい声で、しかし言葉を選び彼の逆鱗に触れないように細心の注意を払いつつ言葉が発する。無断で侵入したのは此方なのだ。しかもこの空間では逃げられないし、最悪二人ともども消される可能性があるのだから。

心の内にそんな不安を抱えつつマグナを見ると空間を支配していた威圧感がなくなり、マグナは頭を掻いた。

「なんだ、そんな事か。見たいなら直接俺に言えよ。」

威圧して損した、なんてことを言いながら二人を立たせる。幸運なことには足は痺れてなかった。と罰を終えた茶々丸とエヴァンジェリンが戻ってきた。

「見せてくれるのか？」

超がマグナに問う。それにマグナは頷きながら、

「何回も入られるのは気分が悪いからな、見せてやるよ。」

と出しっぱなしだった機械の壁により、また弄くり回し発明品を取り出した。その発明品は・・・

「…………ゼリー？」

彼の足元にあるのは水色をした棒状のゼリーのようなものだった。触ってみると弾力がありプニプニしている。

「ゼリーじゃない。これは防具だ。」

「防具、ですか？これが？」

葉加瀬が超と同じようにゼリー（？）を触る。とマグナがそのゼリー（？）を持ち上げ空に放った。空を舞ったゼリー（？）はそのまま地面に落ちずに彼の周りに浮かんでいた。そのゼリー（？）は彼の周りをクルクルとゆっくり回る。それを見ているエヴァンジェリンにマグナは殴れ、と言った。少しうろたえていたエヴァンジェリンは意を決して彼を殴ろうとした

『なッ?!』

その場にいた全員が驚愕した。エヴァンジェリンが放ったパンチは周りに浮かんでいたゼリー（？）によって阻まれていたからだ。衝撃は弾力に殺され、マグナには届いていない。

「これは防具の一つの一決して届かない痛み《Eldolor que no llega》。相手の攻撃の全てを止め、使用者に攻撃を届かせない。」

「これは・・・凄いな。想像以上だよ・・・。」

「凄いです！これは

」

「むう……この感触は癖になるな。」

「ほんと、無茶苦茶だな……。」

エヴァンジェリンのを放させ倉庫に仕舞う。と千雨が、

「何で仕舞うんだ？そんなに強いんだったら使えばいいだろ？」

チツチツチ、と指を揺らしたマグナ。

「そんなことしたらつまなくなるからやだ。」

それに頭を抱えた千雨を一瞥すると機械を弄る。

「次は俺の傑作の一つを見せてやるよ。」

その発言に全員期待に身を固める。コンソールを弄り終わったのを見た全員はその手に何も無いことに疑問を隠せない。不意に少し離れた所に影ができているのを千雨は見た。それはどんどん大きくなって、『ソレ』は落ちた。

砂煙を立て、轟音を立て、地面に落ちてきた『ソレ』は球体状。鋼色で一部分に円が描かれている。二階建ての一軒屋位の大きさの物体。

それをみて啞然としている全員に聞こえるように、彼は言った。

「俺の傑作の一つ、自立型巨大機動兵器
スだ。」

ソルデイオ

なにコレ・・・ふざけてるの・・・？（後書き）

ちよつと短かったかな？なんて思います。
ぶつちやけ部活がキツイです。

あんなものを浮かべて喜ぶか、変態共が！（前書き）

今回はソルディオス中心でいきたいと思います。

反省も（ry

あんなものを浮かべて喜ぶか、変態共が！

ソルディオス

正式名ソルディオス砲。ソルディオス

砲は本体から分離飛行しての攻撃が可能であり、本体が破壊されても攻撃を継続することが出来る。防御面でもプライマルアーマーが施されていることから、本体と同等以上に堅牢。プライマルアーマーはアサルトアーマーとして攻撃に転用することも出来る。また、クイックブーストによる高い機動性を誇り、連射速度、命中精度共にソルディオスを上回る仕上がりとなっている。

ソルディオス砲の飛行は通常ブーストを使用せず、浮遊に近い。コジマ粒子の新しい運用法の鍵とされている。

「とまあこのぐらいかな。こいつの説明は。」

「なんというか・・・滅茶苦茶だな・・・。」

ソルディオス砲の説明が終わった後千雨はそう呟いた。コジマ粒子やらプライマルアーマーなど訳のわからない単語も出てきたが相当ヤバイ代物だということがひしひしと伝わってきた。

「というカ、コジマ粒子とはなんなんダ？」

「それは私も思いましたね・・・こんな巨大な兵器を動かせる物質って・・・。」

興味深げにソルディオス砲を見ていた超が葉加瀬を引っ張ってくる。その質問を聞いた葉加瀬は対象をその答えに変更したようだ。

「コジマ粒子は俺が7年前に発見した新物質だ。コジマってーのは適当につけた名前。磁界で還流を安定させるだけで各種兵器に対する防御フィールドとして利用出来たり、高濃度に収束して射出することで高い破壊力を持った粒子砲として機能するなど、軍事的に極めて高い可能性を秘めているんだ。」

「それを何故先生は学会などに発表しなかったんですか？」

少し興奮気味に、そして失望したようなニュアンスを含んだ声で葉加瀬は言った。しかしマグナはそれを苦笑で返した。

「確かにコジマ粒子を発表すればグンツと科学の世界は成長するだろうね。」

「それだったら……。」

「でも、なにか素晴らしい物があるんだったら相応の代償がある筈なんだ。」

未だ苦笑しながらマグナは続ける。

「コジマ粒子は確かに莫大な可能性を秘めている。でも、代償が問

題なんだ。」

「……その代償ハ？」

黙って聞いていた超が目を開いてマグナを見る。それには少しの恐怖と、多くの期待が混じっていた。

「環境さ。散布されたコジマ粒子は、非常に広範囲の生態系へ長期に渡って深刻な悪影響を及ぼすことが分かってる。コジマ粒子は夢の物質であると同時に、地球に対する環境汚染原としての顔も持ち併せているし、コジマ炉の内部など密室条件の超高濃度では、ついに金属さえも蝕むことが確認されているんだよ。」

「んな物ホイホイ使われたら地球に住めなくなるんじゃないか？」

的確な千雨の発言に頷く。

「そう、地上が汚染されればそれこそ人への害が広まる。使われて

何十年かすれば地球はコジマ粒子に染まり、地上なんかに住めなくなる。」

「そうだったんですか……すみません、そんなことも知らずに。」

ペコリと頭を下げ葉加瀬にマグナは顔を上げるように言った。

「何、気にすることはない。知らなかったんだっただら知ればいいことなんだからな。」

「大切なことは自分の発明した物が本当に人の役に立つのか考えることさ、考えなしに発表でもしたらそれはあつという間に広まって害があるって気づいたときには後戻りできないこともあり得るんだからな。」

「なるほど、ネ。でも一寸聞いていた印象とは違う感じネ。」

頷きながら感心したように言った超に聞く。

「おいおい、違ってたってどういうことだ？つーか俺ってなんて呼ばれてんだよ？」

マグナは科学者の顔も持っているが実際表に極力出ずにやってきた。彼が発明したものは発表せずに販売している。彼の二つ名は「武神」や「絶望の道化師」などが一般的だ。しかし、一部の人には非公式での呼び名が流通している。だから少し、興味があった。そして彼女の口から言われた呼び名は……、

「、」

「へ、変態技術者？」

「ああ、そうダヨ。数々の発明品を出しているが、少しズレた発明品で魔法界の技術者からは『変態技術者』なんて呼ばれているんだネ。」

「（、；、；、）」

「いや、それ位で泣くなよ……。」

ズーンと落ち込むマグナをエヴァンジェリンが慰めている。と思わぬところから助け舟が出された。

「素晴らしいです！この発明品といい、あなたは天才ですか?!」

「「「は?」「」」

その叫びに未だに落ち込むマグナを除く全員が向くと葉加瀬がキラキラした目でマグナを見ていた。

「この洗礼されたフォルム！発想も素晴らしい！私たちが^{科学者}涙を呑んで挫折した設計^夢を現実にするその才能！そこに痺れる憧れるウー!!」

後半は何を言ってるのか分からなかったがその褒め言葉にマグナは一瞬で立ち直った。

「分かってくれるか?! どうして誰もこの素晴らしい発明品達を理解してくれないんだ……。でも理解してくれる人が現れてよかったです!」

諸手を上げて喜ぶマグナに賛同する葉加瀬、もう誰も彼らを止める事はできない。

「……………世界は広いネ……………」

「ああ、まさかハカセ以上のマッドサイエンティストに会えるとはな……………」

「ああハカセがあんなに楽しそうに……………」

「……………どうしてこうなった?」

眩きは彼らの耳に届かず、風に乗って消えていった。とギヤーギヤー騒いでいたマグナと葉加瀬がピタリと止まった。

「お、おい。終わったか？」

恐る恐る言葉を投げかけるが反応しない。と急にマグナはコンソールを弄り始めた。止める間もなく入力し終わった彼の目は既に巨大なオブジェクトに成りかけていたソルディオスに向けられていた。葉加瀬も同じ方向に目を向けている。何が始まるのか全員そちらに視線を走らせ、見ると、

汚染の危険性があるコジマ粒子で動くはずのソルディオス砲が起動し、空中に浮遊し、何か緑色の光を漏らしていた。

それをキラキラを通り越し、ギラギラした目で見る葉加瀬に、胸を張ったマグナ。何か危険な香りがプンプンするため止めようとしたが、如何せん遅すぎた。

「発射ア！」

その掛け声は誰が言ったものだったのか、掛け声と同時に緑色の閃光が”別荘”の巨大な建造物に当たり粉々に崩れていく様を彼女達は見ただ。

ヘーイとハイタッチするマグナと葉加瀬すら視界に入れずに、今しがたその凶悪な砲撃を撃ったソルディオス砲を見ながら千雨は、エヴァンジェリンは呟いた。

『あんなものを浮かべて喜ぶか、この変態共が！』

あんなものを浮かべて喜ぶか、変態共が！（後書き）

ちなみにコジマ粒子のことを説明していますが実際使われているのは魔力なので安心設計です。

ちなみにこれで千雨と超と葉加瀬との絡みは終了です。長かったなあ……。

次からは戦闘要員達との絡みです。いつになったら原作はいるのかな……？

正義と悪と『英雄』と（前書き）

戦闘描写って難しいですね、文才が欲しいorz

正義と悪と『英雄』と

英雄・・・それは何時の時代も人はその響きを欲するものだった。民の為に、『悪』を裁き『正義』と広為す。その姿は人々を魅了し、英雄を崇めるのには十分すぎるほどに。崇め、奉られた英雄はその名を歴史に刻み、永遠を過ごす。それは英雄という名だけではなく、だけではなく、犯罪者としての名も同じように・・・。

「何故貴方のような『英雄』が『悪』であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと一緒にいるのですか!？」

反吐が出る。そうマグナは思った。マグナの目の前には気が高そうな金髪の少女。傍らには気が弱そうな赤毛の少女もいる。二人はマグナを・・・正確に言えばマグナと隣にいるエヴァンジェリンと茶々丸にその視線は向けられている。

三人は元々買い物に行っていた。他愛のない話やエヴァンジェリンを茶々丸と一緒に弄るなど楽しい時間を過ごしていた。目の前の少女たちに出会うまでは。

「……それは一体どういう事だ？」

エヴァンジェリンが目を瞑りながら目の前の少女……高音・D・グッドマンに問いかける。

「ですから、何故マグナ様が貴方と一緒に入るのですか？と聞いているんです…！」

怒ったような雰囲気醸し出し答えをぶつける。

「『英雄』が『悪』と一緒にいてはいけないのか？」

生徒たちに見せるやる気のない眼ではなく、厳しい視線で高音と赤毛の少女　佐倉愛衣を射抜く。その視線に佐倉は怯えるが、高音は少し怯むだけ。

「当たり前です！『英雄』の貴方が『悪』のエヴァンジェリンと一緒にいては他の魔法生徒や先生方に示しがつきません！」

示し。多くのものは彼の本質を見ようとはしない。唯、英雄として見るだけ……。

「示し、ねえ？」

「そうです！ですから一刻も早く彼女から離れ

」

「断る」

高音の意見を一蹴する。拒否されるとは思っていなかったのか、唾

然としている高音。

「何故お前に俺の生き方を決められなきゃいかんのだ？」

それに、と心の中で呟く。

エヴァンジェリンは臆することもなく聞いていたがこちらを見たときにその眼の中に少しの恐怖があった。それは孤独。600年間も待ち、ようやくと共に歩ける存在を見つけたというのにそれがいなくなってしまうという恐怖、孤独。

600年間生きて吸血鬼エヴァンジェリンは強い、誰にも負けないぐらいに。しかし本当は怖いのだ、また一人になることが、孤独になることが。

そんな眼をしたら行けなくなる。そう呟いて断った。エヴァンジェリンには何のことかわからなかったが行かないとわかると怯えは消えた。

「そうですね・・・でしたら力づくも已む無し・・・！」

と呟くと彼女に周りに影が集まっていく。それを見てやるしかないと思ったマグナは戦闘体制　　といっても歩幅を少し広めただけだが。

「『黒衣の夜想曲』」

影が形を成す。仮面を被り、黒い服を着た存在が彼女の背後に現れた。それを見た佐倉は仮契約カードを取り出し、アーティファクトの箒を取り出した。

それを見たエヴァンジェリンが一步前に出ようとするがマグナに止められた。ここは俺がやる、といって高音と佐倉の前に立つ。まあいつがこのくらいで負けるはずもないか、と思いつつ傍観に徹する。茶々丸も同じようだ。

「はあっ！」

高音が飛んで、マグナに詰め寄る。後ろの影を操作しマグナに向かって拳を突き出す。それをひよい、と避けたマグナは正拳突きを放つが、影が彼の拳と高音の間に黒い装束を出しそれを許さない。

「聞けば貴方は魔法が使えないらしいですね？だからこそ己の肉体を使って戦うらしいですが・・・この最強モードに打撃は通用しません！貴方に勝ち目はありませんよ！」

喋っている最中にも攻撃を繰り返す高音。それを時には避け、時には逸らしながら防御に徹する。と不意に高音がその場を離れ、マグナと距離を取った。マグナはそれを不思議に思ったが直ぐにその答えは出ることになる。

「ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にて再生の徹よ、我が手に宿りて、敵を喰らえ。」

「（詠唱魔法か！）」

佐倉が何をしているのかわからなかったがこれで合点はいった。高音が前衛で敵を引きつけ、佐倉が魔法で援護、といった典型的な戦い方。しかしそれは他の魔法生徒より熟達した動きだった。

「『紅き焰』！」

手を此方に翳し、詠唱を完成させるとマグナの周りが不意に明るくなり、熾烈な炎が彼を襲う。爆破音が響き、煙が上がりマグナの姿

が見えなくなった。

茶々丸はそれを見て助けに入ろうとするがエヴァンジェリンがそれを止める。黙って見ている、といわれ仕方なくそこに留まる。

「これで・・・」

高音は粉塵をみて呟く。倒すまでは行かなくともダメージは与えられたはず。しかし彼女は気づかない、
その台詞はフラグだと・・・。

「あーあ、この服結構気に入ってたのに・・・。」

粉塵の中から出てきたのは服が焦げ付いた無傷のマグナだった。その姿に驚きを隠せない二人だったがさすが優等生と言っべきか、直ぐに立て直しまだ攻撃に移ろうとする、が、

「疾！」

瞬動で佐倉の後ろに回りこみ、そのまま首に手刀をうち、意識を奪う。これで砲台は潰した。後は高音だけになった。

「クツ、しかしこの最強モードには打撃は……。」

歯噛みするが打撃を受け付けられないというアドバンテージを得ている高音はまだ戦えると確信しているようだ。しかし、相手が違いすぎる。放たれる影の矢を掻い潜り、また拳を突き出す。それを自動操縦で防ぐ影。ここまではさっきと同じパターン。しかしここからが違った。

「な?!」

一瞬で彼女の視界から掻き消えたマグナを探そうとする高音だった

が、視界の下に動く存在を見つけ視線をそちらに向ける。そこには消えたはずのマグナが掌を当てており、そして一言。

「俺に接近戦を挑んだのが間違いだったな。」

ドオン！と大砲がなるような音と共に高音は崩れ落ち、同時に影も消えていく。服の下に何か着ていたようで脱げ女になる事はなかったが。

「しゅーりょーつと。」

気の抜けるような声と共にパンパン、と手を払いエヴァンジェリンの元に向かう。と背中から気を失っていなかったのか高音が呻く様な声でマグナに、

「貴方は……英雄なのに……。」

その言葉にマグナは高音に言った。

「そんなのが英雄だったら、俺は英雄になんかなりたくなかった。」

その背中はどこまでも遠しく、それでどこまでも悲しげだった……

o

正義と悪と『英雄』と（後書き）

部活動が厳しくて生きるのが辛い（涙）

親にも勉強しろ！とか言われて・・・最悪PC使えなくなりそうですorz

馬鹿と鉄は使いようって・・・あれ？（前書き）

林間学校の次はなんかの旅行というハードスケジュール。課題ができねえ！そんな時に書きました。

馬鹿と鉄は使いようって・・・あれ？

朝、それは一日の始まりだ。

学生は学校に行くために登校するし、社会人は自分の職場に行くために通勤する。ありふれた光景だ。

しかし、麻帆良学園の朝はそんな普通の光景ではない。だってこの学園は異常なのだから・・・

そんな学園の中にある一軒家の主は目覚ましの鳴る音で目覚めた。

主の名前はマグナ・ラグナイト・ヴァーミリオン、麻帆良学園中等部の社会の教師を勤めている。しかしそれはこの世界、旧世界での話だ。本当の彼は魔法使い、それも英雄の。数多の戦場を走りぬけ、戦友と共に魔法界を救ったのだ。そんな彼は寝起きだからか瞼が完

全には開いておらず、欠伸を一つしてリビングに向かった。

「早かったな、マグナ。」

「おはようございます、マグナさん。」

金髪の少女と緑色の髪の毛をした少女がマグナを迎えた。この光景には慣れたといわんばかりに二人に言葉を返し、席につく。緑の髪の毛の少女・・・茶々丸は作った朝食をテーブルの上に並べていく。

「今日はパンか・・・。」

金髪の少女・・・エヴァンジェリンは洋風の食事にちょっと満足げだった。それを一瞥し、いただきますと呟いてパンを齧った。うまい、いつもマグナはそう思う。茶々丸の料理の腕はかなりの線を行っている。マグナも作れないことはないのだが、人並みなので茶々丸に任せている。

「俺もこないいい子が欲しいなあ・・・。」

人知れずポツリと呟いた願望は二人の少女に火を付けた。

「私がいい子、ですか・・・？」

「ああ、炊事洗濯家事全般できる子をいい子と呼ばずになんと呼ぶんだ？」

「あ、有難うございます・・・。」

「おいマグナ、私はいいい子k」

「テメエは違えよ。」

「はあ？なんだと！！！」

「だから食事時に暴れるなど。」

「自重してくださいマスター。」

「（・・・）」

これもマグナ家では何時もの光景なのだった。

ここ麻帆良学園は桁違いの広さを誇る。小中高、大学職場もそろっている。通勤通学者が極端に多い。徒歩、自転車、バスに電車。拳句の果てにはバイクやローラーブレードにスケボーで通学する生徒もいるぐらいだ。ちなみにマグナは自作のスケボーで通勤している。自作のスケボーは『変態技術者』という嬉しくも何ともない称号を持った彼が作っただけであって普通ではない。見た目はただのスケボーのだが板についているスイッチを踏めば時速300kmまで加速できるという少年探偵もビックリなスケボーだ。他にもいろいろな機能を備えているが、ここではあえて割合させていただく。

まあそんな速度を出す気はさらさらなく、出すとしたらせいぜいスクーターぐらいの速度だ。せつかく備えた機能も使わなければただのお荷物、でもロマンとかなんとか言っつけて付ける彼はやっぱり『変態技術者』なのだろう。

そんなこんなで通勤しているマグナはふと前を見てみると何か黒い物体が空を飛ぶのを見ることができた。その黒い物体をよくよく見てみると、それは屈強な男、それも一人だけではなく次々と空を舞う男たちは麻帆良学園では極々ありふれた光景だった。その屈強な

男たちを何人も吹っ飛ばしているのは一人の少女だった。マグナはその姿をみて顔を顰め、スケボーから降り、気づかれないようにその少女の脇をすり抜けようとするが……

「先生見つけたアル！」

オウシット！といわんばかりの顔をしながら声のしたほうを見ると男たちを吹っ飛ばしていた少女がキラキラしたような目でこちらを見ていた。彼女の名前は古菲、マグナの担当している生徒の一人だ。性格は明るく素直な性格で、一言で言えば単純。バカレンジャーの一人であるバカイエローでもあったりする。そんな彼女は生粋の戦闘バカ……なんだかバカとつくのが多いような気がするが……だが戦闘バカというものも侮れない。古菲はこう見えても中国武術研究会部長でもあったりする。

麻帆良学園都市で毎年秋に催される大格闘大会「ウルティマホラ」の2002年度チャンピオンであり、表での麻帆良の最強の存在は彼女だ。それゆえ挑戦者が後を絶たず、毎朝挑戦する男共が空を舞うという光景に出会える。そんな単純な彼女が最近興味を向けているのは、

「……………クソッ。」

悪態をついているマグナだった。

「さあ先生今日こそ勝負アル！」

なぜ彼女がマグナに勝負を挑んでいるか、それは山よりも低く、海よりも浅い理由があった。

『なんか強そうだったからアル!』

聞いた答えがこれだからか、それとも他の理由があるのかは知らないがマグナは頑なに勝負を拒否。そもそもここでは普通の教師なのだ。無駄にそのような力を出す必要もなく、毎朝絡まれてはうまく避けながら通勤するというのが彼の最近の日課だった。

「だーから、俺は嫌だと言っているだろーが。お前はバカか? あーん?」

「勝負アル!」

「こいつぁダメだ。脳味噌入ってんのかどうかも怪しいな。」

「勝負してくれアル。」

ズルズルとマグナの腕に掴んでどうにか勝負してくれと懇願する古菲をスルーしようとするが、なぜか今日はたちが悪い。なかなか諦めてくれないのだ。どうにかしようと思いついた。どうにかしようと思いついた。どうにかしようと思いついた。

「おい古菲、しょうがないから勝負してやる。」

その言葉に明るくなる古菲だったがマグナは言った。

「ただし、俺の出す問題に答えられたらな。」

夜、マグナは森の中にいた。警備員としての仕事をしながら朝のことを思い返す。

結果としてあの目論見は成功した。一応情けとして中学校レベルの問題を出したのだがバカイエラーである彼女の頭では解けなかったようだ。

マグナは勝負する代わりに問題を解けと古菲に条件を提示した。一日一回キリだが当分は持つだろう。問題に答えられるころにはもう魔法関係に首を突っ込んでそうだし。

そんなことを考えている彼は肩にマスケット銃を乗せていた。所謂虫干しの意味を兼ねて取り出したのだが今夜は敵の気配がしない様で少し残念だった。クルクルマスケット銃をまわしながら帰ろうとしたマグナはそのまわしている銃を不意に右方向に構えた。

「……誰だ？」

そう一声かけるとがさがさと草を踏む音が二つ。彼はその気に覚えがあった。警戒を解き二つの人影に体を向ける。草を踏み分け来たのは、

「やあ今晚は、先生師匠。」

「……今晚は。」

自分の担当する生徒の龍宮真名と桜咲刹那だった。

英雄としてのチカラ 前（前書き）

課題と宿題と学校とテストと・・・やばい、ゲシユタルト崩壊を起
こしそつだあばばばばばばばばばばばば

英雄としてのチカラ 前

暗闇の向こうから出てきたのは彼の担当クラスの生徒である龍宮真名と桜咲刹那だった。

真名は微笑、刹那は真剣な表情でマグナを見据えている。そんな視線を受けているマグナは口を開いた。

「何でお前等がここにいるんだ？」

「まあ深い理由はないんだけどね、刹那がどうしても言うから。」

「はい、魔法界で英雄と言われている貴方の実力が知りたいのです。」

コクリと頷く刹那の目は強い輝きを持っている。その輝きは自分の力を試したいという物だろう。ため息を吐いてマスキット銃をまたくるくる回す。回しながら真名に聞く。

「で、お前は何なんだ？ただの付き添いにしちゃあ殺気が強いな。」
目の前にいる二人は殺気を出してマグナに威嚇している。刹那だけならまだしも真名にまで殺気を向けられる筋合いは無い。その疑問に真名は殺気を収めることなく、

「何、久しぶりに師匠先生に教えを貰いたくてね。」

そついいながら腰のホルダーからデザートイーグルとベレッタを引き抜いて構える。刹那もマグナの戦友の詠春から譲り受けた夕凧を構える。真名の構える銃は一見エアガンに見えるが・・・

「オイオイ、本物マシンかよ？」

「久しぶりの師匠との手合わせなんだ。張り切ったっていいだろう？」

構えを解くことも無く軽口をたたく真名。それに反して刹那はただマグナを見つめて彼の僅かな動きさえも見逃さない、といったよう

に集中している。その反応をみてマグナは息を吐き出しくるくる回していたマスキット銃を肩に担いだ。その様子に真名は軽口を叩くのをやめ、刹那はより一層集中を高める。

そしてマグナは何故かマスキット銃を肩に担いだまま発砲した。炸裂音に飛び出しそうになる二人だったが押しとどまる。そして放たれた弾丸だがマグナの後ろの樹木に向かって飛んでいった。するとギーン！と金属音が響き、何か大きな影が葉の中から飛び出し、刹那と真名の間に着地した。その影とは・・・

「危ないでござるなあ・・・」

これまた彼の担当するクラスの生徒の一人、長瀬楓だった。糸目でクラスで龍宮真名に次ぐ長身であり、バストサイズも那波千鶴に次いで2位。名簿の欄外に「忍」の文字が記されており、事実甲賀で最高の位である中忍。しかし本人はこれを否定。口癖が、ござる。やニンニン。などと言っている時点で忍者なのだが、本人はこれを認めていない。ちなみに彼女は古菲と同じバカレンジャーの一人でバカブルーの位置についている。寮では鳴滝姉妹（風香・史伽）と同室で、部活も同じ「さんぽ部」であり、2人からは「かえで姉」と呼ばれる。週末には寮を出て、郊外の森林地帯で訓練を兼ねたサバイバル生活をしている。戦闘に関しては忍者らしく分身の術を駆使し、特に影分身ではアルビレオが感心するほどの数と密度のものを修得している。また移動に関してもアルビレオが気配を察知できないレベルである。武器としては、クナイや超巨大な風車手裏剣を使用する。この手裏剣は取っ手部にある紐の仕掛けを引っ張ることで刃を高速回転させ、盾代わりにすることなどできる。

「(だったような気がする・・・)」

最近薄れてきた原作知識を必死にかき集めて情報を形成する。情報を見て気づくが結構厄介な相手である。マグナは魔力が無い代わりに気配の察知は他の紅き翼のメンバーの誰よりも秀でていて。なので感知はできる。しかしクナイや手裏剣など使っている割には何故か忍者ではないと言う。秘匿しているらしいのだがバカブルーだからか、みんなにはバレバレである。なんか痛い、見えて。

「で、長瀬は何でこんな所にいるんだ？打ち抜かれたいのか？」

「拙者は唯、マグナ殿と戦いたいだけでござるよ。」

朗らかに言っつて二人と同じ戦闘体勢をとる。完全に戦わないという選択肢は忘却の彼方へすつとんでいったらしい。頭を抱えそうになるが一人増えたぐらいだからまあいいか、と開き直った。マスクett銃をしまいこみ 真名以外の二人は驚いていたが だらんと手をブラブラさせて、

「戦うのは構わないよ。まあ俺じゃないやつが戦っただけだし。」

その発言に眉を潜める三人に対して続ける。

「俺と戦い「たいなら」分身である俺を倒してか「ら言ってくれよ」

『!?!』

マグナの声が急に増えたと思ったらマグナの背後から彼が出てきた。分身だと分かるのに、驚きを隠せない。それはその分身の密度の濃さにある。出てきた分身は3体、しかしその密度の濃さは本物と大して変わらない。むしろ本物が誰だ分からない。それほどの密度の濃さなのだ。

「分身の俺を倒し「たら本物の俺と」戦ってもいいぜ。」

きつた言葉を次の分身が引き取りながらしゃべるその光景はちょっと気持ち悪かった。しかし、

「いいのかい?そんな条件で。」

「たかが分身、倒して見せます!」

「ニンニン」

その威勢のいい叫びにマグナはつい噴出してしまった。片手で顔を抑えながら笑う。

「威勢がいいのは認めるが……まあがんばってくれや。」

ようやく笑い終わったかというところについて消えてしまった。ご丁寧に気配まで完全に消して。

残ったのは真名、刹那、楓に三人のマグナ^{デコイ}。その三人が口を開いた。

「ここでは三人を相手にするには聊か狭すぎ」るな。分かれてやるう。」

ついて来い、と一言言つとそれぞれが違う方向に飛んでいった。それを見て真名達は顔を見合わせて笑う。そして彼女達はそれぞれの方向に散っていった。

V S 真名

「こっちは真名、か。」

「まあどっちにいったって師匠と戦うことになるんだからいいじゃないか。」

構えながらもマグナと話を続ける。

「なあ・・・いい加減俺を師匠とよぶの止めてくんない？俺がいつお前に教えたよ？」

「それは許可できないね。私は師匠と呼び続けるよ。」

だって・・・と呟くとあの時の記憶が蘇ってくる。あれは彼女がまだマジステル・マジミニステル・マキの魔法使いの従者として、魔法使いによるNGカンパヌラエ・テトラコードネス O 団体「四音階の組み鈴」に所属していたときだった。彼女はそのとき今と違ってあまり銃の扱いに慣れてはいなかった。そのことで

落ち込む毎日を過ごしている彼女に衝撃的な出会いがあった。

その日、彼女は銃の腕前を少しでも上げよう的に向かって発砲していたが、やはりうまくいかずに落ち込んでるとき、『彼』が現れた。『彼』は彼女の姿を見て声をかけた。何故落ち込んでいる？と

真名は言った。銃がうまく撃てない。泣きそうになった彼女を見た『彼』は言った。

『銃は持つとき、銃だとおもっちゃいけないよ。腕の延長だと考えなさい。』

『彼』はそういって真名の頭を撫でて去っていった。試しに『彼の教え通りに銃を腕の延長だと考え、撃った。すると中心までとはいかないが当たったのだ！それが間違いではないと気づくと『彼』にお礼を言おうと走っていった。しかし、いない。どこを探してもいないのだ。その時四音階の組み鈴のリーダーに『彼の居場所を聞いた。右目に包帯を巻いた蒼い目の『彼の事を。それを聞いたリーダーは彼女に『彼』が英雄であることを告げた。聞くと『彼は各地を放浪しているらしい。もしかしたら会えるかも、と希望を抱いたのだが結局会えなかったのだが・・・

今、ここに、目の前に彼がいる！あの時から練習を重ねて一流のスパイパーになった自分を見てほしい！

だからこそ彼女は構えたデザートイーグルの引き金を引いた。轟音と共に放たれた弾丸は空気の壁を突き破り、回転しながらマグナの

額に向けて進む。しかし、英雄である彼はその弾丸をいともたやすく避けた。髪を何本か持っていていかれたが気にしている暇は無い。すぐさま袖からマグナムを取り出し、撃鉄を引き上げ真名に向かつて撃つ。それを木の陰に隠れてやり過ぎし、マグナムに向かつて二丁拳銃を乱射する。木の陰に隠れて弾丸を防ぐが、連射の速度と玉の威力でガリガリ木が削れていく。ため息を吐くと玉の切れた頃合を見計らって飛び出し真名と向き合う。銃を此方に向けながら真名は警戒を解かない。すると彼は持っていたマグナムをしまった。

「どうしたんだい？降参かい？」

そんな軽口にマグナムは少し笑った。

「ククッ、まああの頃よりは成長したらしいね。」

「やっと思い出したのか。遅すぎるよ。」

「うるせー。」

そう軽口を叩きながら会話する彼等には隙が無い。何かすれば真名が引き金を引けるからだ。だがそれを前にしてもマグナムは余裕を崩さない。

「これで、この勝負は私の

」

そう続けようとした彼女の両手に衝撃、耳に轟音。気づくと彼女の両手には拳銃は無かった。その代わりに彼の両手には拳銃、というにはあまりにも大きい銃が握られていた。右手は白、左手は黒と対照的なその二丁銃を彼女は知っている。そしてそれを手にした時の彼の呼び名を……。

やれやれといったようにその場に座り込む。マグナは白と黒の銃を持ちながら近づいてくる。

「まさか――一度壊れたらもとに戻らない者ハンフティ・タンフティを使われるとは……。」

316

「お前調子ぶっこきすぎた結果だよ？」

意地悪っぽく笑うと真名も不貞腐れたようにそっぽを向いてしまった。

「だって師匠に私の成長した力見てほしかったんだ……。」

その子供っぽさにまったくすと笑ったマグナは言った。

「強くなってたさ。まあこの二載ダブルドラグナー銃騎にやあまだまだ遠いってとこ
ろだな。」

その言葉に彼女はマグナの方に向き直って微笑を携えて宣言した。

「いつか、貴方に追いついて見せます。」

英雄としてのチカラ 前（後書き）

うーむ。

学園黙示録の漫画が予想以上に面白かったんだよなあ・・・
でもこの小説のペースじゃ新しい小説はなあ・・・
・・・ペースできるだけあげながら書こう！うん！そうしよう！

英雄としてのチカラ 後（前書き）

ヒャッハー！戦闘描写がムズ過ぎるぜー！

英雄としてのチカラ 後

V S 楓

刹那と真名が移動している間に楓は既にマグナの指定した場所に来ていた。

そこは麻帆良学園の駅の前だった。空を見上げれば雲一つ無く、満月が楓とマグナを照らしていた。

「では、さっそく手合わせ願うでござるよ。」

そういつと構えて戦闘体制をとる。それに対しマグナはポケットに手をつっ込んだまま佇んでいる。

「……構えないでござるか？」

不思議に思った楓がマグナに聞くとマグナはクックク、と笑って

「構えなくても大体は対処できるのでな。」

それは裏を返せば『お前なんて構えなくても倒せる』と言ってる様なものだ。真名達から聞いたが対峙している相手は英雄と言われているらしいが……

「ずいぶんと舐められているでござるな……。」

静かに、しかし確実に彼女の怒りが溜まっていく。しかし、その怒りを体の底に押し留める。怒りに身を任せて突っ込んでいくなど言語道断。それこそ相手の思う壺だ。

怒りは心を乱し、自身を弱くさせる。それは甲賀中忍の彼女にはあってはならぬこと。ゆっくりと怒りを心のそこで燃やし、それでいて頭は冷静に。深呼吸して心を静めて相手を見る。いつもは糸目の目を開いて相手の動きを探る。ああ見えても英雄だ。戦い方は接近戦が得意と聞いているが、その情報は役に立たないだろう。何せ彼は英雄なのだ。近接戦闘^{アウトレンジ}だけで戦争を潜り抜けてきたとは思えない。それなりに遠距離からの攻撃にもきつと対応してくるだろう。だったら自分がとる手は……。

「甲賀中忍、長瀬楓……参るでござる。」

そう宣言するとクナイを持ちつつ分身してマグナに襲い掛かる。彼女がとつた手は自身が得意とする分身をしながら相手を霍乱、そして攻撃するという近距離戦。そう、近距離も遠距離もだめだったら自分が得意とする距離^{レンジ}で攻撃すればいい。

「分身、か。なかなか密度が濃いな。」

楓が分身した数は8、数と密度どれをとっても彼女の年からするとかなりのレベルを持っている。

「（なるほど・・・これならアルが感心するのも分かるな。）」

二人同時に襲い掛かる楓の分身をそう考えながら捌く。遅れてきた分身も攻撃に加わるがそれさえも捌く。と分身の数が少ないことに気づいた。8分身したにもかかわらず、攻撃してくるのは4体のみ。

「（4体・・・？）」

マグナは原作知識をいかし、楓が仕掛けてくる技を先読みした。しかし彼はそれを止めない。とにかくこれは手合わせ^{ゲーム}なのだ。わざわざ相手の技を潰す意味も無い。そう考えている内にも分身の攻撃は激しくなるが、所詮は分身。分身の一体が繰り出してきた掌を避けて腕を絡ませる。そのまま腕を引いて背後の分身にぶつける。これで二体を始末した。右から廻し蹴りでマグナの頭を、左から拳でわ

き腹を狙ってくる分身の足と腕をつかんで無力化し、右の分身には爪先で分身の米神を貫く。あまりのスピードに反応できない分身はそのまま消える。そして腕を掴まれている分身に肘鉄を顔にぶち込んだ。これで4体の分身全てを消した。と、ここでマグナの予想通り残りの4人がマグナを中心とした十字の形で現れた。

「（くるか・・・っ！）」

楓は分身と共に瞬動術を使い一瞬でマグナの懐に入る。気を集め指を曲げた掌で瞬動術の勢いを利用しながら掌を叩き込む。そしてすぐさま離れるように滑りながら進む。それは上から見ればきれいな十字に見えた。

楓忍法・四つ身分身隴十字

手ごたえはあった。その証に隴十字を受けたマグナは反動で空に打ち上げられている。しかし攻撃の手は緩めない。なにせ相手は『英雄』なのだから。すぐさま反転、飛んで無防備になっているマグナの体にサマーソルトでさらに打ち上げる。それに虚空瞬動を使い追撃。気弾を手に集めてそれを16分身。16の気弾がマグナを襲った。衝撃で地面に叩きつけられる。動かない。しかし、油断はできない。するとムクリと起き上がったマグナが首をゴキゴキ鳴らした。

「あゝなかなかの攻撃有難う。お陰でお前の実力が分かったよ。」

「で、拙者の実力はマグナ殿から見て如何でござるか？」

「その年に似合わぬ戦闘スキル、忍術のレベルといい中学生とは思えないな。なかなかのレベルだよ。」

「そうでござるか。しからはもう少し拙者の腕を見せて

」

楓の言葉を遮ってマグナは言う。

「でも、ワンサイドゲーム一方的な戦闘はお兄さん認められないなあ？」

笑った。俯き気味になっているため、表情はあまり分からないが、笑った。蒼い目は三日月がたに歪められ、口は両端に広がった。楓に寒気が走った。

恐怖、畏怖、そのようでしか形容できない何かが楓を襲った。

そして鮮血が舞った。

楓が恐怖に支配されないように自分の手をクナイで刺したのだ。それが正解だと言わんばかりにパチパチと手を叩く。

「パーフェクトだ。」

クナイを引き抜くと血が溢れ、鋭い痛みを掌に感じるが恐怖は取り払えた。楓はたってマグナに相対した。言葉は既に無い。クナイを構えて相手の行動を待つ。と、マグナが動いた。

此方に飛び掛るように跳躍するとクナイを投げる。それを最小限の動きで避ける、がそれが致命傷だった。避けた後飛び掛ってくるマグナと距離を置こうと瞬動術を使おうとする楓だが……。

「う、動かない?!」

そう、動かないのだ。まるで両手足をセメントの中に突っ込んだように動かない。マグナが楓の目の前に着地して言った。

「はい、お前の負けー。」

バチンと楓の額から音がする。デコピンしたのだ。擦ろうとするが手が動かない。仕方ないのでマグナに聞いた。

「なんで体が動かないでござるか?」

「後ろ見てみる、首は動くだろ。」

言われた通りに首を動かして後ろを見ると影にマグナが投げたクナイが両手と両足の部分に刺さっているのが見えた。

「これ……でござるか？」

鷹揚に頷くと説明を始めた。

「これは俺のオリジナル忍術だな。『影縫い』って言うんだ。詳しいことは省くけど影の部分にクナイとか刺すとその部分が動かなくなるってわけ。」

ほらこのとおりと言いながら楓の影に刺さっていたクナイを引き抜くと動くようになった。

「マグナ殿は忍術も使えるでござるか？」

「まあね。」

そういつと用はないとばかりに消えた。呼び止める暇も無かったの
で楓は一人呟いた。

「うーむ、拙者もまだまだでござるなあ……。」

V S 刹那

刹那が来たのは世界樹の前にある広場だ。そこにマグナは一振りの
刀を持って佇んでいた。唯佇んでいるだけなのにマグナの周りの空
気が違う。その違いに冷や汗を掻きながら近づく。

「それでは……。」

「ああ……。」

お互いに言葉は交わさない。夕凧を鞘から引き抜き正眼に構える。対してマグナは自然体。刀の柄に手をかけている程度。しかしその姿勢は居合いの姿勢。無駄な力を極限にまで無くし、一瞬で切り裂くためだから自然体なのだ。迂闊に手は出せないが、これは相手の実力を測るため、そして自分がどこまで英雄に対して通用するのか確かめるために挑んだ試合なのだ。だからこそ仕掛ける！

「はあっ！」

裂帛の気合と共に夕凧を上段から振り下ろす。しかしそれは一瞬にして抜かれたマグナの刀によってそれは防がれた。それは想像通り。すぐさま刀を戻して横なぎに振るう。それも居合いで抜かれた刀によって防がれる。チツと舌打ちしてそのまま刀を振るうがそれも完璧に防がれる。いったん距離をとって瞬動で間合いを詰めて大上段から気で強化した刀を振り落とす。

神鳴流奥義・斬岩剣

打ち下ろされた刀はアスファルトの石畳を切り裂いた。気で強化してあるとはいえなかなかの威力だ。しかしそれをマグナは受けるのではなく逸らした。刹那は刀をそのまま振るい、練った気を刀に乗せて打ち出す斬空閃を繰り出す。それをうまく刀で打ち消す、と目の前に刹那が刀を振りかぶっているのが見えた。

奥義・斬鉄閃

刀を振りぬくとその軌跡に衝撃波が生み出されマグナを襲う。しかしそれさえも一振りで打ち消し、刹那に詰め寄る。刹那は次の奥義を出そうとしたたようだがそれはマグナが許さない。

一閃

それだけで刹那の手から夕凧は弾かれ、地面に突き刺さった。そのまま手加減した肘鉄を腹に打ち込むと刹那は膝を突いた。

「私の負け……ですね。」

「……………」

「有難うございました。お陰で自分の力を見極めることが
。」

「お前は何を恐れている？」

「
ッ?!」

いままで口を開かなかったマグナが言ったことに刹那は過敏に反応した。

「今のお前は鋭利な刃だ。触れるもの全てを切り裂く冷たい刃。」

「それは、悪いことなんですか!？」

思わず激昂してしまう刹那にマグナは至って冷静に言葉を紡いだ。

「他人、友人、仲間、家族、そして守るべきものすらも傷つける事が悪いことだというのか？」

「！」

心が抉られるようだった。守るべきものを傷つけてしまったそれは護衛ではない。自分は化け物だから、一緒にいてはいけない。そんな言い訳で守るべき人を遠ざけていたことすらも傷つけていたのか？

だったら・・・

「だったら・・・私はどうしたらいいんですか?!」

叫んだ

「私は鳥族のハーフで忌み嫌われる存在！それをお嬢様が知ったら私は・・・私は・・・ッ！」

それは彼女の悲痛な叫びだった。嫌われたくなかった。だけど幼馴染を守りたかった。そんな願いから彼女はいつしか幼馴染の少女から距離を置き、力を求めた。守りたかったから。しかしそれが傷つけることに繋がった。そんな彼女にマグナは言った。

「だったらその翼を来るときに教えればいい。何、そのときは俺も手伝ってやる。」

涙を流す彼女の頭を優しく、撫でた。その言葉と掌の温もりは彼女の凍てついた心を溶かすのには十分だった。マグナは涙を流す彼女の頭をいつまでも優しく撫でていた。

一方先に帰った本物はどうと……

「あと少し……後もう少しで『お前』が完成する。」

”別荘”の中でも彼しか立ち入ることのできない部屋の中で呟いた。目の前にあるのはライトを当てられた一つのロボット。

全体的に黒と赤で彩られたその機体。

背中についている無骨なブースター。

そして両肩に描かれた？の数字。

「もう少し待っていてくれ。
」

・ナインボール・セラ

英雄としてのチカラ 後（後書き）

次の話から原作に入ります。やっとですね、スイマセン。

舞台の幕開け（前書き）

やっと原作に入れました・・・ここまで長かった・・・

舞台の幕開け

「間もなく麻帆良中央、麻帆良中央。お降り際にはお忘れ物のございませぬように・・・」

空気が吐き出される音が鳴ると目の前のドアが開いた。ドアから出るとまず目に付いたのは巨大な樹木。大きすぎないかな？と赤毛の少年は思った。背中には布に包まれた杖。

彼こそが英雄の息子でありこの物語の主人公。

ついに物語が始まる。

「なんだこのカオスは・・・。」

そう呟いてもおかしくない状況を見ているのはマグナだった。彼は今日ネギが来ると聞いて学園長に迎えに行つてほしいと言われたた

め来たのだが……。

「取・り・消・し・な・さ・い・よおおお……!!」

「い、いだい、いだいですよお……」

自分のクラスの生徒の神楽坂アスナがそのネギであろう少年の頭を掴み上げ、そのまま万力の如くキリキリと締め上げている。所謂アイアンクローなのだが決して十歳の少年に行うような技ではない。これも確か原作だったな、と思い直してアスナの親友の近衛木乃香に一応だが事情を聞く。

「近衛、何でこんな状況になった？」

「あ、先生。実はな その子がアスナに失恋の相が出てるなんていうてな。それでアスナが怒ってこんなんになったんや。」

やっぱりカーと額に手を当てて空を見上げる。ああ、空が青いなんて軽く現実逃避するがすぐに戻って二人を止めに間に割って入る。

「はいはい、とりあえず止めとけ。」

グツとアスナの手を退けて少年を地面に降ろす。アスナはムツとしたようだが公共の場で年下相手に怒ったとはいえアイアンクローを仕掛けたという事実を思い返し思いとどまってくれた。マグナは頭を抱えてあーうーいつている少年に話しかけた。

「頭痛で困っているところ悪いけど……。」

「は、はい……。」

「君がネギ・スプリングフィールドか？」

「え、……あ、ハイ、そうです！」

そう聞くと少年はピシツとし、姿勢を正す。アスナと木乃香は不思議そうな顔をして、

「なあ先生、その子誰なん？」

「え、ちょっと、何、何の話ですか。なんで先生がこのガキの名前知ってるんですか？」

アスナと木乃香の疑問に答えようとしたとき声が響いた。

「いやあ、済まなかったねキミたち、面倒を押し付けてしまつて」

そういつて来たのはマグナと同じ、ネギを迎えに来たタカミチだつた。

「た、高畑先生！？ お、おはようございませう！」

「おはようございませう」

二人はいきなり現れたタカミチに挨拶をした。もっともアスナは意中の人だからかかなりどもりながら挨拶をした。マグナはそんなタカミチを見て愚痴を言った。

「まったく、遅れて如何するつもりだつたんだよ？」

「ハハハ、スイマセン。思ったより早く彼が来たので吃驚しましたよ。」

ハハハ、と笑っているタカミチを見つけたネギはパーと顔を輝かせてパタパタ近づくと、

「お久しぶりです、ネギ先生」

「久しぶりタカミチーッ」

と気軽に挨拶をした。どうやらこの二人は面識があるようだ。気軽に挨拶を交わした二人にアスナは動揺する。それもそうだろう。憧れの人と失礼なクソガキが知り合いだったんだから仕方ない。

そう考えているうちにも二人の会話は続いていく。

「麻帆良学園へようこそ、いい所でしょう？ネギ『先生』」

「せ、先生？」

「あ、ハイ、そうです」

コホンと軽い咳払いをするとぺこりと一礼。そしてやっと自己紹介をした。

所変わって学園長室。あの後ネギが2-Aの担任になることを知ったアスナは混乱しタカミチに詰め寄った。と、ここでネギが原作通りヒートアップしてネギに近づいたアスナの髪の毛が、ネギの鼻腔を攪り、くしゃみをした瞬間、魔力がその場を渦巻いた。暴走を起こしたその噴流は、少年を掴みあげていたアスナの制服を、下着を残し、すべて塵と化した。それを察知したマグナはすぐさま今日来ていた白衣をアスナに着せた。これで事なきことを得たのだがアスナの不信感は膨れ上がっただろう。ネギの自業自得だが。とことの実偽を確かめる為、ジャージを借りたアスナはネギをつれて学園長室に突貫。

「（そして今の状況に至ると……）」

「まあまあ明日菜ちゃんや。……なるほどのお、修行には日本で学校の教師を……。そりゃ大変な課題をもらったものじゃ。」

そう上手くアスナを宥めながらネギを気遣う学園　　ぬらりひよん。というか一般人の前で修行とか課題とか言うのはどうかと思う。一応魔法は秘匿事項なんだし。

「？」

「しゅぎょー？」

と事情を知らない二人が頭の上に疑問符を浮かべる。おいおい、と思うが口に出さない。別に魔法が公表されようがマグナには使えないのでどうも思わないのである。

「は、はい。よろしくお願いします」

「しかし、まずは教育実習と言う事になるのう。今日から三月まで・
・。ところで、ネギ君には彼女はおるかの？ どうじゃな、うちの木乃香なぞ？」

髭を梳きながらトンデモ発言をした学園長の異常な頭を木乃香がどこからともなく取出した金槌でぶん殴る。ダクダク血が流れ続けるが誰も何も言わない。学園長の悲劇を嘆くべきなのか、この状況を見て何も言わないことを嘆けばいいのか。あ、学園長に対しては嘆く必要ないな。

「ちょっと待ってくださいってば！ 子供が先生なんておかしいじゃないですか、しかもうちの担任だなんて！！」

タカミチが担任から降りるのを気にしているのかアスナが猛抗議。

「フオフオフオ。ネギ君、この修行は恐らく大変なものになるじゃろう。駄目だったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟があるのじゃな？」

しかし学園長頭から血を垂れ流しながらもこれをスルー

明日菜さんは全く話しを聞かない学園長からマグナを縋る様に見るが首を横に振るマグナ。何を言おうがこれは学園長の最終決定なのだ。何を言おうが結果は変わらない。

アスナは何を言っても無駄と諦めたのか黙って後ろに下がった。

「は、はいっ、やらせてくださいっ!」

そうハッキリ言うがマグナの心の中には不安しない。朝の騒動からして改めてネギの未熟さを思い知ったマグナは裏のことは面倒見ないつもりだった。いやもともとそうだったのだが。

「マグナ君も大丈夫かね？」

「ええ・・・まあ・・・。」

それだけ言うと学園長は満足したのか、

「うむ、では今日から早速やらしてもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

学園長の言葉にその声と共に扉が開き、入り口から1人の女性が入ってきた。

その人はメガネをかけており、パツと見ただけで母性溢れるといえる女性で、ネギが声のした方向を見ようとするとその大きな胸に顔を埋めた。

「む」

「あら、ごめんなさい。」

マグナはまただよ（笑）といったそうになるがそれは押しとどめる。無駄なことはしない主義だからだろう。

「分からない事があつたら彼女に聞くといい」

「源しずなよ。よろしくね」

「あ、ハイ……」

ウィンクしながら話すしずな先生にネギは見事に惚けていた。はあとため息をつきそうになる。表の仕事のフォーローだけでも疲れそうだ。なんて考えていると既にネギたちは学園長室から出て行ったらしく、部屋の中には学園長とマグナが取り残されていた。

「ネギ君の印象はどうじゃった？」

「一言で言うなら面倒くさい。」

その言葉に驚いたのか学園長が何故か聞いてきた。

「ほっ？それはまたなんでじゃ？」

「朝の一件はあんたも見てただろ？とにかくあらゆる面において未熟。常識にも疎いし・・・初対面の人に向かって失恋の相が出てるなんて普通言わないだろ。」

ため息混じりにそういつと学園長は髭をまた梳く。

「ふむ、じゃったらお主がネギ君の補佐を

「表だけだったら了承してやるけど裏は拒否させてもらっつ。」

「ほっ！？それはどついつ意味かのっ？」

「だから担任とかだったらサポートしてやるけど魔法に関しては俺は関わらないってこと。」

「つーか魔法使えないし。というと学園長が食いついてくる。」

「し、しかし彼は『サウザンドマスター』……つまりお主の幼馴染の息子なんじゃよ？」

「しらねーよ。つーか俺はあいつを親友と思ってたから一緒にいただけだ。あんな子供のお守りなんてお断りだね。」

その反論もマグナは一蹴する。大体自分を踏み台にしようとしていた奴の依頼なぞ受けるわけがない。それだけ言うとマグナは部屋から出て自分のクラスに向かった。

ついに物語^{原作}の幕が開いた。主演は英雄の息子。踊るは道化師。

脚本は既に出来上がっている。それを道化師がどのような筋書きに変えるのだろうか？

舞台の幕開け（後書き）

最後の奴はどうかの動画の奴をみて作りました。まああんまり気にしないでください。

860、000アクセス突破　ユニーク120、000人　突破・

・？

なん・・・だと・・・？

感謝のキワミ！アッー！

これからも頑張ります！

薬味と2 - A (前書き)

NISSANのデュアリスのCMで変形したロボットを見て「ネクスト?！」と勘違いした作者は多分フロム脳

薬味と2 - A

とりあえず学園長の目の前で表のサポートを言った手前、やるしかないと判断したマグナは2 - Aのクラスに向かっていた。

角を曲がるとそこには緊張した面持ちのネギとしずな先生が立っていた。カチンコチンになっているネギが教室のドアを開ける、と頭上からチョークの粉がたつぷり染み込んだ黒板消しが落ちてきた。普通ドアを開ける前に気づくものだが残念ながらネギは緊張でそこまで意識がいかなかったのだろう。

落ちてくる黒板消しに気づかずに入ろうとしたネギの頭に黒板消しは
落ちなかった。

それはネギが常に張っている障壁が黒板消しを彼の頭上で止めたのだ。それは傍から見ればふわりと黒板消しが空中に浮いたと認識でききる。

ざわ・・・とざわめくクラス。ネギが気づくが如何せん遅い。頭の中で思考を張り巡らせて障壁を解除しようとしたがその必要はなかった。何か黒板消しに当たって吹き飛んだのだ。何かあつたのかはクラスの殆どの生徒は認識できなかった。一部の生徒は誰がやったのかわかっている様だったが・・・。

それはネギの後ろのほうに立つマグナが居合拳で黒板消しを吹き飛ばしたのだ。空気を弾丸のように飛ばす居合拳ならば物陰を見せる心配もない。ただ、加減しないと黒板消しが粉々になるのだが。

何が黒板消しを吹き飛ばしたのか分からないネギはとりあえず教卓に向かおうとするがここは2-Aクオリティ、トラップが仕掛けてある。

まず進もうとしたネギの足がロープに引っかかり転倒、したネギの頭に水入りのバケツが降ってきてネギを水浸しにした拳句視界を奪った。転倒した勢いは床に塗られたローションで加速され、滑っている間にも吸盤の矢やエアガンがネギに襲い掛かる。ポロポロになってネギはそのままの勢いで教卓に激突した。

あはははははは！と楽しそうな笑い声が響く中、マグナはため息とともに教室に入った。原作よりもトラップが強化されてないか？なんてことを考えながら教卓に進むと笑っていた生徒の表情が変わる。

顔を向けてみればトラップにかかった人は子供ではないか。慌てて何人かの
トラップを仕掛けた生徒がその『子供』を助ける。

「えーっ！子供!？」

「君、大丈夫?!」

「ゴメン、てっきりマグナ先生かと思って。」

そっぴいなからバケツを外してやりマグナの方を向いたトラップの主犯格の一人の鳴滝風香がマグナに向いて

「先生、何でこんな子供が居るの?」

お前が言っな、と呟きながら説明する。

「その子がお前らの新しい先生だからな。」

シン、と静まり返るクラスにしずな先生がネギに自己紹介を促した。改めて教卓に上ったネギはどもりながら自己紹介を始めた。

「ええと・・・あ・・・あの・・・ボク・・・ボク・・・今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

またまたシン、と静まり返るクラス。そして一呼吸の間があって、

『か・かわいいー！ー！ー！ー！』

歓声が上がって生徒たちがネギに群がっていく。抵抗もできずにもみくちゃにされながら質問攻めされる。

「何歳なのー！？」

「えっつ！？その・・・十歳で・・・。」

「どっから来たの？！何人？！」

「ウエ、ウェールズの山奥の　　。」

「ウェールズってどこ？！」

「今どこに住んでるの？！」

「いや、まだどこにも　　。」

とりあえず生徒たちの勢いに飲まれないように非難すると千雨が近づいてきた。

「…………アレがお前の幼馴染兼英雄の一人の息子？」

信じられないものを見る目でいまだにもみくちやにされるネギを見る千雨。それもそうだろう、障壁を張ったまま黒板消しを受け止めて皆が仕掛けたトラップに見事に引っかけり、あまつさえ自己紹介時に魔法としかけたのが英雄の息子だろうとは誰も信じないだろう。

「…………残念ながら事実だ。」

頷きながらため息を吐く。と、傍観していたエヴァや茶々丸、真名に刹那も近づいてきた。何か言いたげだったが耳を塞いで声をシャットアウトする。それを察してくれたのか何も言わない。すると真名が気づいたようにマグナに聞いた。

「サングラスしてるけど、包帯はどうしたんだい？」

そう、今マグナは包帯をしていない。その代わりに黒のサングラスをかけている。傷はぎりぎり隠れているが、包帯からサングラスに替えると違和感がある。

「あの坊主に俺が『武神』っていうことを隠したいただけだ。あとイメチェン。」

「どうしてネギ先生に貴方が英雄ということを隠したいのですか？」

「それは簡単なことだ桜咲刹那。『武神』は紅き翼の一人だからな。ややこしくしたいないんだろ。」

ちらりとマグナを見ながらエヴァンジェリンが言うとマグナは頷いた。

「まあ半分正解。もう一つ理由があるからな。」

「？ それはどんな理由だ？」

「あいつ、ファザコンなんだよ、それも重度のな。」

「公式ではネギ先生の父親、ナギ・スプリングフィールドは十年前に死亡しています。」

「あいつがそう簡単にくたばる訳ないからな。生きてるだろうしネ

ギにも会ってるはずだ。」

「ああ、同じ紅き翼である師匠に父親のことを聞きたいのか、幼馴染だし。」

肯定返事の代わりにもう一つ大きな溜息を吐いて答えた。皆から労わりの視線がかかってくる。それが逆に堪える。

「いいかげんになさい!!」

そんな怒声が聞こえてそこを見ると学級委員長である雪広あやかがアスナ 正確にはネギの胸倉を掴んでいる に向かって机を叩いて言い放っているところだった。

「皆さん席に戻って、先生がお困りになっているでしょう。」

それは自分ではなくネギに言っていることにちょっと傷ついたマグナだった。

アスナさんもその手を放したらどう?もっともあなたみたいな凶暴なおサルさんにはそのポーズがお似合いでしょうけど。」

と、アスナに向かつてネギを放すように言うがその中には堂々と挑発が混じっていた。単純なアスナはそれを聞くと視線をネギからあやかに移した。ギロツとあやかを睨み付けているアスナの米神には青筋が浮かんでいるのをマグナはしっかり見た。

「ネギ先生はオックスフォード大学をお出になった天才とお聞きしておりますわ。教えるのに年齢は関係ございません。どうぞHRをお続けになってください。」

ぺらぺらしゃべり、ネギを見るあやかの瞳の中には若干の恍惚が入っていた。見つめられているネギは何がなんだか分からないらしく、呆然とお礼を言っていた。

「委員長、何いい子ぶってんのよアンタ！」

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然ですよ。」

ふ……とアスナ見下したように見るあやか。と、アスナはおばさんがるポーズであやかに言い放った。

「何がいい子よ！このシヨタコン。」

「なっ！」

そうあやかはシヨタコンなのだ。先ほどネギを見ていた目の中に恍惚が入っていたのも同じ理由だからだ。シヨタコンを指摘されたあやかはアスナの胸倉を掴んでアスナがタカミチのことを言いふらしそうになり、どンドン二人の争いはヒートアップしていく。それを見ているクラスメートが「もっとやれー！」なんていうものだから勢いは留まる事を知らない。あわあわネギが止めようとするが何分小さい声になってしまい、周りの歓声にかき消されてしまい二人を止められない。と、ここで救世主が現れた。

「はい、二人ともやめー。」

気だるげに発せられた声の主は二人の首の襟を掴んで引き離れたマグナだった。

「二人ともみつともないぞ。神楽坂も雪広も騒ぐのは止めだ。」

そういわれるとしゅんとなるあやかにどこか納得いかないが渋々といった様子のアスナ。アスナは朝、ネギに服を吹っ飛ばされた時助けてもらった恩があるのだろう、強く言い出せないのだ。それを確認したしずな先生はパンパンと手を叩き、皆を促した。

「はいはい、皆時間も押してるし授業しますよー。ネギ先生、お願

「いします。」

「は、はい。」

ほっとした表情を見せてネギは返事をする。はぁ・・・と今日何回目も分からない大きな溜息を吐いてマグナは思った。

今日の帰り、胃薬でも買っていこう

薬味と2・A（後書き）

どうしても更新が遅くなってしまっ……これも全部学校のテスト
が悪いんだ！
チクシヨ！

初日終了、背中に疲れと哀愁（前書き）

中々執筆する時間が取れない・・・。

初日終了、背中に疲れと哀愁、

「
」

「あいたあ!？」

ネギの初授業が終わり、仕事がひと段落ついた後、ネギはマグナに呼び出された。クラスの皆と別れた後、人気がない教室でマグナは挨拶代わりにチョップをネギに繰り出した。障壁をあらかじめ切つてあつたネギは当然それを避ける術を持たずに脳天にモロに直撃した。

何をするんだと言いたげな目でこちらを上目で見てくる。チョップの痛みもあるのかちよつと涙目だ。シヨタコンのあやかがやれば即ノックダウンものだが、生憎マグナはノーマルである。そんなものは鬱陶しいとしか感じない。

「……何で私がチョップをしたと思いますか？」

静かな声でマグナはネギに問うとネギは首を傾げた。

その仕草で分かる。絶対分かってないと。

「・・・・・・・・授業ですよ。あれは流石に酷過ぎます。」

「うっ・・・・・・・・！」

やっと思い出したのか、ギクリと体をふるわせるネギ。実際ネギの最初の授業は酷かった、いやアレは既に授業とはいえないだろう。

ネギが授業を始めようと黒板に板書をする・・・・・・・・のだが如何せん数えで十歳の慎重など高が知れている。当然上のほうから書くこととするネギだが身長が足りずに爪先立ちでプルプルしてしまう。その必死さに生徒たちからクスクスと囁く様な笑い声が聞こえる。それに見かねたのか委員長であるあやかがネギに踏み台を差し出す・・・・
・が流石はお金持ち&シヨタコン、その踏み台が普通じゃない。金や銀で装飾された踏み台だったのだ。それにお礼を言いながら踏み台に乗っかり板書をする。

その姿を見ながらアスナはしかめっ面をしていた。朝の一件といい、入ってくるときの黒板消しといい、どうにもネギがおかしいと判断した彼女はネギの化けの顔を剥ごうと決意したのだ。

自分の筆記用具の中から消しゴムを取り出して小さく千切る。そしてネギが板書に夢中になっっている隙を狙って机の横から千切った消しゴムを人差し指でネギに向かって飛ばした。一直線に飛んだ消しゴムはネギの頭に当たった。その衝撃で驚いてチヨークを落として飛んできた方向を見るが、誰が何を飛ばしたのか分からない。仕方が無いのでまた板書をするため黒板に向かった。

その当の犯人であるアスナはというと、

「・・・・・・・・あれ？」

教室に入ってくるるとき黒板消しを一瞬だが浮かせたのだ。だから何かネギに当てればそれが弾かれるのではないかと思っただけの行動だったのだが・・・・・・・・。

「（当たった・・・・・・・・？）」

そう、当たったのだ。物を投げたら当たるのはあたりまえだから。疑問を隠しえないアスナは今度は輪ゴムを使って消しゴムを飛ばす。ピシバシ当たる消しゴムで痛みが走り、板書ができないネギ。

「何やっとな？アスナ。」

アスナの隣の席の木乃香が奇行を繰り返しているアスナに言ったがアスナは気づかずネギに消しゴムを飛ばし続けている。

「どうしたんですの？」

「いえ、何か飛んできて……。」

そうあやかが聞くとネギは若干涙目になって答えるとあやかはネギによって耳打ちした。

「……先生、それはあの女の仕業です。」

「え、アスナさんが!？」

視線をチラリとアスナに向けながらあやかは囁いた。それに驚くネギにさらに説明を続ける。

「あの女に近づかないほうがいいですよ。」

え、なんでとネギはあやかの忠告に首を傾げる。

「あの女はバカの癖に体力は有り余っていて暴虐の限りを尽くし・
・粗暴で乱暴物の問題児で・・・」

おまけにスケベでインランと付け加えるあやか。新事実には驚愕するネギ。自分の生徒であるアスナが粗暴で乱暴物でスケベでインランだったと知れば新任の先生だったら誰でも驚くだろう。しかしネギも英国紳士と名乗っているが、実際はスケベ・・・いや、ラッキースケベといったほうが適当だろう。よくアレで英国紳士なぞ名乗れるものだ。本物の英国紳士に焼き土下座してほしいくらいである。

と、アスナをののしっていたあやかの後頭部に筆箱が直撃した。誰の筆箱かは見なくても分かるだろう。

その後はもう朝の二の舞である。結局ネギは喧嘩を止めることができずにおろおろして最初の授業を見事に潰したのである。

「思い出しましたか？」

「はい……。」

しょんぼり頂垂れるネギにマグナは容赦はしない。

「いいですか、私も先生になってから余り日は経ちませんがアレは酷すぎます。年齢が年齢だとしても教師としての自覚を持ってください。」

「はい……。」

「つたく……朝の魔法といい、トラップの障壁といい。本当にあなたは魔法使いですか？」

「うええ?! ぼぼぼぼ、ボクが魔法使い?!」

「ああ安心してください。私は『関係者』です。」

魔法、という単語に面白いほど狼狽したネギだったがマグナが『関係者』だと分かると安心するネギ。というかその焦り様だとその話が本当だといっているようなものなのだが……。

「あのですね、修行といつても一般人に魔法を知られてはならないのに・・・朝神楽坂さんの制服を吹き飛ばして、教室に入るときには障壁を張ったまま入って黒板消しを浮かせる始末。魔法を隠すどころか見せる気満々じゃないですか。というか既に神楽坂さんに疑いを持っているようですよ?」

「ええええ?! どうしよう、これじゃあ・・・。」

その後は聞けなかったが大方立派な魔法使いになれないとかいったのだろ。その心配は無い。あの学園長が英雄の息子であるネギを手放すはずが無いからだ。

「私は『関係者』ですけどそっち方面のフォローをするつもりはありませんのであしからず。」

その宣言に顔をさらに青くする。それでもどうにか助けてほしいのかこちらを見つめ続ける、がそれを冷たい声で一蹴する。

「ふざけないください。元はといえばあなたが撒いた種、私その種を回収する理由がありません。先程も言ったとおり、数えで十歳だからといって私はあなたを甘やかしません。ああ、朝神楽坂さんが吹き飛ばされた制服代は貴方の初任給で弁償させてもらいますから。」

それだけ言ってもう話は無いとばかりに教室を出て行った。既にネギは絶望しているだろうが、これからもっと絶望してもらうことになるのだ。これぐらいで折れてはこちらが困る。そう考えながら職員室に戻って仕事を続ける。と、ふと外の林からまた魔力反応が漏れた。

「あれほど言ったのにあの薬味は・・・ッ！」

バキリと書類に書き込むために持っていたボールペンがイラつきで力が入ってしまい、中ほどで折れた。周りの教師たちは何が起こったのかわからない様子だったがタカミチだけはその様子を見て苦笑していた。

所と時間変わって今は夜。それなのに2-Aの教室は騒がしかった。それはネギの歓迎会が行われているからだ。主役であるネギは中央

に座らせられ、皆にもみくちゃにされている。

マグナはというと部屋の隅のほうでお決まりのメンバーといた。

「ったくよー、アレほどまで言ったのにあの薬味は魔法を使いやがって……。」

「だけど、あの先生は宮崎を救うために使ったらしいじゃん。」

別にそれはいいことなんじゃね？という千雨にマグナは首を横に振った。

「俺が言ってるのは其処じゃない。その後のことだ。」

「その後……というと神楽坂に魔法がバレたところか？」

超包子で作られた肉まんを齧るエヴァンジェリン。

「ああ、あの薬味は本人に何も話さず記憶消去をしようとしたんだよ。」

それで結果は朝の二の舞だよクシヨーと机に顔をうずめる。

「それは……また大胆なことをするね。」

真名と刹那がその光景を想像してみても苦笑した。それと同時にまた服を飛ばされたアスナに合掌。

「んで、結局アンタは何が言いたいんだよ。」

そう未だに机に突っ伏したマグナに問いを投げかける。と茶々丸が口を開いた。

「恐らくマグナさんは宮崎さんを救うために使った魔法は認めてくれるでしょう。しかし、アスナさんに見られた後のアフターケアに関する魔法は認めないのではないのでしょうか？」

「その通り
Exactly」

本当に疲れて顔を上げる気力も無いのだろうか突っ伏したままピッと人差し指を茶々丸に向けた。

生命や、重い怪我の可能性があれば別に見られてもいい。その後の

処理をしつかりすればいいから。しかし、ネギは何の説明もなしに記憶を消そうとして失敗。またアスナの服を吹き飛ばし、あまつさえアスナの思い人であるタカミチにその裸体を見られたのである。アフターケアとしては最悪だろう。

「本当に・・・もう表のフォローもする気もねえよ」

顔を横に向けて現在進行でネギがタカミチに読心術を使っているところを見ながら呟いた。本人はバレてないつもりだろうが傍から見ればバレバレである。

顔を戻してまた机に突っ伏す形になって酒を注ぐマグナのそのときのオーラは何だか疲れと哀愁ただよっていたという・・・。

そんな彼に周りのメンバーは合掌するしか無かった。

初日終了〜背中に疲れと哀愁〜（後書き）

初めてネギアンチが出ましたね。皆さんの反応が怖い……。
ですがそこまでアンチにする気は無いです。あしからず。

ホレ葉騒動未遂で解・・・決・・・？（前書き）

今回はちょっと長めで

ホレ葉騒動未遂で解・・・決・・・？

ネギに説教を垂れた次の日、マグナは何時もよりも早く目が覚めた。

「・・・うむ・・・ってまだ4時かよ・・・。」

枕の傍に置いてあった携帯を開いて時間を確認してみればまだ4時。太陽も少し顔を出したぐらいで外はまだ暗い。何時もは5時ほどに起きる彼だったが今日は何故か早く目が覚めた。しかも目が冴えて二度寝もできない。

ベッドから起き上がると伸びをして固まった体をほぐした。仕方の無い彼は学校に行くための服・・・では無く、黒色のジャージをちやっちやと着て外に出て行った。

外にでるとまだ薄暗く、冷たい風が彼の体を冷やしていく。その体を暖めるためにマグナはその場で準備運動を始めた、が彼の準備運動は普通の準備運動ではない。

「ふっ！・・・はっ！・・・」

ボクシングのジョブ、フック、ストレート。キックボクシングのロ
ー、ハイキックなど軽くなのだが格闘技の技を繰り出すことをマグ
ナは準備運動だと称している。

一通り終わると体は温まり、冷たい風が火照った頬に当たって気持
ちがよくなるぐらいに温まった。

そしてマグナは無人の道路で『運動』を始めた。

唯、ここは住宅街なのでまだ寝ている人が居るので大きな音は出せ
ない。そのため彼はシャドーを始めた。

マグナは始めにボクシングのスタイルをとった。右腕は普通に構え
るが左腕は体の前でブランコのように揺れている。これはヒットマ
ンスタイルと呼ばれている構えである。ゆらゆら揺れている左腕を
鞭のように撓らせて繰り出すフリッカージャブ。一回テレビで見た
ことがある構えをやってみたところ結構いい線だったため使ってい
る。しかし、テレビと彼のヒットマンスタイルには大きな違いがあ
った。

それはフリッカージャブの速度である。マグナのフリッカージャブ
は既にジャブという領域ではなく、それは暴風域であった。ひとた
び彼のジャブの領域内に入れば嵐の様なジャブが相手に襲い掛かる。
腕を振るう度にする風切り音が暴風域だという認識を加速させる。

『運動』を始めたマグナは気づくと既に日は昇っていた。時計を確認すると5時半を示していた。適度に汗をかいたマグナの呼吸はほとんど乱れていない。そこは流石英雄というところだろう。

シャワーを浴びてリビングに入るといつも通り茶々丸が食事の準備をしており、エヴァンジェリンは新聞を読んでいる。

そして一日が始まった。

通勤して学校に着き下駄箱に入るとネギが靴を入れようとして背伸びをしていた。するとあやかがやさしげな笑みを浮かべてネギを助けてあげていた。やさしいこつて、と思いながら自分の靴を入れて中履きに履き替えると自分の受け持ちにクラスに進んでいった。

クラスのドアを開けると上から黒板消しが落ちてくるがそれをキャ

ツチしてそのまま教壇に進んでいく。その途中でトランプを仕掛けたと思われる明石裕奈に黒板消しを投げる。「ぶぎゃ」と変な声が聞こえたのでうまく当たったようだ。

見渡してみるとネギはまだ着ていないようで皆思い思いの行動をしている。担任であるネギが来ないことには始まらないので窓際でタバコを取り出して火をつける。

『おはようございます、先生。』

と、誰かから声をかけられる。その方向に目だけを向けると透けている女生徒が笑みを浮かべて挨拶をしているではないか。彼女の名前は相坂さよ。彼女は60年以上も幽霊になっており、既に自縛霊になっているが本人の性格はいたって気弱。人を驚かせることなくもつてのほかなのだそうだ。本気を出せばポルターガイスト現象を起こせるらしいのだが……。

彼女と初めてコンタクトを取ったのはマグナが赴任してきた次の日だった。さよの初日のキラキラした視線に耐えられずに仕方なくコンタクトを取ったのだ。

夜、教室に入るとさよが自分の席でペン回しをしていた。

『よう、相坂。』

『へっ？』

声をかけてみると驚いたようで回していたペンを落としてしまった。ころころと転がるペンを拾うこともせず、マグナのほうを見るとマグナは気さくによっ、と挨拶をした。

『あつ！やっぱり先生私のこと見えてたんですね！』

声をかけたのがマグナだと分かれると顔を輝かせて近寄ってきた。

『まあな。ていうかお前幽霊だろ？なんでこんなところに居るんだ？成仏してもおかしくないだろ。』

『ああ、私もう60年も自縛霊やってるんですよ。なので私なんて死んだのか忘れちゃったんですよ。』

えへへと恥ずかしげに頭を掻くさよだったが、それは自縛霊ではないんじゃないかとマグナは突っ込みを入れたかった。

自縛霊というものはそもそも死んだものが現世に何らかの恨みなどをもったため、成仏できずに現世に漂い続けるというものだ。自縛

霊の大半は死んだ原因について恨みを持っているらしく、そのため自縛霊になるそう。しかし彼女は死んだ原因を忘れてただただ漂い続けている。それはもはや自縛霊ではないだろう。

とりあえず夜の教室で一人誰も居ない教室で喋るところを見られる訳にもいかなかったので学校周辺をうろつきながら話をする事になった。

『今まで60年間なにしてたんだ？』

『えーっと皆の授業を見ていたり、ペン回しをしたりしてました。』

『……それだけ？』

『はい、私他の人に見えないので。友達も居ないし……。』

そういうと俯いてセーラー服をぎゅっと握って立ち止まってしまった。60年ものあいだ誰にも気づかれずに、唯一人周りの人の変化をみながら漂い続けた彼女の寂しさは計り知れない。そう考えればエヴァンジェリンも600年生きていたそうだし、寂しさでは二人とも同じぐらいだろう。

マグナは溜息を一つ吐くと俯いていたさよに言った。

『じゃあ俺と友達になるか？』

それを聞いたさよは弾かれたように顔を上げた。さよの目は少し赤くはれていたがマグナは見なかったことにした。

『え……？私と……友達に……？』

『そういつてんじゃねーか。それとも俺と友達になるのは嫌か？』

フルフルと首を振るのを見たマグナは笑って伸ばした。

『じゃあ今から俺たちは友達だ。』

そういつてマグナは握手を求めた。その手をさよは満面の笑みを浮かべてとった。幽霊なのになぜかマグナの手は取れたのだ。

それがさよとマグナが友達になった瞬間だった。

(確かそうだったな・・・)

そう一人ごちながらさよにハンドサインを送る。これは普段でもさよと話せるようにマグナとさよが考案したものだった。

『ああおはよう。』

『あつ先生またタバコ吸ってますね？ダメですよタバコは体に悪いんですから。』

そうさよに言われて苦笑してしまう。途中まで吸ったタバコを携帯灰皿の中に捻じ込むとさよは満足したような顔をする。

するとがらりと教室のドアが開き、朝見たネギとあやかが入ってきた。それをみた日直の宮崎のどかは号令をかける。

「き、起立ー。礼いー。気をつけー。」

『おはようー！おはようー！』

大きな声のあいさつにネギはちょっとびっくりしてしまつがとりあえず持ち直す。

「は、はい、おはようございます。」

「着席！」

そう号令がかかると皆は着席する。と、ネギにアスナが小声で、

「（しっかりやんなさいよ）」

「（わ、わかっていますよ。アスナさん。）」

と掛け合いがあつた。それを聞いていたマグナはとりあえずこの時間は自分の授業ではないので職員室に向かうために外にでる。

『じゃあまたな。』

『はい。』

そうハンドサインを残してマグナは教室を去った。

「うーっす、タカミチ。」

「あ、マグナさん。おはようございます。」

職員室に入ると珍しくタカミチ以外は出払っていた。自分の席に座って引き出しの中から好物のビーフジャーキーを取り出して食べ始めた。

「またそれですか？」

「うるせー、これは俺の体の一部だ。これを摂取しなきゃやってらんねーよ。」

タカミチが苦笑気味にそういうとマグナはジャーキーを上下に口で揺らしながらそう答えた。実際マグナの机の一番下の引き出しはビーフジャーキーで埋まっている。それを見たタカミチは口の端をヒ

クヒクさせていたが。

「あーこのまま何事も無く一日が終わって欲し……」

そう呟こうとした彼の口から出たのは何か引きちぎられる音。それは口にくわえていたビーフジャーキーが彼の顎によって噛み干切られたのだ。

その原因は2 - Aで起こった魔力暴走。つまりネギがまた誰かのアスナだと思うが　　の服を吹き飛ばしたということの意味している。

「ハ、ハハハハハ……」

そのマグナの姿を見てタカミチは引きつった笑みで乾いた笑い声を上げることしかできなかった。

「……で、これはなんですか？」

「いや、あの……。」

授業が終わり、廊下を歩いているとネギがアスナを手に何か持って追いかけているのを目撃した。そういえばホレ薬だったかな？と薄くなった原作知識を総動員させて思い出す。

とりあえずその騒動を未然に防ぐためにネギの手から試験管を取り上げる。そしてその薬の中身を問い詰めて（マグナは知っているが）いるのだ。

「ですからこれは何ですか？」

「……ホレ薬です。」

観念したようにそう吐いたネギにアスナは慌てる。魔法をしっているのは自分だけなのに何故マグナに話すのかというように。

「ああ、私は『関係者』ですから『アレ』のことは知っています。」

そう聞くと安心したような驚いたような顔をするアスナ。まさか自

分のクラスの担任二人が魔法使いだなんて思いもしなかったのだらう。

「まあホレ薬で何をしようとしたかは聞きませんが……。これは犯罪だとネギ先生は理解していますか？」

「え？」

犯罪、という単語にネギは呆けたような声を上げた。

「市販で売っている物……。効果の薄いホレ薬は合法ですが、これは私の推測が正しければ『魔法の素丸薬七色セット（大人用）』で作られたホレ薬のようですね。」

未だ呆けたままコクリと頷くネギ、マグナはさらに続ける。

「これは短時間とはいえあらゆる異性に対して強い好感を得させるものです。これの使用者はいい気分でしょうが効果を受けた人はどうでしょうか？好きでもない人に好感を得てしまうことを。」

チャプ・・・と試験管を軽く振る。そのホレ薬の意味を知ったアスナとネギはそのホレ薬の液体の音が嫌に重く聞こえた。

「このような効果が強く出てしまう物は使用どころか作成するだけで犯罪ですよ？」

それを聞いてネギは顔を青ざめる。アスナはどうにかネギを守ろうとして弁解する。その必死な姿に溜息をついたマグナ。

「まあ今回は知らなかったということでお咎めなしにします。が、これは回収させてもらいます。」

いいですね？と目で訴えると顔色を取り戻したネギとアスナはコクリと迷い無く頷いた。通報されなくても僥倖なのだ。マグナはホレ薬を懐にしまいこんでその場を去った。

「これを薄めてっど……」

その回収したホレ薬をマグナは今現在いじっている。ネギにえらそうに説教した割には自分も犯罪に手を染めているのだが……。まあ実際マグナが私的に作っている作品の半分は犯罪スレスレか、も

しくは完全にアウトしている物なのだ。説教に関しては朝の憂さ晴らしも含まれているのは秘密だ。

「うっし、出来た。」

マグナが作り上げたのはネギのホレ薬を薄めて合法にした物である。ネギのホレ薬がピンク色だったが改良を加えて無味無臭無色にしたものだ。これは使用者が人間の女性に気になる人として写る物になる。しかし効果としてはあまり強くない、効果時間もきわめて短いものになっている。

何故このようなものを作ったのかというと・・・。

「タカミチーコーヒー入れたぞー。」

「ああ有難うございます。」

何のためらいも無くマグナの入れたコーヒーを手にとって飲む。その時マグナが黒い笑みを浮かべていたのには気がつかなかった。

その後、さまざまな女性に言い寄られタジタジになったタカミチが居たとか何とか。

そしてそれを見て大笑いしていた教師が居たとか何とか。

ホレ葉騒動未遂で解・・・決・・・？（後書き）

指摘があったので問題の場所を書き直しました。

ドッチボール(という名の蹂躪)(前書き)

最後のほうは力尽きました・・・細かいところは見逃してくれると有難いです・・・。

ドッチボール(という名の蹂躪)

ガヤガヤと騒がしくなる休み時間。皆思い思いの過ごし方をすることの時間。

勉強をするもの、友達と雑談をするもの、食べ物を持ち寄って食べるものと皆自由に過ごしている。

その中の2-Aの生徒といえば……。

「それ。」

「はい。」

掛け声をかけながら持ってきたバレーボールをパスで回しながら遊んでいた。

「ねー、あのネギ君が来てから5日経ったけど皆ネギ君のコト、どう思う?」

急にそんなこと言い出したのはパスされたボールを器用に頭で受け止めたピンクの髪をした佐々木まき絵という少女。彼女は新体操部

に所属しており、身体能力としては高い部類に入るのだがその反面学業面としては残念な結果を出しており、バカレンジャーのピンクを担当している。

「ん、いーんじゃないかな。」

カワイイし・・・と小さく呟いたのは長い黒髪を揺らしながら答えたのは大河内アキラ。水泳部のエースを務めているため、これまた身体能力も高い。

「そだね、教育実習生として授業もがんばってるしね。」

自他共に認めるファザコンの明石裕奈がそれに同調する。授業を『がんばっている』と知っているあたり教師としての能力よりは見た目よりで判断されているようだ。

「でもウチら来年は受験やし子供先生が担任じゃ頼りくない？」

楽観的な者が集まる2・Aの生徒の中では珍しく将来に対して不安を持っている和泉亜子が心配そうな顔で疑問を投げかけるが、

「受験てあんた、私たち大学までエスカレーターじゃん。」

裕奈の言うとおり麻帆良学園はエスカレーター制なのだが望めばより高いレベルの学校にも行けるため、エスカレーター制といってもレベルが高い学校に受かるために勉強する生徒も少なくない。だが彼女らは勉強をする、という概念が無いためかそのまま高校に行くつもりなのだ。

亜子の子供という言葉に反応したのかまき絵がクスクスしながら

「でもやっぱリネギ君10歳だし、大人の高畑先生とかマグナ先生と違って悩み事とか相談できないよねー。」

年上の女としてくなんといっているが5、6歳ぐらいしか変わらないのに大人の女というだろうか。

「そういえばマグナ先生って結構馴染んでるけどあの人来てからあんまり日にちが経ってないんだよね？」

「そういえばそうだね。馴染みすぎてて忘れてたよ。」

そう、マグナはこの学園に来てからあまり日にちは経っていないのだが、かなり馴染んでいたのだ。その証拠の一つとしてアンケートがある。麻帆良学園の先生たちには気づかれていないが生徒の間で一つのアンケートが実施されていた。

そのアンケートの名は、『担任or副担任になってほしい先生教師は誰だ!』というものである。

ちなみにランキングの順位は一位高畑先生、二位マグナ先生、三位ネギ先生、四位新田先生となっている。

タカミチの場合は言わずもかな、高い指導力とその渋さ、そして『デスメガネ』といわれるまでの戦闘能力から生徒から人気が高い。

新田先生に関しては生徒指導がかなり厳しく、『鬼の新田』などと呼ばれてはいるのだが、担任になった生徒に対して分らないところがあれば丁寧に分かるまで教えてくれたりする。厳しすぎる指導に目を瞑れば高畑先生に迫る人気があるのだ。ベテラン教師としての信頼もあるようで、賞賛される人にはいるのではないか?と思うほどである。

ネギ先生に関してはその年齢で教師というもの珍しさと可愛さであったようなものである。

問題のマグナに関してはそのカッコいいルックスと授業のやり方、生徒とのやり取りが人気につながっている。ルックスとしてはかなりカッコいい部類に入り、思春期の女子生徒にとってはたまらないものだろう。授業は一見やる気の無いような授業なのだが要点を纏

めながら授業をし、所々に雑学や冗談を入れながら進めていくので他の教師よりも分かりやすく、楽しいと評判なのだ。そして何よりも生徒とのやり取りが人気を底上げしている。マグナと生徒の間を簡単に言えば教師と生徒という間ではなく、多くの生徒が答えるのが『友達』や『兄弟』といったもの。

マグナは教師としての位置に固執せずに生徒たちと接している。お菓子を食べている生徒を見つければお菓子を摘んで生徒たちに怒られたり、逆に食べている弁当のおかずを摘まれてその生徒を追いかけていたりと教師とは言えずとも生徒たちと特別な信頼関係を築いていったのだ。

「マグナ先生はどう思う？私は中々いいと思うんだけど。」

「そうだね、面白い先生だし。」

「中々いないよねーあんな先生。」

と、このように中々いい印象があたえられている。

「で、アキラ、いい加減に白状しちゃうよー。」

と裕奈がニヤニヤと嫌な笑いでアキラにボールを投げ渡す。アキラ

はその質問にパツと顔が赤くなる。その反応にさらに嫌な笑いを深める裕奈。

このアキラの反応を見れば分かると思うがアキラはマグナに好意を持っているのだ。考えてみれば分かるのだがかなりのイケメンが教師としての立場ではなく、友達のような立場で一緒にはしゃぎまわっているのだ。それは好意をもたれても仕方が無い。

「まあ早くしないと他の人にとられちゃうけどね。」

そう、アキラだけではなく他の生徒も同様にマグナに好意を持っているのだ、それも相当な数。現に非公式だがマグナのファンクラブなどが設立されているのを本人は知らない。

「まあそこら辺の悩みとかもネギ君には相談できないよね。」

コクコクと真つ赤になりながらも頷くアキラ。

「逆に私たちがセンセの悩みを聞いてあげたりして。」

「アハハ、経験豊富なお姉サマとしてー？」

と笑いながら話す裕奈とまき絵。残念ながらネギは教師として見られてないようである。

大きくまき絵の頭上を越えたバレーボールを取りに行く、と影が差した。

「誰が経験豊富なお姉サマですって・・・？笑わせてくれるわね・・・。」

その影の正体を見るや否やまき絵たちの顔が驚愕に変わる。

「あ・・・貴方たちは・・・！」

所変わってここは職員室。休み時間だからか、教職員達も寛いでいる。マグナもその一人である。買ってきた缶コーヒを片手に本を読んでいる。ちなみにタイトルは『なぜベストを尽くさないのか』

であるのはこの際余談である。

「ああ……上田さんの本はやっぱりすばらしい……。」

パタンと読み終わったのか本を閉じると飲みかけの缶コーヒーを一気飲み。空になった缶コーヒーを放り投げてゴミ箱に投げ入れた。

「うわあぁくん！センサー！」

とそんな休憩時間に騒々しい悲鳴が職員室に響き渡った。

声の主は先程までバレーボールをしていたまき絵と亜子であった。しかし彼女たちの至る所にかすり傷などがついているのに気がついた。亜子とまき絵は担任であるネギの元に一直線に走っていき、暴力事件があったと訴えだしたのだ。それをきいたネギは止めに行こうと校庭に走っていった。

「マグナセンサー助けてー！」

その訴えに嘆息したマグナはネギの後を追うように校庭に向かって歩き出した。

騒ぎを目にしたマグナはまた溜息をついた。それはネギが止め切れなかったのだらう、言い合いと聞いていたのが取っ組み合いに発展する所だったからだ。高校生と中学生、キヤーキヤー言いながら髪を引っ張り合ったりしているところを見るとやっぱり女の子だなあなんて思いながら騒ぎの中に入りこみ、2-Aの筆頭であるあやかとアスナの襟を掴み持ち上げた。

「はいはい、ストップだ。」

急に現れたマグナに驚いたのか、一時的に取っ組み合いが収まった。

「まったく、取っ組み合いなんて面倒くさいことしないの。」

暴れないことを条件に二人を放したマグナは口に啜っていたタバコを携帯灰皿に捻じ込んだ。

「その奴等も、中学生相手に大人気ねえぞ。もっと大人の対応をしようぜ。」

おどおどと頷く高校生達に満足したのか、解散を促すとアスナが突っかかってきた。

「先生！悪いのはあいつらなんですよ！」

「どっちにしたって先に手を出したお前が悪いだろ？我慢しなさいよ。」

そんなやり取りを見ていたネギはただただ感心するしかなかった。自分では抑えきれなかった騒ぎが見事にマグナの手腕によって収められたのだ。

「やっぱりマグナさんはすごいな……。」

「まあ、あの人にかかれば大抵の騒ぎは収められるよ。」

いつの間にかネギの隣に立っていたタカミチがそんなことを言った。それを聞いたネギはいつか、マグナのような教師になりたいと思っ

ていた。

「やっぱりマグナ先生ってすごくない？」

「確かに頼りになるかにゃー。」

休み時間が終わり、今は次の時間割りの体育のために体操服に着替えている途中である。

「う、うん。」

亜子がそんなことを言い出すと裕奈がワイシャツを脱ぎながら言う。アキラはというとまた新たにマグナの一面を見れたのか、未だに顔を赤らめている。

「ネギ君はちょっと情けなかったかなー。」

「でも十歳だからしよーがないじゃーん。」

その発言にシヨタコンであり、ネギ軍筆頭のあやかが口を挟む。

「何ですの、皆さんあんなにネギ先生のこと可愛がっていただくせに！」

「え〜でもさー。」

「10歳だしね〜。」

「もうすぐ期末もあるし、いろいろと相談できる先生のほうが・・・ねえ？」

「可愛さをとるか、頼りがいをとるか。」

その発言が的を得ているのか、先程までネギのことを養護していたあやかとまき絵が唸った。確かにネギは可愛いのだが、将来のことを考えてると確かに不安である。

「ホラホラ、今日は屋上でバレーでしょ、早く移動しましょ。」

そんなことを話していると着替え終わったアスナが皆を急かす。こ

の麻帆良学園は敷地の割には体育のコートが少なく、屋上でやることもあるのだ。

そのことに愚痴りながらも屋上の扉を開くとそこには既に先客が居た。

「あら、また会ったわねあんた達。偶然ね」

それは休み時間アスナたちに突っかかってきたウルスラ女子高の生徒達だった。

「何で何時もこう……ってなんでアンタはそこで捕まってるのよネギ坊主!!」

ばたばたと可愛らしく手足を振りながら高等部の生徒たちから離れようとして捕まっているのは担任であるネギ。事情を聞いてみると体育の先生が来れなくなったらしく、代わりにきたら見事に玩具にされたらしい。つくづく不憫なネギである。

「とにかく今回は私たちが先よ。お引取り願おうかしら、神楽坂アスナ。」

「……つく、あんた達態とでしょ!あんた達の校舎隣の隣じゃ

ない。態々中等部の屋上に来るなんて……！」

「へー今度は言いがかり？さすがお子ちゃまねー」

その安い挑発にアスナを筆頭とした2-Aが怒り出して高校生に殴りかかるうとする。担任のネギはというと未だ捕まったままになっており、止めることができない。そしてアスナの腕が振りかぶられ、同じように高等部の英子とよばれた生徒の腕も上げられるが、その腕は第三者の介入によって捕まえられた。

「だーから、暴力は止めとけとあれほど言っただろーが。」

それは2-Aの副担任であるマグナだった。何故ここにマグナがいるかというと、2-Aとウルスラの女学生との争いを止めるために来たのだ。ネギでは荷が重いからである。

マグナは2-Aの生徒と高校生の集団を見回して威圧する。サンゲラス越しても分かる、冷たい視線。それに怯んだのか、誰一人として動かなくなった。

「は、は……ハクション!!!」

とこんなシリアス真っ只中のこの場に似合わぬクシャミと強風。言

わずもかなネギの魔力暴発である。そのことに切れそうになるマグナだったが今回は風だけのようなので見逃すことにした。その風を中心であるネギに皆の注目が行くとネギはある提案をした。

それは両クラス対抗のスポーツ対決だった。互いに汗を流せばいいがみ合いも無くなると思つての提案だ。それを高校生たちは快諾した。種目はドッチボールに決まり、中学生側にハンデとして22人で戦うことを許可した・・・のだがドッチボールにおいて人数が多いのは不利になる。そのことを彼女たちは知らない。

と、ここで高校生たちが爆弾を落とした。(比喻ではなく)

「私たちが勝つたらネギ先生とマグナ先生を教師と教生として譲ってもらおうわ。」

ピキリ、とどこからかそんな音が聞こえた。続いてガチャというスライド音、刀を引き抜く音やガラスにヒビが入る音が聞こえてくる。

そして、ドッチボールという名の蹂躪が始まった。

「時間です！試合終了　　ッ！」

結果は2 - Aの完勝だった。どう見ても幼女にしか見えない金髪の少女がありえない速度でボールを投げたり、サイドテールの少女が刀でボールの勢いを殺したりとやりたい放題で勝ったのだ。

「フハハハハ！私に勝とうとは百年早いわ！」

「試合戦闘終了。」

「まったく、余計な手間かけさせんじゃねーよ。」

「久しぶりに餡蜜でも奢って貰おうかな？」

「精進が足りないな。」

この有様である。これは酷い。

かくして先生を賭けたドッチボール（という名の蹂躪）は2 - Aの

完勝で幕を閉じたのであった。

ドッチボール(という名の蹂躪)(後書き)

そういえば超下級のドってイギリスの戦艦のドレット・ノートの頭の音をとった当て字らしいですね。初めて知りました。

図書館島事件・前半（前書き）

最近学校がハードすぎる……。クオリティが下がってないか心配です。

図書館島事件・前半

期末テスト・・・それは学生にとって最大の敵であり、障害。殆どの生徒は遊びなどに使っていた時間を全て学業に費やし、最後まで足掻く。しかしそれは殆どの生徒であるだけであって・・・

「あははははーウチはエスカレーター式だから勉強しなくても大丈夫だよー。」

「毎回2 - Aは最下位だけだね。」

などとマグナの受け持ちのクラスである2 - Aはこのようにテストに関しては無関心である。毎回毎学年最下位なのだがまったくといっていいほど危機感が見られない。

ちなみに何故2 - Aが毎回最下位なのかというと、それはバカレンジャーという存在が2 - Aを最下位に陥れているからだ。バカレンジャーとはバカレッドである神楽坂アスナを筆頭に学年の中でも最底辺を漂っている5人の生徒を纏めてそういわれている。

リーダー、クラス一頭が悪いバカレッドである神楽坂アスナ、天然だから頭が悪いのかバカピンクの佐々木まき絵。本当は頭がいいのだが勉強嫌いのバカブラック、綾瀬夕映。筋肉バカ、バカイエローの古菲とバカブルーの長瀬楓、とこの5人が事実2 - Aのクラス順位上昇を妨げている。

「・・・大丈夫なのか？」

「あゝ現状じゃダメっぽいな。」

今日は珍しくスケボーを使わずに千雨と登校しているマグナが期末テストについて聞いたのだが、千雨は首を横に振る。

「つーかアンタのおかげで社会の科目は皆上がってんだけど、他の科目がまったくダメだな。」

「そんなにダメなのか？」

「ああ、社会はバカレンジャーも平均いくかいかないかまで。でも他の科目は前回とほぼ同じ。」

主観的な千雨の判断にマグナは頭を抱えなくなる。いくら一科目が

上がったもそのほかダメだったらダメなのだ。そんなことを話しているうちに学校に着くとネギとせずな先生が何か喋っているのに気がついた。

「ええ！？僕への最終課題！？」

どうやらネギへの最終課題についての話のようだ。近づいてその手紙を見てみると・・・

「
2 - A 最下位脱出？」

手紙に書いてあったのは迫り来ている次の期末テストで最下位を脱出しろ、という事だった。

「な、何だ簡単そうじゃないですかー！」

アハハハと安心したように笑うネギだったが、マグナは見えないところで本当に頭を抱えていた。今朝千雨の話を聞いている限りは無理げすぎるのだ。

そんなマグナは立ち直るとネギの肩にポン、と手を乗せて言った。

「生きてください。」

へっ？と間拔けな声を上げるネギの隣を通り過ぎて教室に入る。その後、千雨も続いて入る。残ったのは呆然としたネギと苦笑したしずな先生だけだった。

「今日のH・Rは大・勉強会にしたいと思います！次の期末テストはもうすぐそこまで迫ってきています。」

能天気共が集う2・Aに衝撃が走った。何せ最下位のクラスの担任が勉強会をしようと言い出したのだ。普通の教師だったら既に匙を投じているレベルなのにも関わらず。

その動揺を読み取ったのか、ネギが説明する。

「あのっそのっ、今回ウチのクラスが最下位になっちゃうと大変なことになるので皆さんで協力して勉強しましょー！」

大変なことといって生徒たちを誤魔化す。そんな幼稚な誤魔化し方で大丈夫かと思っただが、ネギ絶対主義であるあやかがキラキラした目でネギを賞賛した。

「はい！提案提案！」

と髪の毛をツインテールにした活発そうな少女
椎名桜子
が手を上げた。具体的に何をするのか決めていなかったネギは桜子の提案を聞いてみることにした。当てられた桜子は満面の笑みで

「では！！『英単語野球拳』がいいと思いまーす！」

爆弾を投下した。その提案が出た瞬間、無駄にノリのいいクラスの子供たちが沸き立った。

そもそも野球拳というのはじゃんけんをして負けた相手の服を一つずつ脱がせる宴会用のゲームなのだ。

桜子が出した『英単語野球拳』は単純に言えば英単語を言えなければ服を脱ぐというものだ。

常識的に考えてみればそんなことを中学生が提案するはずもないし、担任がやらせないのだが……

「（むむ……野球を取り入れた勉強法なのかな……。なんとなく面白そうだけど……。よしここは生徒の自主性を重んじて……。）」

「」
当の担任であるネギは野球拳をまったく理解していなかった。まだ精神が発達してないからか、はたまた単に日本のことを知らないだけなのか、勘違いをしたままネギはそれを許可した。

許可されたことに更に沸き立つ生徒たち。アスナは自分の頭の悪さの具合を理解しているからか、反対しようとしたがそこは2-Aクオリティ。アスナの抵抗虚しく集団に連れ込まれていく。ちなみにストッパーであるマグナはこの場に居ない。

ネギはそんなアスナの叫びにも気づかず生徒たちの成績をチエツクしようとした時、

「……何をしてんだ？」

教室の扉の方向から男らしい低い声が教室に響き渡る。ネギはその方向に顔を向け、生徒たちは一瞬で石になったようにその場に固ま

った。

その声の主、それはこのクラスのストッパーでありもう一人の教師、マグナ・ヴァーミリオンだった。

「……で、ネギ先生はその英単語野球拳の意味も追求せずにそれを許可させた」と。

「はい……。」

マグナは騒ぎを沈め、責任者であるネギに説明を求めた。その迫力に反発できないネギは素直に白状していく。ネギが必死に説明している間マグナは黙って聞き続けている。それが逆に居たたまれなくなっていく。

全ての言い訳を聞き終えた後、マグナはネギに向かって言った。

「貴方は本当に教師ですか？」

グサリと容赦なくネギにその言葉が突き刺さるがさらにマグナは続ける。

「野球拳を知らなかった、では済まされない問題ですよ。というかわらなかつたらどんなことなのか生徒たちに聞いてください。自分の知識だけでそんなこと了承しないでください。」

その説教に頂垂れるネギ。そんなネギを見かねたのか桜子やあやかがフォローを入れようとすると、マグナがそれを制する。マグナはその英単語野球拳の提案者である桜子に罰を与えた。

「つーか桜子、もともとお前がこんなこと提案しなきゃこんなコトにはならなかつたんだ。罰として反省文5枚と一ヶ月間のトイレ掃除をやれ。」

「えー！そんな殺生なー！」

その罰に悲鳴を上げる桜子だったが、そんなことは意に返さずにネギに一応フォローを入れてやる。

「課題のことで焦っているのは分かりますけど節度ある行動をお願い

いします。大丈夫、貴方ならできます。」

笑って肩を叩いてやるとネギが明るい表情に戻る。ネギが気合を入れなおしているのを横目にマグナは、

「（単純だな・・・ここはナギ譲か・・・。）」

なんて失礼なことを考えていたのだが、ネギがそれを知る由はない。

「あ？メルキセデクの書でバカ共を釣るって？」

「いや、そんな暴言は言っていないんじやが・・・。」

放課後、マグナは学園長に呼ばれたため学園長室のソファーに寝転

がりながら学園長と話していた。

「つまり、ネギとバカレンジャー達を図書館島に誘き寄せてネギの試練と同時にバカレンジャーの成績を上げようってコトだろ？」

「有体に言えばそうじゃな。」

確かそんなイベントあったような・・・と考えているのだが・・・。

「なんでそれを俺に話す？関係なくね？」

「それが関係あるんじゃないよ。ネギ君たちには期末テストまでの期間を図書館島の地下で過ごして貰う。じゃから必然的に学校には行けないんじゃないよ。そこで君には2・Aの生徒達に説明を頼みたいんじゃないよ。」

「まあそれは教師だからな・・・。」

「おおそれと生徒達の安否も確認しにいつてもらってもいいかのう？」

「それは嫌だ。」

その反応に驚く学園長。先程は教師だからという理由で生徒達の説明を承諾してくれたのに、安否はダメだというのに驚いたのだ。

「面倒くさい。つーかお前がやるんだから安全に決まってんじゃねーか。よって俺が見に行く意味なし。」

「ほづ？どづしてもかの？」

「どづしてもだ。」

と拒否しか表さないマグナに学園長はにやりと笑った。懐からあるものを取り出してマグナにチラつかせる。

「では残念じゃ。この『最高級ビーフジャーキー』を報酬にしようと思ったんじゃが……。」

「是非やらせてください。」

一瞬でソファーから立ち上がると腰を90°に折って学園長にお願いした。最高級とはいえ、ビーフジャーキーごときに釣られる恥知らずな英雄が居た！

とこんな感じでマグナは学園長に買収された。なんとも安い英雄である。

その夜、マグナが夜寝していると急に携帯の着信音が鳴った。眠い目を擦りながら確認してみると名前は早乙女ハルナ。何故自分の電話番号を知っているのかと思ったが歓迎会るとき携帯をとられていたからその時かと検討をつけながら電話に出る。

「もしもし……」

「もしもし先生！？大変、大変なの！」

キーンと大声を耳元で出されたため耳が痛くなる。

「落ち着け。それで何が大変なのかを説明しろ。」

そういうと冷静さを取り戻すために深呼吸する音が聞こえてくる。そして落ち着いたのか、状況を説明し始めた。

「あのね、ネギ先生たちが図書館島に読めば頭がよくなる本を探しにいったんだけど、今さっき連絡取れなくなっちゃったんだ。だから……。」

「あー分かった。今から3分でそっち行くから待ってる。」

「え、三分って」

と相手を待たずに電話を切る。パジャマをさつさと着替えて私服になって外にでる。立てかけていたスケボーに乗り、思いつきり踏みつける。すると急にスケボーの形状が変わっていく。

ガタガタと揺れながらその姿は鋭利になっていき、速さだけを求める姿に変わる。

足元のスイッチを入れるとありえない速度でスケボーは走っていった。なにせ時速300キロなのだ、砂煙を巻き上げ、突風を巻き起

こしながら図書館島を目指していく。

と目の前にあからさまに設置されたジャンプ台が目の前に迫ってくる。それを見たマグナは口の端を歪めて笑みの形を作った。

そしてそのままジャンプ台に乗っかり飛ぶ。夜空から下を見下ろすと町の灯りが点々と輝いている。そしてそのまま図書館島に着地。顔を上げてみると驚愕したようなハルナとのがこちらを見ている。

「うっし、三分。」

時計を確認したマグナは自分の言ったとおりの3分だったことに満足する。とハルナとのが再起動してハルナがマグナに詰め寄る。

「先生どうやって来たの?!」

「お前は友達より俺の登場か。」

バリバリと後頭部を掻きながら図書館島に入っていくマグナを見てハルナとのが焦る。

「先生案内必要じゃないの？」

「大丈夫だ。それよかお前ら、もう遅いから帰りな。」

それだけ言うと反論も聞かずにさっさと図書館島に入って行ってしまった。呆然とその背を見送った二人はなす術もなく、皆をマグナに頼んで帰るしかなかった。

図書館島事件・前半（後書き）

1,279,540アクセス 175,674人 ?

あ．．．ありのまま今起こったことを話すぜ！「俺は久しぶりにアクセス数を見たらアクセス数が1200000を超えてユニークも17000を超えていた」な．．．何を言ってるのか分からねーと思うが俺も何でこんなに増えたのかわからなかった．．．。

頭がどうにかなりそうだった．．．催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしい読者様の片鱗を味わったぜ．．．。

と長くなりましたがおかげさまでアクセス数、1,279,540ユニーク175,674となりました。嬉しいのですがその反面クオリティを下手に下げられない．．．。でもこれから頑張りますので応援よろしくお願いします。

図書館島事件・後半（前書き）

黒髪・ポニテ・生徒会長・巨乳・素直クールは俺のドストライクゾーンです。

禁書目録の神裂さんとかがそうですね。

図書館島事件・後半

図書館島・・・明治の中頃、麻帆良学園の創立とともに建設された世界でも最大規模の巨大図書館。二度の大戦の中、戦火を避けるために世界各地から貴重な本が集められている。蔵書の増加によって増改築が繰り返され、今ではその全貌を知るものは居ない・・・。

「にしても広すぎるだろ・・・。」

そうげんなり呟いたのはマグナ。現在マグナが居る階は地下5階。地下ということもあり、その広さは計り知れないほど広い。罫を回避しながら地道に歩いてきたのだが・・・

「このペースで行くと学校に間に合わねえな・・・。」

時計を確認してみると今は12時を回ったところである。いろいろと物色しながらここまで来たので余計に遅くなっているのだ。普通のペースで行けば往復4時間かかってしまうからして、このままでは間に合わない可能性もでてきている。

「あーあ、簡単な依頼だと思ったんだけどな……。」

ポツリと呟きながらマグナはその身を空中に投げ出した。重力に引かれるがままその身を委ねるが流石にその高さから落ちたら無事では済まない。

マグナは丁度目の前に迫ってくる本棚を見つけた。その本棚に着地をし、その落下の速度を一片も殺すことがないように膝をクッション代わりにして、跳んだ。

恐るべき速さで本棚を蹴りながら地下へ進んでいく。貴重な図書がどンドン奈落の底に落ちていくが、気にしないマグナ。

その様なことをしている内にマグナは9階に着いた。学園長からもらった地図を確認しながら進んでいくと、ある場所でマグナは止まった。地図を確認してそれが目的の場所だと確認したマグナは地図をポケットの中に捻じ込み、不意に拳を握ってその地面に拳を振り落とした。

破壊音が鳴り響いてその地面が砕け散り下への道が現れた。因みにこのようなことをしているが、学園長に許可を貰っていない。修理費などは学園長に出させるマグナであった。

その出来た巨大な穴に躊躇なく飛び込む。地面が見えてくると体制を整えて着地するとそこはどこかの神殿のような場所に出た。二つの石像が一つの扉と台座を守るように立っている。

後ろを見れば一箇所の石畳が取られている。ネギたちの進んできた道だろうと見当をつけると石像に向かって喋り始めた。

「おい、この下で合ってるんだよな？」

「うむ、そうじゃ。その下に落としたから確認を頼むぞい。」

首だけこちらに向けた石像の一人が喋りだす。声からして学園長なのだが、ネギたちは気づかなかつたらしい。

「つーかその石像体で確認しに行ったらどうなんだ、態々俺を使う必要無くね？」

「この石像が下に行くには結構時間がかかってしまうのでな。落とすのはいいんじゃないが、その下で万が一何かあったら大変じゃからな。」

何だかんだいっても生徒が大切な学園長はそう笑った。そうかい、と笑みを浮かべたマグナはネギたちが落ちた穴に下りていった。

「ん、よし。皆異常なしつと。」

穴から降りて地底図書室という場所にたどり着いたマグナはネギたちを見つけた。見たところ、アスナの肩の怪我以外に異常は見当たらない。皆気絶しているだけ。アスナの怪我の治療を簡単に済ませると学園長に連絡を入れる。

『皆異常はないぞ、気絶してるだけっぽい。』

『そうか、ご苦労じゃった。帰ってゆっくり休むといいじゃろう。』

そうさせてもらおう、と伝えると念話を切り、虚空瞬動で大気を蹴りながらも来た穴に向かう。

『おや、マグナではありませんか。』

石像の間に帰ってきたマグナの頭にその声が鳴り響いた。懐かしい戦友の声。

その声に導かれるように石像が守っている扉を開ける、とまず目に入ってきたのは、

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

視界を覆うドラゴンの姿だった。唾液を垂れ流し、巨大な足を踏み鳴らし、口の端から炎を漏らす。その姿はまさに、幻獣の王と呼ぶに相応しい姿。

並の魔術師が見たら卒倒しそうな存在感なのだが、マグナはそれを無視して前に歩き始める。

と、ドラゴンがその行く手を遮る様に翼を広げて威嚇する。まるで門番のようにマグナをその場に留めようとするが、

「うるせえぞ、蠅が。」

幻獣の王を蠅扱いしながらマグナは殺気を込めた視線を投げつける。その視線にドラゴンはまるで飼われている犬が主人に怒られたときのように怯えを見せた。戦友に呼ばれたとはいえ、蠅に構っている時間が無いマグナは手を手刀の形に変え、蠅を細切れにするため瞬動をしようとするが、それは戦友の声に阻まれた。

「申し訳ありませんが、この子を細切れにするのは止めてほしいのですが。」

片方の髪の毛を胸の所まで伸ばして纏め、柔らかな笑みを浮かべた優男……マグナの戦友であり、紅き翼アラルプラの一人であるアルビレオ・イマが其処に立っていた。

「まったく、教育はチャンとしておけよ。」

「申し訳ありませんね。久しぶりの戦友がここに来るなんて想像してなかったものですから。」

「よく言う、俺はココに来たときからお前の魔力は感じてたぞ。」

「フフフ、私も衰えたということですかね？」

自分のペースを崩さずにくすくす笑うアル。

「で、俺を何で呼んだんだ、アル？」

「マグナ！」

大声でマグナの名を呼ぶアル。キラリとその目が光るや否や、

「ココでは私のことはクウネル・サンダースと呼んでください。」

ガクリとこけそうになるマグナだったがすぐに持ち直し、理由を聞く。

「なんでそんな変な名前なんだよ。」

「いえいえ、この名前がかなり気に入ってますね。此処ではクウネルと呼んでもらうことにしたんです。」

「相変わらずお前が考えてることが分からねえよ。」

頭痛がしてきた頭を抑えながらアルの後に付いていく。見晴らしの

よいテラスに出ると滝の音が心地よく聞こえてくる。テーブルに案内され、席に着いて紅茶を飲む。

「んで、話が逸れたけど何で此処に俺を呼んだんだ？」

「おや、久しい友人と再会の話をするのはいけないことですかね？」

「お前のことだ、どうせ碌でもないこと話すつもりだろ。」

「碌でもない話ではないんですけどね……。」

サクサクと軽い音を鳴らしながらクッキーを食べるマグナを見ながらアルは表情を変えた。

「ナギは生きています。」

「知ってる。」

アルにとっては重大発表だっただろうか、そんな簡単に返されると思ってたかったアルは珍しく少し呆然としている。その珍しい表情を見てマグナは鼻を鳴らした。

「あのバカが死んだなんて言われてっけど、あのバカがそう簡単にくたばるわけねーよ。仮にも千の呪文サウザンド・マスタイの男なんて呼ばれてんだ、どつかでのほほんど暮らしてんじゃねーか？」

「何故其処まで断言できるんですか、パクティオーカードもナギと作ってないんでしょう？」

そのアルの問いにマグナは喉の奥で笑いながら答えた。

「それは幼馴染の俺が一番長くアイツの隣にいたからだよ。」

「パクティオーカードもそうだ。主従関係じゃなくて親友同士で居たいから作らなかつただけさ。」

「作つたとしてもその主従関係にならない人もいますが？」

「形だけでも俺達は嫌だつたんだよ。」

ガリガリと頭を掻きながらアルの問いかけに答えていく。マグナの答えはアルの知らない、マグナとナギの関係を深くまで知ることの出来る答えだった。そのことに笑みを更に深めてアルは笑った。その笑みは嫌味でもなんでもなく、屈託の無い笑みだった。

「そうですか、ところでマグナ貴方時間は大丈夫なんですか？」

「あゝ」

慌ててマグナは時間を確認すると既に7時を回っていた。此処から帰るのには本気を出しても時間がかかってしまう。ギャーと頭を掻きながら慌てるマグナにアルはまた笑みを零した。

「でしたら、私の転移魔法で送りましょう。」

そういつや否やマグナの足元に魔法陣が現れ光が溢れ出す。その魔法陣を見たマグナは焦るのを止めてアルにお礼を言った。

「すまねえなクウネル。しっかしお前がこんなことするなんてな、正直お前は人の慌てる姿を見るのが好きだと思ってたんだが。」

「ええそうですね、私は人の慌てる姿を見るのが好きですよ。」

「は？だつたら何で」

その理由を聞くことも出来ずにマグナは地上に転移された。一人その場に残ったアルはポツリと呟いた。

「貴方のお話のお礼ですよ、マグナ。本当に」

貴方と居ると退屈しない。

「何ですって！？2 - Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビに！？」

ネギ達が図書館島に潜り込んだ次の日、桜子がクラスの皆にネギが首になるかも知れないとバラすと真っ先にあやかが食いついた。桜子の肩を掴み何故早く言わなかったと追求するが、桜子は口止めされてたと言いつつ訳を言った。

ネギがクビになるかもしれないという噂は瞬く間に広がって皆がざわつく。あやかはどうにかネギがクビにさせないために考えを張り巡らせるが、それは二人の生徒によって崩される。

「大変だよー！ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に・・・！」

えっ？と固まるあやかとクラス一同。もうダメだと思ったその時、また教室に入ってくる人物が居た。

「おはよーっす。出席とるから席着けー。」

先程転移してきたマグナだった。マグナを見たハルナとのどか、それにあやかが詰め寄る。

「先生、ネギ先生達はどうなったんですか?!」

「先生！ネギ先生がクビになるって本当ですか?!」

「あー、その話するからまず席に着け。」

うまく宥めると渋々だが自分の席に戻っていく3人。全員が席に着いたのを確認したマグナは口を開いた。

「お前らの知ってる通り、ネギ先生は2 - Aが最下位脱出しないとクビになるのは本当だ。」

ざわざわとまた騒ぎ出すクラスを静まらせる。

「静かに！それで、今ネギ先生とバカレンジャーは図書館島の地下で特別講習をしている。テストの日には来るし、安心しろ。」

そのニュースにホッと胸を撫で下ろす一同だったが、

「まあお前らが点数下げたら元も子もないけどな。つーわけで今日明日は2 - Aは特別に全部の時間割をテスト勉強に回してもらった。感謝しろ！」

ビシイと効果音がつきそうなほど勢いをつけて指をさすマグナ。全ての時間割がテスト勉強と言うことに不満を漏らす一部の生徒が居たが……。

「すばらしいですわマグナ先生！皆さん、今日明日猛勉強して絶対にネギ先生を2 - Aの教師に留まらせませすわよ！」

熱く燃えるあやか。それに頷いたマグナは自習にして教師用の机に座った。あやかを筆頭に猛勉強する皆を見ながら手を前で組んで黒い笑みを浮かべた。

「（計画通り……!）」

事実、ネギのクビがかかっている時点であやかは暴走するに決まっている。だから適当な名目をつけてやれば簡単にあやかを釣れてクラス全体を勉強モードに持っていけるのだ。

「（まあ原作じゃ一位通過でクビにはならんし、俺も教師つつー立場だからな・・・生徒の成績を上げるに越したことは無い、か。）」
なんてことを考えながらタバコ吸おうとすればさよに注意され、苦笑するしかなくタバコをしまう。時々分らないところを聞かれたりするので丁寧に教えたりする。

そんな慌しい2-Aの1コマ。

「平均点が89.0点となり、8.2点差で・・・なんと2-Aが
トピじや...」

『や、やったーーーーーッ!』

結局勉強の甲斐があったのか、原作以上の差をつけて1位になった2-A。大歓声を上げている皆の中をすり抜けて外にでるマグナ。

「万馬券どころか億馬券だったな・・・。」

実はコイツ、教師の癖に成績順位発表の賭け事に参加していたのだ。賭けた食券の数は500と賭けていたので大穴の2-Aは倍率が凄まじいらしくありえない量の食券が貰えたのだ。

「おや、億万長者の師匠じゃないか。」

その声に振り向くとニヤニヤと嫌な笑みを浮かべた真名にエヴァンジェリン、横には苦笑気味の刹那と茶々丸、千雨が居た。

「まあそのぐらいの食券があるんだ、私に奢ってくれよ。」

「到底貴様では使い切れん量だしな、私達が消費してやろう。」

「すみませんマグナさん。私もいいですか?」

「私は何でもいいので……。」

「手前えらはハイエナか！」

そんな叫びを一つ残して、晴れてネギは正式に教師になったのだ
た。

ちなみに後日、女子中学生に奢っている教師をよく見かけることが
あったとかなかったとか

図書館島事件・後半（後書き）

次回から吸血鬼事件に入りたいと思います。がんばるぞー

吸血鬼事件の幕開け（前書き）

スランプエ・・・

吸血鬼事件の幕開け

「……………うむう……………」

心地よい日差しが当たりながらマグナはベッドから出た。壁にかけてある時計を見てみればいつもより少し遅い時間に起きたらしい。顔を洗って完全に目を覚まさせリビングに向かう。

リビングではいつも通り茶々丸が朝食の準備をして、エヴァンジェリンは新聞を読んでいた。

「そついえば今日から新学期か。」

「ああそついえばそつだったな、まあ私にはあまり関係ないがな。」

フンと鼻で笑うエヴァンジェリンを見ながらマグナは思い出したようにコーヒーカーップを傾けた。

「3年生といえば京都に修学旅行か？」

京都、修学旅行という単語にピクリと反応するエヴァンジェリン。そこに丁度朝食を作り終えた茶々丸が答えた。

「はい、麻帆良学園の中等部の3年生の修学旅行先は京都になっています。」

「まあ中学生の修学旅行っていったら京都だよな。」

うずうずとせわしなく動くエヴァンジェリンに向かってニヤニヤと嫌な笑みを浮かべるマグナ。

「あーあ、せつかく俺がエヴァの呪い解いたつてのに3年の修学旅行には興味無いですか？」

「そうなのですか、マスター？マスターは日本の風景が好きだと思っただですが……。」

「そつとしておけ茶々丸、きつとそれは勘違いだ。」

「そうですね、では毎年修学旅行の時にもの凄く沈んでいたのは」

そこでエヴァンジェリンが爆発した。

「うがー！そつだよ！修学旅行が楽しみだよ！毎年毎年パンフレットを眺めているだけの毎日だったけど今年はずう！呪いが解けているから修学旅行に行くんだあ！」

そんなぎゃーぎゃー騒いでいるエヴァンジェリンにマグナと茶々丸が冷静に一言。

「朝から煩い。」

「静かにしてくださいマスター。」

「(；(；)」

どこまでも不憫なエヴァンジェリンだった。

朝食を食べ終えたマグナはスーツに袖を通して家を出た。脇に挟んであった改造スケボーを地面に落として乗る。走り出すと春の暖かい風がマグナを通り過ぎていく。

駅の前の通学路に差し掛かると丁度通学ラッシュの時間帯だったのか、大勢の生徒たちが駅の入り口から出てきた。

「センサーおはよー！」

「あ、マグナ先生だ。」

顔の広いマグナに次々と挨拶してくる生徒たちに挨拶を返しながらスピードを上げていく。と身に覚えのある一団の背中姿が目に入った。

「おはよーっす。」

「おっセンサーじゃん、おはよー。」

「センサーおはよーっすいまーす。」

「せ、先生おはようございます……。」

マグナの受け持ちのクラスの生徒の裕奈、亜子、アキラだった。スケーターのスピードを調節してその3人に並ぶようにする。

「今日から新学期だなー。」

「そーだね、私たちもついに三年生かー……。」

「そうやね、これから一年よろしくなー。」

「そうだね……。」

元々運動神経のいい3人は喋りながらも走るスピードは緩めることではなく、むしろ少しずつあがってきているように思える。とマグナがふと気づいたように3人に聞いた。

「そういえば佐々木はどうした？」

「まき絵？そういえば見てないな、アキラと亜子は見た？」

「ウチは見えてないな。」

「私も今日まき絵は見えてないな……。」

「遅刻か？」

「さあ？ 大方今日身体測定があるから休んでんじゃないの？」

胸ペタンコだしねアハハハと笑う裕奈に苦笑するマグナ。その横で亜子がちょっと胸を気にしていたのは見なかったことにしたい。

「ま、何はともあれ今日から一年よろしく頼む。」

背中に了解の声を受けながらマグナは学校に向けてスピードを上げた。

『三年！A組！』

『ネギ先生&マグナ先生ーっ！』

朝のHR、ノリの良い生徒たちが教壇に着いたマグナとネギに向けて大声で叫んだ。まあ一部の生徒たちは呆れていたようだが。

まずネギが改めて自己紹介をしようと前が出る。

「えと・・・改めまして3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの1年間、よろしくお願いします。」

そういつと一歩下がってマグナに場を譲る。マグナはかったるそうに前に出た。

「改めて、3年A組の副担任になったマグナ・ヴァー ミリオンだ。ま、これから1年間よろしくたのまあ。」

なんともまあやる気の見えない自己紹介だが生徒たちは満足したように歓迎してくれている。と、不意に教室のドアがコンコンと叩かれた。

「ネギ先生マグナ先生、今日は身体測定ですよ。3 - Aのみんなもすぐ準備してくださいね。」

現れたのはしずな先生だった。そのことを思い出したネギはしずな先生にわかりましたというと皆に向けて、驚くような発言をした。

「で、では皆さん身体測定ですので……えと、あの……今すぐ脱いで準備してください！」

あちゃーとマグナが額に手をやるとすぐさま出口に向かって瞬動で移動する。ネギが自分の発言に気づくと同時に生徒たちを見ていると顔を赤らめて口に手を当てていた。

『ネギ先生のエッチ〜!』

「うわーん!間違えましたー!」

と慌てて教室から出てくるネギ。その姿を見たマグナはため息交じりに苦笑した。しかし苦笑を浮かべていられるのはいつぐらいまでだろうと考えながらだが。

きゃーきゃー騒ぎながら身体測定をしている生徒たちの声を聞きながらネギとマグナは廊下に立っていた。

「なんか楽しそうですね。」

「まあ思春期の女の子にとって身体測定は戦場みたいなものですからね。」

生徒たちの騒ぎ声をBGMにマグナとネギは和やかに談笑していた。するとそこに一人、こちらに向かってきた。

「先生ーっ！大変やーっ！まき絵が・・・まき絵が」

ただならぬ顔色をして走ってきたのはマグナが朝会った亜子だった。何かを伝えようとしてマグナたちのほうに向かってくるが、その時身体測定中であるはずの3-Aの教室のドアや窓が開いて廊下に顔を出していた。

『何！？まき絵がどうしたの？』

「わあーーーー！」

声に反応してネギが見たのは下着姿の生徒たちだった。いくら生徒間の友情が深くとも聞こえただけで下着姿のまま外に顔を出すだろうか？ちなみにマグナは教室側の壁に背をもたれているので下着姿は見えていない。というか見たら殺されそうな気がする。主にエヴァ達に。

所変わって保健室、そこには静かな寝息を立てて寝ているまき絵がいた。

「ど、どうしたんですかまき絵さん？」

「なにか桜通りで寝ているところをみつかったらしいのよ……。」
ネギの質問にしずな先生が代わりに答える。しかし見てみると本当に何もなかったかのように静かに寝ている。とネギはしずな先生の桜通りという場所に違和感を覚えた。

「見たところ寝てるだけだな。」

「何だ、たいしたことないじゃん。」

「甘酒飲んで寝てたんじゃないかな？」

まき絵の心配をしていたクラスメイト達はまき絵の寝ている姿を見て拍子抜けしたように表情を変える。しかし、ネギだけは違った。

「……いや、違うぞ！ほんの少しだけど『魔法の力』を感じる……！」

まき絵の近くによってさらに確認を取る。

「（どういふことなんだろう、僕のほかに魔法を使える人がいるのかな……？）」「

すっと立ち上がり、顎に手をあてながらさらに考えを深める。

「(図書館島以外でこんな力を感じたことはない・・・もしかしたら・・・?)」

と考えていると急にアスナに現実呼び戻され、心配される。それに笑顔で返しながらただの貧血だと伝えた。

その光景をマグナは小さなため息を吐きながら見ていたのを、ネギは気がつかなかった。

そしてそのため息の本当の意味を知るのはまだ先のことになることも。

吸血鬼事件の幕開け（後書き）

スランプで小説が書けない！書きにくい！ということ、他の小説を目下製作中でありませう。まあ息抜き程度に更新して行くのでネギまよりかは更新速度が遅くなる予定でせう。完成したら活動報告で報告したいと思ひます

吸血鬼とチュパカブラってあんまり大差ないと思う（前書き）

スランプ脱出（？）しました。他の小説を書くために頭を切り替えるので言いリフレッシュになりました。この調子でこの小説も、他の小説も頑張って書いていきます！

吸血鬼とチョコパブラってあんまり大差ないと思う

「はあ？ネギの試練だった？」

時は遡って吸血鬼事件の噂が流れる前、学園長室でマグナは素っ頓狂な声を上げた。

「うむ、そうじゃ。」

頷く学園長を見てマグナは隣にいるエヴァンジェリンに小声で話しかけた。

「どう思う？」

「どうも何も、私を踏み台にしてばーやを育てる意図が見え見えだな。」

「だよなあ……それに俺も一役囓ませよって魂胆だな。」

といったように小声で会話を続けるマグナとエヴァンジェリン。ぶつちやけその内容は学園長が隠している真実と大差ない内容だ。それに気づかずに学園長が自慢である髭を梳きながらマグナとエヴァ

ンジエリンに問う。

「で、どうじゃ、やってくれんかのう？エヴァはネギ君の血を吸えば魔力も増えるじゃろうし、マグナ君は親友の息子の成長具合が見れるしの。」

いいこと尽くめじゃ！と言っている学園長だが当のマグナとエヴァンジェリンは滅茶苦茶胡散臭そうに学園長を見ている。

「……まあ生意気なぼーやを合法的に叩くいい理由になる、か……。」

何か危険なことをぶつぶつ言っているエヴァンジェリンはどうやら学園長の計画に乗ることにしたようだ。それに対してマグナは渋い顔をしたまま首を横に振った。

「俺は拒否する。なんでそんなことに首を突っ込まなきゃいかんだ。」

「ふお?! いいの?! 仮にも親友の息子じゃよ?! 何か危険があったら」

「それは無い。」

学園長が焦ってマグナを引きとめようとするが、マグナはそれを切り捨てた。学園長の目の前で指を振る。

「仮にも英雄の息子として扱われているガキを預かっている学校の最高権力者がわざわざそのガキを潰す筈が無い。むしろ成長を促す^{トップ}ほか無いな。潰したら自分に絶大な批判が返ってくるからな。」

ニヤリ、と嫌な笑みを浮かべるマグナに学園長は冷や汗をたらたら流し、何も言えない。自分の考えをすべて見透かされている、とまで感じた。

「大方、この学園の魔法使い達が行っている『絶対正義』に毒されないようにしたいんだろうが・・・まあそれに関しては俺はいいと思う。でも、それに俺を巻き込むな、面倒くさいんだよ。」

眉間に皺を寄せて『やりたくないでゴザルオーラ』を全面的に出す。そのオーラに当てられたのか、学園長はため息を吐くと渋々引いた。背伸びを一つするとエヴァの頭をポンポンと叩き、茶々丸に手を振ってから学園長室を出るマグナ。

「まったく・・・彼はわからないの・・・。」

そう学園長は呟くと、エヴァンジェリンと計画について話し合い始めた。

それから数日経った頃から吸血鬼の噂が広がり始めたのだ。話し合ってたのはこの事か、とマグナはまき絵を調べているネギを見て溜息をついた。

微妙か　　マグナからしてみればバレバレなのだが　　に
エヴァの魔力が残っているから学園長とエヴァの計画だと思ったのだ。今頃机に突っ伏して寝ているエヴァを想像して頭を掻いた。

「（ネギもネギで気合入っちゃってるし・・・これは今夜動きがあるな・・・）」

そう考えるとマグナは少し唇の端を歪めた。自分が関わる面倒ごとについては嫌がるのだが、まったく自分に関わらない面倒ごとを傍

から見ているのは大好きなマグナだった。

そうこうしている内に下校時間はとっくに過ぎた時間帯。噂の桜通りに一人気弱そうな少女がビクビクしながら歩いている。その少女の名前は宮崎のどか。マグナの受け持ちのクラスの生徒である。

最近噂にある桜通りを通っているからか、あたりをキョロキョロ見渡しながら歩いている。こわくないと何度も言いながら歩いていると不意に桜の木が揺れた。

風も無いのに揺れる桜の木を見て少し怖くなるのどか。そしてまた桜の葉が揺れる音が聞こえた。その方向を見てみると・・・。

「ひっ・・・。」

黒のローブを身に纏い、御伽噺に出てくる魔女が被っているような帽子を被って街灯の上に立っている少女がそこにいた。金髪の髪は着地時の風で揺れ、のどかを真っ直ぐに見ると呟いた。

「27番宮崎のどか、か・・・悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ。」

唇の端を歪めて笑みを作りながらそう呟く。開いた口から見えるのは人間には無い鋭利な犬歯。それはまるでファンタジーの中に出てくる吸血鬼のようで。

「キヤアアアアアア！」

街灯を踏み台にして血を吸う為にのどかに飛び掛る。その鋭利な歯がひ弱な少女に突き立てられようとしたその瞬間、誰かの制止の声がかかった。

その声に遮られたのか、血を吸うことを後回しにしてのどかの目の前に着地した吸血鬼。のどかはのどかで恐怖が極限にまで高まったのか、目を回して気絶してしまった。

「僕の生徒に何をしますかーっ!」

その声の主は杖に乗ったネギだった。かなりのスピードで迫るネギは杖から下りて吸血鬼に迫りながら右手に魔法を使うために魔力を集める。

『風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ』

詠唱が終わると魔力を溜めた右手を目の前の吸血鬼に向かって魔法を放つ。

『サキタ・マギカ魔法の射手・アエール・カフトウーラエ戒めの風矢！』

『レフレクシオー氷楯……。』

襲い掛かる捕縛用の風の矢を見て吸血鬼はもう気づいたか、とポツリと呟く。小さな声で魔法名を呟くと魔法の矢が直撃しなかった。吸血鬼の目の前に薄い氷の障壁が張られ、魔法の矢全てがはじき返されてしまったからだ。

ネギは気絶したのどかの元にたどり着きながら自分の魔法をはじき返した事に驚嘆していた。それと同時にやはり犯人は魔法使いだと確信する。

倒れたのどかを抱き上げながら煙が晴れたその先を見やる。煙が晴れたその先には吸血鬼がその素顔を晒していた。そしてその正体はネギも知っている人物だった。

「えっ……き、君はウチのクラスの……エ、エヴァンジェリンさん!？」

そう、吸血鬼の正体とはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだった。素顔を晒しているエヴァンジェリンは別に何も気にすることが無いのか、先ほどの魔法の矢の魔力の密度に少し驚いていた。

「フフ……新学期に入ったことだし、改めて歓迎のご挨拶と行こうか先生。いや、ネギ・スプリングフィールド。」

エヴァンジェリンはその姿に似合わぬ笑みを浮かべながら驚いているネギを見る。思ったより魔法の矢の威力が強かったのか、血が流れている自分の指をペロリと舐めながら一人呟いた。

「この年にしてこの力……流石に奴の息子なだけはある。」

今、小さな魔法先生に最初の試練が襲い掛かるうとしていた。

その戦闘舞台を見ている男が一人、誰にも気づかれずに屋根の上から見ている。

その男の名はマグナ・ヴァーミリオン。

「今日動きがあるって気がしたんだが・・・当たりだな。」

そう、彼は唯この舞台を見るために来ていたのだ。介入する気はさらさら無い。観客である自分が舞台に立つなど無粋以外の何者でもないからだ。

そう傍観しているとエヴァンジェリンが逃走を開始した。ネギは駆けつけてきたアスナと木ノ香に気絶しているのどかを任せるとエヴァンジェリンを追う。

「おっとっと、舞台が変わるか。俺も遅れないようにしないとな。」

誰に言うでもなくそう呟くと強化も何もしていないその足で夜空を飛ぶ。気づかれないように、かつ見失わないように追いかけるのは彼にとって造作も無いことだ。

激しい空中戦の末、ネギはエヴァンジェリンを追い詰めることに成功したようだ。マグナは別のポイントに着地するとそこには茶々丸がいた。

「おや、奇遇だな。」

「あ、ま、マグナさん。」

茶々丸はマグナが来たことに対して動揺しているようだがマグナはそれを収める。マグナは茶々丸の動揺が収まると眼下のネギとエヴァンジェリンに目を向けた。茶々丸が首を傾げてマグナに尋ねる。

「マグナさんはこの計画に参加しないのでは？」

「参加はしないさ。俺は唯この舞台を見ている観客に過ぎないから

ね。」

依然としてネギとエヴァンジェリンに目を向けながらそう答える。茶々丸は茶々丸で納得したのかマグナと同じようにマスターであるエヴァンジェリンの方向を見る。

「ほら、茶々丸の出番だ。行ってきな。」

「はい、では失礼します。」

そういうと茶々丸は高速でエヴァンジェリンの方向へ向かっていった。ネギは突然現れた茶々丸に動揺しているが、捕縛用の魔法を放とうとする。しかし茶々丸がそれを許すはずも無く、詠唱中のネギにデコピンを当てる茶々丸。衝撃と微痛でいったん詠唱が止まってしまうネギ。

2対1と言う状況下で必死に相手をつままえようとするネギを見てマグナはフフツツと笑う。それは出来の良い劇を見て笑うかの如く。

「さあ・・・まだまだ舞台は終わらないぞ、坊主？」

そしてネギはピンチに陥った。結局何も出来なかったのか、茶々丸に持ち上げられ何も出来なくなるネギ。エヴァンジェリンはもがく

ネギに近寄って血を吸おうとする。

死ぬまで血を吸う、というのは嘘だろうが結構な量を吸うつもりだろう。首筋に歯を突き刺すと血を吸っていくエヴァンジェリン。と、ここでまたしても誰かの声が近づいてくる。

「コラッ！この変質者共！ウチの居候に何すんのよーッ！」

ガガッ！と鈍い音が夜の空に響き渡った。

現在ネギの母親のような存在のアスナが血を吸っているエヴァンジェリンとネギを捕まえている茶々丸の顔面を蹴り飛ばした音だ。エヴァンジェリンは障壁を常時張っているのだが、何故かその障壁を貫いてエヴァンジェリンにダメージを与えた。エヴァンジェリンはその事に動揺しまくっているが、遠くから見ているマグナは一人ほくそ笑んでいる。

『マジック・キャンセル
完全魔法無効化』

魔法世界の伝統を重んじる小国・ウェスペルタイア王国の王族の血筋にしばしば生じる希少な能力だ。

マグナはアスナを一目見て、自分がまだ紅き翼アラルプラにいた時に一時一緒に行動していた子だと見抜いていたのだ。

自分の魔法障壁を何らかの力で貫いてきたアスナを睨み付けながらエヴァンジェリンは茶々丸と一緒にその戦闘圏から退いた。こちらに近づいてくるエヴァンジェリンと茶々丸。

「よう、見事にアスナに蹴り飛ばされたな。」

「クソッ、あれは一体何なんだ?! 一般人が私の魔法障壁を破るなど……。」

悪態をつきながらアスナの力について考察を始めるエヴァンジェリン。マグナはそんな彼女を見てポツリと呟いた。

「まあ一般人……だったら、な。」

「む、それはどういうことだ?」

その呟きに反応したエヴァンジェリンがマグナに問うが、マグナはひらりとその話題をかわす。

「それは自分の力で確かめな。」

その答えに満足しないのか、エヴァンジェリンはマグナに詰め寄るがマグナはそれを無視して茶々丸に話しかける。

「今日の飯は何だ？」

「え、あ、はい。今日はグラタンにしようかと。」

「お、いいねえ。シーフードがいいなあ。」

「おい、だからさっきの発言はどういう意味だ?!」

麻帆良学園の夜の空でそんな陽気な話し声が響き渡った。

(・乙) <貴様等には水底が似合いだ(前書き)

A C f aで好きなキャラクターはオッツダルヴァとダン・モロ、ロ
ーディー先生にオールドキング、オペ子こと電スミカさんです。
結構多いな・・・。

(乙) <貴様等には水底が似合いだ

電動スケボーで通勤するマグナの朝は結構早い。教師という役柄も結構大変なものなのだ。

朝早く来て教室で自主学習をするつもり生徒達に挨拶をしながら麻帆良の空を舞う男達を華麗に避ける。追いかけてくるチャイナ娘は問題を出して悩んでいるうちに突破。

速度を落としてスケボーから降りて肩に担ぐと千雨がちょうど下駄箱に手を掛けていたところに出くわした。

「うーっす。お前も早いもんだな。」

「まあな。あのゴタゴタに巻き込まれる気は更々ねえからな。」

そう言いながらも下駄箱に外履きを入れて中履きに履き替える。マグナも履いていた靴を下駄箱にぶち込むとサンダルを取り出して履く。

「……もうちょいまともな中履きはねえのかよ?」

「いいんだよ。サンダルのほうが開放感あるし、履く時と脱ぐときが楽なんだよ。」

ペタリペタリとサンダルを鳴らして千雨と別れ、職員室に入ると既に半数以上の教師が今日の授業のための準備をしていた。

荷物を自分の机の上に置いて備え付けのパソコンをたちあげる。少し時間が掛かるため、給湯室にコーヒーを淹れに向かうとタカミチがコーヒーの準備をしていた。

「おはようございますマグナさん。」

「ん、おはよう。タカミチ、ついででいいからコーヒー淹れてくれ。」

はい、と了承の返事を聞くと給湯室から出て自分の席に戻る。既にパソコンはたちあがっていた。そのまま軽く授業の準備をしていると机の脇にコーヒーカップが置かれた。

「サンキューな。」

「いえいえ。」

短いやり取りを終えてマグナは授業の準備を終わらせた。基本的にマグナは授業の準備を余りしないタイプだ。その場でエピソードを頭の中で弾き出して生徒に話して聞かせるので、授業の準備は軽いものだ。

タカミチが淹れてくれたコーヒーを飲んでいると、ネギが職員室のドアを開けてやって来た。が、どこか・・・というより全体的に雰囲気を変だ。

「・・・・・・・・おはようございます・・・・・・・・。」

何か人生に行き詰った人が出すオーラをコレでもか！というほどまですに出している。ほのぼのとした職員室が一変、ネギの出す瘴気のせいでお葬式ムードになってしまった。

隣の席のタカミチと顔を見合わせると、タカミチは苦笑気味に笑った。

「これはやり過ぎじゃないのかなぁ・・・？」

「ま、どつちって立ち直るのが見物だけだな。」

一分に一度の割合でため息を吐くネギを見てそう返すマグナ。フォーはするつもりはない。無論タカミチもするつもりはないようだ。そのまま仕事に集中するタカミチ。

どこか上の空というか、落ち込んでいるのかフラフラと覚束ない足取りで歩いているネギは時折ドアの端っこに頭をぶつけていたりした。

こんな状態で大丈夫か？と思ったマグナだった。

少しネギの授業を見てみてもやはり職員室と同じで、どんよりした瘴気を出しているかほおつとしていたかのどちらかで、時々空席になっているエヴァンジェリンの席を見て怯えていた。

何故エヴァンジェリンが席に居ないかというと、エヴァンジェリンは今屋上でサボっているからだ。10数年も聞いてきた授業をするのは時間の無駄と判断したのだろう。

授業が終わると皆に心配を掛けまいと笑顔を作るネギだが、皆から顔を逸らすとまた暗い、思いつめた顔に戻るネギ。ガツンと盛大に頭をドアの端にぶつけるが痛むことすらしないで覚束ない足取りで教室から出ていた。

それを心配に思ったネギの現在の保護者役のアスナがネギを追いかけるために教室から出て行った。クラスの中ではネギのパートナー探しは問題ではないかと騒いでいるらしい。

次の時間はマグナの担当している社会の時間だった。授業を着々と進めて、いつも通り時間に余裕を残して授業が終わった。静かにしてれば何やってもいいと言い渡して椅子に座って煙草を取り出そうとすると、マグナに影が差した。

顔を上げてみるとそこにはネギの心配をしている面々が揃っていた。一番前に出ているあやかが口を開いた。

「マグナ先生。ネギ先生の様子がおかしいのは知っていますか？」

「ああ、朝っぱらからあんな様子だったな。」

「先生、何か原因を調べてますか？」

横にいた和泉が心配そうな面持ちでマグナに尋ねる。原因を知っているのだが話すわけにはいかない為、適当にはぐらかす。

「さあな、俺は知らん。ま、落ち込んでるんだったら慰めてやればいいんじゃないか？」

ああ！と思い立ったようにマグナから離れていく面々。そのままクラス全員に何かあやかが説明しているようだがマグナはそれを見無視して取り出そうとしていた煙草を口に啜えようとするが、無くなっていた。

仕方がないので箱から新しい煙草を取り出そうとするのだが、箱も無くなっていた。まさか・・・と思ったマグナはある空席を見てみる。とそこには無くなっていた筈の煙草と箱が浮いているではないか。

厳密に言えば浮いているのではなく自縛霊であるさよが腰に手を当てて煙草を手を持っているだけなのだが、傍からみればさよの姿は見えないため浮いているように見えるのだ。

『だから、煙草は駄目ですっていつてるじゃないですか！』

『いいじゃねえか一本ぐらい。』

『それでも駄目なものは駄目なんです！』

ぽーいと念動力を使って煙草を開いている窓から放り出してしまった。生憎と今日持つてきている煙草の箱はあれ一箱だけだったので、今日学校に居る間は吸えない事になった。

うがー！と頭を掻き筆つてどうにか落ち着いたマグナの耳に授業終了のチャイムが聞こえた。そのまま退室しようとしたマグナの腕が誰かに掴まれた。

誰の手かを見てみるとそれはネギラヴ（発音良く）でありシヨタコの学級委員長のあやかであった。その目はどこか真剣で、マグナを見据えている。

真剣なのはいいのだが、あやかが真剣になるのは実際学校行事の時にネギ絡みの時だけだ。チラリとカレンダーを見てみても、一番最初の行事である修学旅行まで日がまだある。

ということとは完全にネギ絡みの話だろう。さつきもネギのことを聞いてきたことから何か慰めのパーティーでも開くつもりかも知れない。

「マグナ先生、ちょっとお話が。」

逃げられないことを悟ったマグナは大人しくあやかの話を聞くことにした。

「で、その話がコレかよ……。」

今マグナが居るのは女子寮の大浴場だ。近くにビールを桶に乗せてプカプカ浮かべている。そしてマグナの目の前では、まさに桃源郷というべき光景が広がっていた。

「えへへ ネギ君最近元気ないみたいだから、ネギ君を元気付ける会を開いてみたよー！」

マグナの目の前にはエヴァンジェリンと茶々丸を除いた生徒達の水着姿があった。先ほど桜子が言ったとおりこれはネギを元気付ける会。マグナはあやかに大浴場の貸切を頼まれたのだ。

それぐらい財閥の金でどうにかしろ！と言いたかったマグナだったが、どこか危ない目つきをしていたあやかには勝てなかったらしい。しぶしぶ許可を取りにいくと、マグナ同伴だったらOKという条件付で許可が下りた。

一応女と男なんだが・・・といった所、寮長に、

『大丈夫だ、問題ない。』

とサムズアップ付きで返されてしまった。仕方がなかったなので皆に水着を着用するようにいった。マグナももちろん水着を着ている。

眼前でネギが遊ばれているのを見ながらビールを飲むと抜け出してきたのか、真名と刹那、千雨がマグナのほうに来た。

「アレって元気付ける会か？」

「どちらかというと逆セクハラだな……。」

「当初の目的を失っているのは明らかですね。」

「まあ無料で飲み物とかが飲めるのはいいんだけどね。」

真名にビールを引つ手繰られて全て飲まれてしまったマグナは近くにあつた甘酒を飲み始めた。と、何かネギを弄っていた生徒達が違う意味で騒ぎ始めた。

「ん、何か変じゃないか？」

「ああ？……本当だ……。」

ねずみが出たー！という叫び声が聞こえ、皆が蜘蛛の子を散らすように四方八方に逃げていく。しかし、ねずみという名の狩人はそれを逃さない。

「キヤー！」

「このネズミ、水着を脱がすよー！」

シユルルとおよそ常人には捕らえられない動きで巧みに生徒達の水着を脱がしてく狩人。

「あんな貧相な体を見るぐらいだったら私の体を見てくれないか？」

「わ……私も真名ほどではありませんが……。」

「べ、別に見なくてもいいんだからな！」

真名は妖艶に、刹那と千雨は恥ずかしそうにマグナに言った。それを言われているマグナはというと……。

「
、
」

プカプカとまるで水死体のようにつつ伏せのまま浮かんでいた。ネズミらしき物体が一人目の水着を脱がし始めた瞬間に真名は目潰しを、刹那は頸動脈を狙った首打ち、千雨は鳩尾にボディブローを食らわせたからだ。

流石のマグナもその攻撃に対応できなかったため、現在水に沈んでいるのだ。完全に気絶しているために真名達の声は届かないが、気を失う直後に何か聞こえた気がした。

『浸水だど！？バカな、これが私の最期というか！？認めん、認められるかこんな事！』

俺が一番うまくたこ焼きを焼けるんだ！

「さて、と。じゃあそのオコジヨ、何か言いたい事はあるか？」

「……悔いはねえ、楽しかったぜ兄貴！」

ドゴ、バキ、ゴキン、グシャ、メメタア

「……無念……」

「カモくううううん！？」

所変わってココはアスナと木乃香とネギの部屋。マグナは風呂の時に沈められた一件でオコジヨを新しい秘孔の実験台にしたところだ。ネギが悲鳴を上げているが、死ぬ可能性の無い秘孔を突いたので心配は無い……多分。

「まあこれ位にしておこう。これ以上やったら危険な領域に入るからな。」

「これ以上つて……まだ上があるの……？」

アスナが恐ろしげな目でマグナを見るとマグナは何も言わないで頷いた。と、マグナはオコジヨに近寄るとオコジヨの小さな額に手を近づけてデコピンを喰らわせた。

「いつてええええええええ！？」

「鬼だ……ここに鬼がいる……。」

アスナの眩きを無視してマグナはオコジヨが此方に気づくのを待つ。痛がっているオコジヨはやっと痛みが治まってきたのか、額を擦りながら怨めしげな目でやった本人を見る。

見た瞬間にオコジヨは瞬間的に正座をした。なぜならマグナの目はまさに獲物を必ず狩るといふ狩人の目をしていたからだ。

「取り合えずお前の名前を言ってみろ。」

「へえ！俺つちの名前はアルベル・カモミール！ネギの兄貴に助けられたしがないオコジヨ妖精なんでさあ！」

土下座の姿勢を保ちながら敬意を表して自己紹介をするオコジヨ妖精のカモ。マグナは腕を組みながら目を瞑ってその自己紹介を聞き続ける。

「助けてもらった兄貴の使い魔ハブレットになって兄貴を助けたかったんでさあ。だから俺つちは兄貴のピンチを救おうと……。」

「分かった、もういい。」

カモの言い訳染みた自己紹介を切り捨てるマグナ。溜息を一つ吐いて頭を掻いた。ココで皮を剥いで剥製にしてもいいのだが、後々のオコジヨはネギパーティーのブレーンの位置的な位置に属するはず。ここで剥製にするとどんな弊害が起こるかわからない。

唯でさえマグナという不確定要素が既にこの世界を掻き回している。これ以上原作が崩壊するとある程度読めていた未来が全く読めなくなる。それだけは避けたいのだ。

「あの一件についてももう何も言いつもりは無い。許してやるからさっさとその土下座を止める。」

「は、はい！ありがとうございます！」

やっと土下座を解いたオコジヨにマグナはまた一つ溜息を吐いた。意外にカリスマぶるのは疲れるのだ。

「僕を助けてくれるなんて・・・ありがとうカモ君！寄越してくれ
たお姉ちゃんに手紙を書かなきゃ！」

そのネギの発言にビックリと身を竦ませるカモ。幸いにもネギとアスナはそれを見ては無いが、マグナだけはそれを見ていた。

「あー兄貴。いい、いい！！別にそんなの書かんでも。」

「え・・・？何でさ。」

焦ったようにネギに手紙を書かせることを止めさせようとするカモを見て不思議そうに首を傾げるネギ。

「じ、実は・・・今いた娘達の中に『これは！』っていうパートナ
ー候補がいたんすよ！！。」

「えっ、嘘っ!？」

カモの苦し紛れの言い訳を鵜呑みにして驚愕するネギ。カモは名簿を開いてある人物を指した。その人物とは……。

「本屋ちゃん？」

そう、カモが指した人物は宮崎のどかだった。ネギはのどかがパートナー候補だということに変に納得していた。

それは度々のどかが魔法について触れているからに他ならない。赴任して初日でネギが魔法を使つてのどかを助けたり、吸血鬼事件でも襲われていた。だからネギはのどかが自分の運命的なパートナーだと納得している。しかし、そこはまだ数えて10のネギ。純情なので素直にその現実を受け止めきれない。

カモに名簿に書かれていることを指摘されて顔を赤くするネギ。ついには部屋から出て行ってしまった。

危ない危ないといわんばかりに額の冷や汗を拭ったカモ。アスナは玄関のポストに手紙が入っていることに気がついた。それを見るとイギリスからのエアメールだった。

「わ、ネギのお姉さんからのエアメールじゃない。」

「（！？）」

アスナが差出人の名前を呟く。その名前を聞いたカモは拭いたはずの冷や汗が先程よりも量が多くなって出てくるのを感じた。

「あ、姐さん！その手紙俺っちが兄貴に届けておきますよ！」

「い、いいけど……。」

普通にオコジヨと話している自分に苦笑しながらアスナはカモに手紙を渡した。カモは手紙を受け取ると一目散に外に出てネギを追いかける……と思いきや、その手紙をクシャクシャにしてゴミ箱に捨ててしまった。

「いずれバレるぞ。」

「！？」

急に声が掛かったので誰が声をかけたのか驚きながら探す。そしてその人物とは先程まで部屋にいたはずのマグナだった。

「あの焦り具合といい、手紙を捨てる行動といい……面倒なことになったな……。」

「さっきまで部屋にいたはず……アンタは一体誰なんだ……？」

ここらが潮時か、と思ったマグナは無言でサングラスを外す。そして隠してきた傷と右の瞳が露になった。カモはその瞳を、傷を見て誰だかすぐに分かった。驚愕に呼吸を荒くしながらもその名前を言う。

「マグナ・ラグナイト・ヴァーミリオン?!」

「やはり分かるか。……サングラス変えようかな。」

「『武神』のアンタが何でココに!？」

カモのその質問に面倒くさそうにマグナは答えた。

「タカミチに頼まれたからな、ここで教師をやってる。それに暇だったしな。」

「暇だったからって・・・あっ！だったらマグナの旦那、旦那は兄貴の父親の幼馴染だったんだろ？だったら兄貴を助けて

」

「却下だ。」

話している途中で言いたいことが分かったマグナは速攻で力モの頼みを切り捨てた。

「な、何で?!」

「学園長の爺にもそれ言われたんだがな、ネギの坊主は俺と何の接点も無い。唯幼馴染の息子ってだけだ。それだけで接点も無い奴のフォローなんてしたくねえんだよ。」

「で、でも・・・。」

「くだい。お前が坊主のことを大切に思っている事は分かった。だけどな、俺を坊主のフォロー役に回すんじゃない。」

その言い分に言葉を失うカモ。マグナはサングラスを掛け直すと力

モに忠告をした。

「別に俺はお前がこの学園で問題を起こすなといってる訳じゃない。その問題に俺を巻き込むなど言っているんだ。いいか、俺は面倒が嫌いなんだ。」

それだけ言い捨てると話が終わりだと言わんばかりに開け放たれた窓から身を乗り出して夜の闇に消えていった。カモは衝撃の出会いと、忠告に今は唯、そこで固まっているしかなかった。

「ただいま。」

「ん、帰ってきたか。さっさと飯を食べるぞ。」

「今日の飯は何だ？茶々丸。」

「お帰りなさいマグナさん。今日はたこ焼きです。」

「お、たこ焼きか。茶々丸、今日は俺に焼かせてくれないか？」

「は、はあ。大丈夫ですが。」

「む、マグナ、貴様うまく焼けるのか？」

「ナメてくれるなよ吸血鬼^{エヒツ}。たこ焼きは俺の唯一の得意料理なんだ。」

「ほっ？そこまで言うのなら見せてもらおうじゃないか。」

「クククッ、まあ期待している。」

「くっ何だこの旨さは・・・ありえん・・・。」

「俺が一番うまくだこ焼きを焼けるんだ！」

「マグナさん、その焼き方のコツを教えてくださいませんか？」

上から来るぞ、気をつける！

「おーよしよし。ゆっくり食べなー。」

目の前に群がっている猫の群れを見ながらマグナは頬を緩めて餌をやっていた。猫の他にも犬や鳥が集まってきて餌を強請る。それにマグナは苦笑して餌をあげる。

ココはマグナの家の前。そこでマグナは餌をやっていた。切欠は茶々丸が猫に餌をあげているのを見かけたことから始まった。

元々動物が好きなマグナは茶々丸と交代で猫に餌をあげることに決めた。と、マグナが餌をあげている最中に段々と他の動物達が集まってきたのだ。

時には犬。時には鳥。時にはどこからやってきたのか、狼もやって来たことがあったりする。その突然の来訪にも気分を悪くすることも無く、笑顔で餌を上げた。

「ん？もうそろそろ出勤か……。悪いなお前ら。」

時計を見てそろそろ出勤の時間が迫っていることを知ると、マグナは動物達にそう声を掛けながら解散させた。餌入れを片付けるとマ

グナは脇においておいた改造スケボーで学校に向かった。

と、マグナが学校に着いて下駄箱に入ると、エヴァンジェリンとネギが言い争いをしていた。

「ふふふ、ネギ先生。今日も待ったりサボらせてもらうよ。先生が担任になったおかげでいろいろ楽になった。」

「エ・・・エヴァンジェリンさん！茶々丸さん！」

急いで臨戦態勢を取ろうと常に背中に携帯している杖を取ろうとするが、エヴァンジェリンが静止を掛ける。

「おや、勝ち目があるのか？校内では大人しくしていたほうがお互いのためだと思うが。」

余裕を見せた表情でネギにそう進言する。確かに校内でエヴァンジェリンと勝負をすれば確実に魔法がバレル。もしかしたら生徒に怪我を負わせてしまうかもしれないし、魔法がバレたら麻帆良学園から本国へ強制送還されてしまう。

そんなことはネギ自身望んでない。悔しそうに杖に掛けようとした手を戻す。その行動を見てエヴァンジェリンはくすくす笑って背中を向ける。その際に手を振りながらネギに釘を刺した。

「そうそう、タカミチや学園長に助けを求めようとは考えるなよ？
また生徒を襲われたくは無いだろっ？」

そついい捨てるエヴァンジェリンは立ち去っていった。茶々丸もネギ達に一礼してエヴァンジェリンに着いていった。

ネギは何も言い返すことができないことが悔しいのか目に涙を浮かべて逃げてしまった。それを追いかけるようにアスナとカモが追いかけていった。

その光景を見てマグナはガシガシと後頭部を搔くと、スリッパに履き替えてエヴァンジェリンの後を追った。

「朝から何やってんだお前は。」

「まあ軽い挑発さ、唯の牽制だよ。」

屋上に来るとマグナは呆れた声で柱に凭れ掛かっていたエヴァンジェリンに言った。エヴァンジェリンはその問いかけに手をひらひらさせて答えた。茶々丸は持ってきたポットで紅茶を入れている。

「挑発つてな……見た限りじゃ結構追い詰められてるぞ？」

「まあそこらで潰れたらそこまでの男だということだろう。呪いも解けているし、別にあのぼーやが潰れてもなんら私に支障は無い。」

キツパリと言い切ったエヴァンジェリンを見て溜息をつくマグナ。茶々丸が差し出してくれた紅茶を飲む。

「ああそつだ。今日の午後は餌あげるのは茶々丸だっけ？」

「はい、帰りに餌を買って猫達にあげたいと思います。」

「もし他の奴らが来て餌足りなくなったら、家の餌使ってもいいからな。」

マグナの家には餌がいつも常備してある、もちろん自作の餌だが。栄養などにも気を配って作ってあるので、偶に麻帆良の動物園に譲っていたりもする。

はい、と頷く茶々丸。飲み終わった紅茶のカップを渡すと、余裕ぶっていたエヴァンジェリンの首筋を引っつかみ、持ち上げて歩く。

「おい！何をする！」

「朝のHRぐらい参加しろ。」

「何回もやってるHRなんかいまさら参加したって意味無いだろ！」

ギャーギャー騒いだり、如何にかして手を離させようと手足をバタバタ抵抗させるのだがマグナは離さない。エヴァンジェリンはその

光景をちやつかり録画している茶々丸には気がつかないようだ。

「さて、茶々丸。行くか。」

「はい。」

「だから離せといってるだろーが！」

「あゝ疲れた〜。」

首をゴキゴキ鳴らしながらマグナは帰路についていた。仕事はさっさと片付けるので他の先生からの評価も高いのだ。

スケボーを使ってアスファルトで舗装された道を進んでいく。そして曲がり角を曲がるうとして、身を隠した。

マグナが身を隠した理由、それは家の前にいる人物にあった。

そこにいたのは猫に餌をやっていた茶々丸。ところどころ服に汚れがついている所から、またお手伝いでもしたのだろうと推測する。

そしてその茶々丸に対峙するように立っているのは二人。一人は杖を手にしたネギ。もう一人は保護者役であるアスナだった。

ネギが何か言っているのだが、生憎と距離が離れているためマグナの耳には入らない。スケボーをどうやったのか、服の中に隠して丁度茶々丸とネギ達の中心にくるように屋根の上に立つ。それでやっとな話し声が聞こえるようになった。

「申し訳ありませんネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対です。」

どうやらネギが茶々丸のことを説得しているようなのだが、茶々丸はそれを一蹴する。情けないような顔をしてアスナを見る。情けないような顔をしているが、茶々丸を倒すためにアスナに小声で何かを言う。アスナはそれに難しそうな顔をして頷くと戦闘体勢をとる。

「神楽坂明日菜さん・・・いいパートナーを見つけましたね。」

いつもどおりの無表情な顔でネギのことを賞賛する。ネギはその賞賛に答えずに杖を構えてアスナへ魔力を供給する。

供給するラインが通るとアスナは茶々丸へ駆け出した。その動きはいつものアスナの動きより数段早い。

そのまま右手を茶々丸に突き出す、茶々丸はそれを下からの払いで弾く。しかし、アスナはさらに左手を伸ばして茶々丸に当てようとする。茶々丸はその攻撃に少し反応が遅れ、ガードが間に合わなかった。

アスナが繰り出したのは固めた拳ではなく、唯のデコピン。流石にクラスメートを殴るつもりは無いからだろう。見事に命中した茶々丸の頭は後ろに仰け反った。

素人だからと高を括っていた茶々丸からしてみれば驚くべきことだろう。ダメージは無い。そのままアスナを無力化する為に動くこととした茶々丸だったが、何かに気づいた。そのままアスナの足を払って距離をとる。

後ろに下がりながら茶々丸は視線を動かしてネギを追う。ネギは詠唱をほぼ終了させており、周りに光球を浮かばせていた。

ネギはそのまま詠唱を終わらせて光球を矢の形に変えて放った。

その数11。不規則な軌道を描いて茶々丸に殺到する。着地した茶々丸はこんな場合でも冷静に分析する。

その姿を見ながらマグナは少し冷や汗を掻いていた。それは……。

「（ネギの奴……魔法の射手に魔力込め過ぎじゃないか？）」

そう、マグナの懸念していたことはそれだった。ネギが魔法に込める魔力の量が多い。原作でも強いとあったのだが、これは明らかにオーバーキルだった。

普通の魔法の射手は一発の威力が岩を砕き、鉄板を凹ます程度の威力。なのだが、マグナが感じている魔力の強さから換算してみると、一発が鉄板を破る程度まで上がっている。

まあどうせ自分に戻るんだからいいのか？と思ってネギを見たマグナだが、ネギの様子がどうにもおかしい。

まるで……相手を確実に叩きのめそうとしているかのよう、瞳は決意に燃えている。

荒い息を吐いて睨み付ける様に茶々丸を見ている。

マグナはそれを見て戦慄した。

「（あの坊主、茶々丸をマジでスクラップにするつもりか?!）」

あの魔法の射手の威力といい、ネギの様子といい、そう思ったマグナはとにかく魔法の射手を止めるために鋼糸をネットのようにして茶々丸と魔法の射手の間に張り巡らせる。

特別製の鋼糸のお陰で魔法の射手は鋼糸に吸収されて消え去った。驚いた表情を見せる3人。茶々丸だけは誰かを探すようにキョロキョロして、屋根に視線を移してマグナを見ると一礼した。

ネギはどうやら正気に戻ったらしく、自分の魔法の射手の威力を想像して青い顔をしていた。アスナはそんなネギを如何にか立ち直らせるかとネギと一緒に茶々丸の視線を追ってマグナを見ると驚愕の表情を浮かべた。

「マ、マグナさん!?!どうしてココに?!」

チツと舌打ちをしてマグナは茶々丸の傍に降り立った。鋼糸を回収しながら茶々丸に問う。

「どこが損傷とかないか？」

「大丈夫です、どこも異常はありません。お助けいただきありがとうございます。」

「気にすんな、通りがかっただけだ。」

ネギ達のほうを見ると、ネギは困惑したような表情で、アスナは少し怒っているようだった。

「マグナさん……貴方は……。」

「アンタ！エヴァちゃんの仲間だったのね!？」

マグナのことを指差しながら宣言するアスナ。指されたマグナは溜息を吐いて、

「え、、」

「あ、」

一瞬で二人の前に立って両手で二人の両頬の少し上を突いた。一瞬意識が失われたところを狙って、次は鼻の下を突く。すると体が崩れ落ち、その場に倒れた。

「マグナさん、今何を……。」

「秘孔を突いただけ。最初に突いたのは頭顱ずせつ、俺に会ったっていう記憶を消すために突いた。次に突いたのは定神ていしん、結構慌てた様だったからな、落ち着かせて気を失わせたただけだ。」

「何故記憶を消したんですか？」

「俺が関与してるっていう勘違いを失くす為だな。坊主達の敵であるお前を助けた俺は、あいつ等からしてみれば敵にしか見えないだろ。誤解を解くのも面倒くさいし。」

「……すみません、お手を煩わせてしまつて。」

「気にすんな。元々お前をスクラップにしようとしてた坊主達が悪い。」

そう答えながら携帯を取り出してタカミチに連絡を入れる。

「タカミチか？坊主達が気絶してっから俺んちの前まで来い。それで回収してくれ。」

それだけ言つと携帯を切つて閉まってしまった。タカミチ哀れである。

「さて・・・茶々丸、今日の飯は何だ？」

「・・・・・・・・はい、今夜はカレーにしようと思います。」

「おっカレーか。いいねえ。」

そういいあいながら二人はマグナの家に入つていった。

「……………どうしてこうなった？」

数分後、ネギとアスナを回収しているタカミチが呟いた一言だった。

上から来るぞ、気をつける！（後書き）

どうやっても最後がコメディチックになってしまっ……。
……まあいいですよね？

夢、幻の如くなりけり（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした！見苦しいですが言い訳を・
。

21日の更新後、すぐさまテスト期間に入ってしまった、11月中はテスト勉強の為にPCに触れられず、12月4日にテスト終了したので気を緩めた次週、まさかのインフルエンザに掛かってしまい、執筆できませんでした。今は熱が37度まで下がったので隙をみて執筆、投稿しました。インフルに掛かるとはいえ、これは自分の体調管理がなって居なかったせいです。本当に申し訳ありませんでした！そして熱が出ている状態で執筆したので・・・本文が・・・ウボアーな状態になっているのでご了承ください！

夢、幻の如くなりけり

吸血鬼、というものは基本的に生物の部類としては最高の位に入る。

不死に年を取らぬ体。傷ついてもその傷はあっという間に修復される。人を殴れば十数メートルは吹っ飛び、莫大な魔力をその身に宿す。

まあその吸血鬼が『存在している』ということは普通の人からしてみればジョークにもならない訳だ。

『俺が吸血鬼だ！』なんていった日には、周りの人たちから痛々しい目で見られ、笑いの種にされるなど間違いなくそいつの一番の黒歴史に入るだろう。

話が逸れてしまったが、纏めると吸血鬼は生物の最高の位で、化け物染みた能力を持ち、しかしそれは御伽噺やファンタジーの中の存在だということだ。

その最高の位で、化け物染みた能力を持ち、御伽噺などの存在である吸血鬼が……。

「コホッ……コホンッ……。」

風邪をひいていた。

「オイオイ、あんまり無茶すんなよ。」

マグナは無理に動こうとするエヴァンジェリンを押し止め、ベットに大人しく寝かせる。額に乗せた手拭いを冷たいものと交換しながらマグナは、

「今日は学校を休むか？」

「……。」

喉が痛いのか、声を出さずにコクリと頷くエヴァンジェリン。マグナは交換して温くなった手拭いを冷たい水の中に入れて茶々丸を呼ぶ。

「今日エヴァ熱出して休むからエヴァの世話頼む。」

「はい、分かりました。お任せください。」

マグナはエヴァの世話を茶々丸に頼むと、自分は出勤の準備をして学校に向かっていった。

「え？エヴァンジェリンさんが熱を出して休んでる？」

「ええ、今日は大事を取って休ませることになったんです。」

元気良く入ってきて開口一番にエヴァンジェリンの名前を呼んだネギは、マグナの説明に首を傾げていた。

真祖の吸血鬼であり、魔法使いでもある彼女が風邪をひくなんて思わないのだろう。マグナも実際エヴァンジェリンが風邪にかかって驚いたぐらいだ。

ネギに学校を休むとの知らせを書いた紙を渡すと、ネギはその紙を見て少し考え込んでしまった。

「あの、マグナさん。何でマグナさんがエヴァンジェリンさんが学校を休むってこと知っているんですか？」

「ああ、それは今彼女が私の家で絡繰さんが看病しているからですね。」

「ええ！？マグナさんの家ですか？！」

その答えが衝撃的だったのが大声で叫んでしまうネギ。その声に反応して生徒達が集まってくる。

「え？どうしたのネギ君？」

「何かあったのー？」

「え、い、いえ何でもありません！」

慌てて誤魔化すネギ。どうにか誤魔化しきれたのか、集まってきた生徒達が散らばっていく。ネギは今度は周りに注意しながら小声で

マグナに言う。

「（マグナさん何考えているんですか！エヴァンジェリンさんは吸血鬼なんですよ?!）」

「あーっと・・・まあ私は何故か気に入られたらしくて・・・彼女が私の家に来たときに熱が出たので私の家で休ませているんです。大丈夫ですよ、彼女は私に対して敵意は持ってないので。」

その言い訳にネギは渋々ながらも納得してくれたいらしい。紙をもう一度見てネギは、

「すみませんマグナさん。朝のHRよろしく願いします！」

「え、ちよつと？ネギ先生!？」

入ってきた扉を開けて外に出て行ってしまった。マグナの止める暇も無く、魔力で強化している脚で、およそ数えで十歳とは思えない速度で走り去っていった。

取り残されたマグナはというと、これも打倒エヴァンジェリンの布石なのかなあ・・・と思って取り合えず任されたHRを始めることにした。

「あいよー朝のHR始めんぞー。」

「センサー、ネギ君がどっか行っただんですけどー？」

「気にすんな、そーゆーお年頃なんだろ。」

「センサー、エヴァちゃんと茶々丸さんがいません。」

「エヴァは風邪、茶々丸はその看病で休みだ。」

「先生、何でエヴァちゃんが風邪引いたか知ってますか？」

「あー、何か風呂入った後にそのまま格ゲーを深夜までやってたらしいぞ。皆も風邪には気をつけるよー。」

ちなみに格ゲーの相手というのはマグナである。

その時の様子がこちらである。

『マグナがあ！捕まえてえ！マグナがあ！画面端い！マグナがあ！
バースト読んで！まだ入るう！マグナがあ！……つつ近づいてえ
！マグナが決めたあああ！』

『うがあああああ！』

『ふっ……このままいけば貴様にやっとな勝てる……！』

『へーそう。』

『この超秘は避けれまい!』

『避けなかったらブロッキングすればいいじゃない。』

『え、ちよ』

『暗転見てからブロッキング余裕でした。』

『またかあああああ!』

一方そのころ教室を飛び出したネギは、マグナの家に行った。いや、

正確に言つとマグナの家の、エヴァンジェリンが寝ている部屋にいた。

エヴァンジェリンに果たし状を出すためにマグナの家にいったネギは、なし崩し的に茶々丸に頼まれエヴァンジェリンの世話をすることになったのだ。

どうにか世話がひと段落したネギはエヴァンジェリンがうなされてある事に気がついた。

その寝言を聞いていると、どうやら自分の父親であるナギの夢を見てうなされているようだった。

エヴァンジェリンの夢を見れば何か父親のことが分かるかも知れないと、ネギは心の中でエヴァンジェリンに謝ると、エヴァンジェリンの夢の中に入っていった。

そして光の先に見えた光景、それはどこかの浜辺だった。夕日が差し、海がオレンジ色に輝き幻想的な景色を生み出している。

そしてその浜辺に対峙するのは妖艶な女とフードを被った男。女のほうは手に操り人形を持っている。男は杖を持っているだけで微動だにしない。

この世界はエヴァンジェリンの夢の中。しかしこの世界に今いるのは妖艶な女とフードを被った男。ということはこの女は……。

『……この人って昔のエヴァンジェリンさん！？今とぜんぜん違う！』

そう、今の幼児体型からは想像もつかないほど綺麗な大人になっているエヴァンジェリンだった。

「ついに追い詰めたぞ『千の呪文の男』、この極東の地だな。」

「……………」

「今日こそ貴様を打ち倒し、彼奴の居場所を吐いてもらうぞ。」

彼奴、とエヴァンジェリンが言うがネギにはその人のことが判らない。唯、エヴァンジェリンが強く固執しているというのは分かった。

「ドールマスター人形使い、ダークエヴァンジェル闇の福音、マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い、エヴァンジェリン……恐るべき吸血鬼よ。己が美貌と力の糧に何百人を毒牙にかけた？その上アイツを狙い、何を企んでいるかは知らぬが……、

」

言葉を切り、フードの男は顔を上げる。ネギはその男の顔を見て一瞬誰か分からなかった。

赤い髪がフードの端に揺れ、敵対する目でも、喜びの目でもない、無機質な目でエヴァンジェリンを見る。

「……諦める。何度挑んだところで俺には勝てん。」

『こ……この人がサウザンドマスター！？僕のお父さん！？かっこいい！！』

ネギは夢の中だが父親に会えたことに喜びを隠せないでいる。パタパタと両手を振って、自分の父親の姿が自分の想像の通りだったことに感動を覚えた。

「彼奴も居ない貴様に何が出来る！いくぞチャチャゼロ！」

「アイサー御主人！」

その言葉に不敵な笑みで答えたエヴァンジェリンは持っていた操り人形の名前を呼ぶとサウザンドマスターに飛び掛る。名前を呼ばれた人形　チャチャゼロは両手の刃を握りなおし、エヴァンジェ

リンと一緒に飛び掛った。

対するサウザンドマスターは襲われそうになっっているにも関わらず、暢気な調子で足元を頻りに気にしている。

エヴァンジェリンは鋭く尖った爪のある手に魔力を込め襲い掛かる。ネギは自分の父親が殺されてしまうと驚愕する。

そしてエヴァンジェリンが踏み込んだその瞬間、足元が崩れた。宮に足場が無くなったからか、その穴に身を投じてしまうエヴァンジェリンとチャチャゼロ。

所謂落とし穴という奴なのだが、落とし穴に入っているのは水とネギやにんにく。吸血鬼の苦手とするモノのオンパレードにこれ以上無いくらい動揺するエヴァンジェリン。さらに追い討ちをかけるように何処に隠していたのか、麻袋に入っているネギやにんにくを継ぎ足した。

笑い声を上げながら自分の杖でかき混ぜるサウザンドマスター。ネギはその戦い方にポカーンとしてしまう。

エヴァンジェリンは苦手なものの中に入ったせいでボンツという音と共に今の姿である幼女になってしまった。

「わはははは、噂の吸血鬼の正体がチビでガキだと知ったら皆なん
というかな？」

「ひ、卑怯者！貴様はサウザンドマスターだろう！魔法使いなら魔
法で勝負しろー！」

そのエヴァンジェリンの叫びにサウザンドマスター
ナギ
はフードを取って勝ち誇った笑みを浮かべた。

「やなこった。本当は俺は魔法は5、6コぐらいしか知らねーんだ
よ、勉強苦手だな。魔法学校も中退だ、恐れ入ったかコラ。」

いっそ清清しいほどのドヤ顔をエヴァンジェリンに向けて言い放つ
ナギ。エヴァンジェリンはもちろん、自分の父親が中退で、魔法も
5、6コぐらいしか知らなくて、戦い方もセコイという現実に絶望
して両手と両膝について絶望していた。と、急に景色が歪み、意識
が薄れた。

気が付くとネギは元の世界に戻っていた。何で急に戻ってきたんだ
ろうと首を捻っていると、ネギの顔に影が差した。

ビクツと身を竦ませながら顔を上げてみると、そこには威圧感を漂
わせながら赤面しているエヴァンジェリンがいた。

「貴様……好き勝手に私の夢を見おつて……。」

「ピッ……。」

「あー疲れたー。」

「お疲れ様です。」

「ん、茶々丸か。エヴァンジェリンの看病は如何した？」

「はい、ネギ先生が着たのでネギ先生に任せています。」

「ふーん。まあエヴァのことだから大丈夫だと思うけど。」

「あ、マグナさん。家から何か……。」

「……また派手に暴れてるな……。」

「マスターが元気になってよかったです。」

「……騒ぎが収まるまで猫と戯れてるか。」

そして一時間後、ぼろぼろになって出てきたネギがいたとか。

観客一人の最終幕（前書き）

バイト初めてやったんですが、レジ打ちが難しいです・・・何度も失敗してしまいました・・・orz
早く慣れたい今日この頃。

観客一人の最終幕

「んで、果たし状に書いてあった日時が今日だと。」

「ああ、まあ軽く捻ってやるさ。」

昼休み。マグナとエヴァンジェリン、茶々丸は屋上で昼食を摂っていた。話している話題は今日エヴァンジェリンとネギが対決するといったものだ。

「にしても、坊主に勝ち目無いだろ。」

マグナがエヴァンジェリンとネギの絶対的な力の差を客観的に見てそう呟いた。まあマグナがそう言ってしまうのも仕方無い話だ。

果たし状に書いてあった日時は今日の夜8時。つまり真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンがもつとも力を振るえる時間帯だ。しかも呪いは解かれており、全盛期の力を相手にしてネギは戦わなければならない。

さらにネギの使える魔法は精々『雷の暴風』位だろうとマグナはそう考えていた。ナギのように『千の雷』をバンバン撃てるはずも無い。それに対しエヴァンジェリンは600年以上生きているだけで

あつて、最高位の呪文をそれこそ砲台のようにバンバン撃てるはずだ。

四方150フィートをほぼ絶対零度に行ける『おわるせかい』と目の前の障害物をなぎ払う『雷の暴風』、どちらが強力なのかは一目瞭然だ。

「（どう足掻いても絶望、か。）」

そう、元々この勝負でネギが勝つこと自体無理な話なのだ。天才少年ともてはやされるネギの心を一旦折っておくために仕組まれた勝負なのだから。

挫折、という経験は人の人生の中で大切なことだ。人は何度も挫折をしながらも生きていくのだ。だが、挫折をしない人間がどんな末路を辿るか、マグナは見たことがあった。

ナギの息子だろうから大丈夫だとは思うのだが、念には念を入れる必要があつたのだ。

「（まあ・・・負けるにしても・・・）」

マグナは人知れず口元に笑みを浮かべた。それはこれから起こる劇

の最終幕フィナーレに対して。観客としてその戦いを見るマグナは望む。

「(せめて、想像もしないような展開を作ってくれよ、坊主?)」

一人心の中でマグナはその最終幕が早く来ることを楽しみに待ち望んでいた。

ブツン、とマグナの家の電気すべてが消える。それはマグナの家だけではなく、麻帆良全ての電気系統が消えていた。

大停電。それが起こるのは午後8時、それはつまり劇の幕が開く時間。

真っ暗になった部屋でマグナは読んでいた本を静かに閉じた。春の夜は寒いため、ジャンパーを羽織る。外に出ると、マグナを照らすのは月の光だけになった。

自分を照らす月を不意に見ると、黒い点が3つ飛び回っていた。常人ではそれが何なのか分からないだろうが、マグナは目も凝らさずにその点を見ると自分の腕にある時計を見て呟いた。

「ちよつと幕が開けるのが早いな……。」

最初のほう、見たかったな。とまた呟いてマグナは向かいの家の屋根に飛び移る。そのまま空を駆けるように跳んで黒い点を追う。

バレないように気配を極限まで消して空を駆ける。空を見上げてみると、光が一切合財消えたからか、夜空の星が良く見えた。

黒い点の正体に追いついた場所、それは麻帆良の端っこにある外と麻帆良を繋ぐ大橋だった。

橋の頂上に上ったマグナは眼下の黒い点の正体であるネギとエヴァンジェリン、茶々丸の戦いを覗くことにした。

しかし、既に決着が着いていたようで丁度エヴァンジェリンがネギ

の血を吸う所だった。

「あーあー、やっぱりこうなったか。つまんねえ。」

やっぱりどんでん返しは来なかったか、とため息を吐いてそこを離れようとし、

「コラー！待ちなさい！」

その声が聞こえた。跳躍しようとした足をその場に止め、慌てて声の主を見るため道路のほうを見る。

走ってきたのは手にオコジヨ・・・カモを掴んだアスナだった。エヴァンジェリンは茶々丸に命令を出し、アスナを撃退させようとする、がカモがその手に持っているものを合わせると強烈な光が辺りを包んだ。

カモが合わせたのはマグネシウムとライターの火。マグネシウムは火を着けると強烈な光を伴う化学反応を起こす。さらに今は月明かりしかない夜。急に閃光を出されたら目は対応ができなくなり、少しの間目が見えなくなる。

機械である茶々丸にそれが通用するのかといえば通用しないだろう。

だが一瞬間を作ることには可能だ。アスナはカモが起こした光を利用して茶々丸を抜く。

エヴァンジェリンはマントでどうにか光を防ぐと襲い掛かるアスナに対して障壁を張った。かっこいい台詞を吐いて余裕そうにしているが、

「あぶるばあっ！」

アスナのとび蹴りが見事障壁をぶち抜いてエヴァンジェリンの顔面に刺さった。変な奇声を上げて吹っ飛ぶエヴァンジェリン。

障壁を二度も破られたことに動揺しながらも着地をするエヴァンジェリン。その破った当人を見ようとしますが、

「いない？」

蹴られて飛んだ滞空時間内にネギたちは隠れたようだ。エヴァンジェリンは苛立ちを抑えることなく辺りを探す。その顔からは一滴の血が鼻から出ていた。茶々丸が慌ててハンカチを取り出して拭う。

ちなみにマグナはというと、

「あぶろばあって……あぶろばあって……！」

蹲りながら先程のエヴァンジェリンの奇声で肩を震わせていた。どうにも壺に入ったらしく、バンバンと鉄骨を平手で叩いていた。

マグナがそうしている内に、ネギは柱の裏でアスナと仮契約を結んでいた。再契約の際の光で位置がもれてしまったが、堂々とエヴァンジェリン達にその姿を見せる。

エヴァンジェリンがドヤ顔でネギの事を挑発するが、アスナが反論する。それに同意したエヴァンジェリンは道路に足を着けるとネギに改めて向き直った。

543

「行くぞ、私が生徒だということは忘れ、全力で来るがいい。ネギ・スプリングフィールド。」

「……はい！」

その宣言が合図となったのか、ネギとエヴァンジェリンは一齐に詠唱を始めた。ネギはアスナを強化するために契約を執行させる。

アスナは突っ込んできた茶々丸の拳を平手で受け流す。そして右手

を突き出して、

バチンッ！

凸ピンを放った。しかしそれはアスナだけでは無く、茶々丸も凸ピンを放っていた。しかも茶々丸の凸ピンは唯の凸ピンではなかった。肘の関節を外して飛ばすロケット凸ピンだった。

両者ともに凸ピンの衝撃で一旦攻撃が止む。ネギは一瞬アスナが攻撃を受けたことに驚いたが、相手の茶々丸はアスナを傷つけることはしないと信じて練習用の杖を取り出した。

しかし、ネギの詠唱が完成する前にエヴァンジェリンの詠唱が完成した。氷の飛礫が指向性を持ってネギに襲い掛かる。

その勢いに押されたが、どうにか直撃する前に自分の詠唱を完成させ、飛礫を『魔法の射手』で打ち消した。

雷属性も使えることに感心したエヴァンジェリンはさらに飛礫の数を増やす。その数に驚くネギだが、どうにか同じ数の『魔法の射手』を生み出し相殺させることに成功した。

負けることができないネギは自身が持つ最高の威力の魔法を撃つ事

に決めた。そのネギの表情を見たエヴァンジェリンはニヤリと笑みを深くする。

そして詠唱が始まった。

「ラス・テル マ・スキル マギステル・・・来れ雷精、風の精！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック・・・来たれ氷精、闇の精！」

その詠唱にネギは気づいたように声を漏らす。エヴァンジェリンは自分の思ったとおりの表情をしたからか、クスリと笑みを零した。

二人が放とうとしている魔法は属性こそ違うものの、同種の魔法だった。二人はそれに気づきながらも詠唱を続ける。

「雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！雷の暴風！」

「闇を従え吹雪け、常夜の氷雪！闇の吹雪！」

そして二人は魔力を込めた手を突き出して、詠唱を完成させた。

「雷の暴風!!」

「闇の吹雪!!」

闇と雷が両者の手から飛び出し相手を貫かんと拮抗する。だが、だんだんとネギの出す雷の暴風が押され始めてきた。エヴァンジェリンもまさかこれほどの力を持つとは思わなかったのだらう、顔を歪めて魔法に集中する。

ビリビリとネギが突き出した手から衝撃が感じられる。撃ち負ける・・・そう思ったネギだったが、自分の為に仮契約してくれたアスナや親友のカモの為に負けられないネギは最後の力を振り絞って、

「は、は、ハクシュン!!」

くしゃみを出した。くしゃみで暴発した魔力がエヴァンジェリンの魔法の間を縫ってエヴァンジェリンに向かう。咄嗟のことに反応できなかつたエヴァンジェリンはそのまま魔力を食らってしまった。

煙がはれたその先には・・・、

「フフツ・・・フフツ・・・やりおつたな小僧・・・。」

ピクピクと米神を引きつらせながら無理に笑みを作るエヴァンジェリン。その姿はネギの暴発した魔力が当たり、生まれたままの姿を晒していた。

顔を赤らめ慌ててエヴァンジェリンに謝罪するネギ。だがエヴァンジェリンの怒りがそれで収まることもなく、

「氷爆!！」

「ひーん!！」

その数秒後、氷付けになったネギがいたとかなんとか。

「あー面白かったー。久々にあんな笑ったなあ……。」

勝負が終わった後、マグナは帰路についていた。あの勝負を思い出
し、思い出し笑いをしながら歩いていく。と、ふと立ち止まると振
り向くことなく言った。

「……そろそろ出てきたらどうだ？」

マグナ以外誰もいない道にその声が響いた。すると何もない空間か
ら又ツと十数人のフードをかぶった男たちが現れた。首だけを向け
てその姿を確認するマグナ。

「随分とまあ大所帯で来たもんだなーオイ。」

「………」

フードの男たちは何も答えない。マグナは溜息を吐くと向き直って
肩を竦めた。

「止めてくれよ、今日は最高の気分なのに。悪いけど帰ってくんな

い？さつさと帰って寝たいんだから。」

「………だったら、最高の気分のままあの世に行かせてやる！」

フードの一人が喋ると半分ぐらいの男がマグナに襲い掛かる。残り
は魔法の詠唱に入っているのか、ブツブツと声が聞こえる。

やれやれとまた肩を竦めたマグナは四方八方から襲い掛かる男たち
を捌いていく。殴りかかれればその手を逸らす。鞭のような蹴り
が来れば体を捻って避ける。そうこうしているうちにマグナは巨大
な魔力の高まりを感じた。

それは先程から詠唱していた男たちから来るものだった。捌く事で
詠唱していた男たちのことを忘れていたマグナは舌打ちをすると詠
唱を止めようとする、が。

『『燃える天空』！！』

止めようとしたマグナを中心とした3、4メートルが光ると爆炎が
マグナを包んだ。フードの男たちが放った魔法は『燃える天空』。
本来広範囲に存在する敵を殲滅する魔法なのだが、フードの男たち
はそれを対象を強力な結界で包み込み、その中で『燃える天空』を
放った。行き場を無くした爆炎はその結界の中で荒狂い、本来以上
の威力を叩き出す。

爆炎が止むと結界を解き、煙を晴らすとそこには真つ黒になった人型の何かがあった。もはや誰の区別ともつかないほど黒くなってしまったソレはもう生きてはいないだろう。

「フン……所詮は魔力もないクズか……。」

ゴツツとつま先で頭の部分を軽く蹴るリーダーらしき人物。暴言を吐いて英雄を倒したという栄光に浸かっているその男は、

「……あ？」

そんな馬鹿みたいな声を漏らすと顔が潰れて地面に倒れた。おびただしい量の血が顔の部分から溢れ、ビクンビクンと痙攣を繰り返す。何度か痙攣を繰り返すと男は動かなくなった。

顔が潰れた、何故？

それは簡単な答えだった。黒いソレが立ち上がり、リーダーの男の顔を握りつぶしたからだだった。

「あーあー……んん……。」

ゴキゴキと首を鳴らしながら声帯の調子確かめるソレ。フードの男達は驚愕を隠せない。よほど先程の魔法に自信があったのだろう。

「あー熱かったー。」

マグナのその暢気な声で驚愕が解けたのか、慌てて魔法役の男は下がり、時間稼ぎの男はマグナに襲い掛かる、しかし。

「ぐー!?ぎゃあああああ!?!」

「痛い!痛い!いいいいいい!!」

マグナに襲い掛かる男達は皆、奇妙な形で死んでいった。

米神を両手の拇指で思い切り打突して抜くと、体が爆散していった。両首を突き、膝蹴りを顔に入れると顔が真っ二つに割れた。眉間への一撃のみの攻撃だけ身体背面から骨格のみが飛び出した。

気づくと一人を除いて全てのフードの男達は肉塊となっていた。一人残しておいた男に近寄り、首を持ち上げる。

「さて、今回はどこの奴等だ？」

「クツ、貴様なんぞに話すか！」

どうにかマグナの手を解こうと四苦八苦する男だが外れない。ふとマグナはもがく男の頬のマークを見て首を傾げる。

「その頬のマーク……。」

「気づいたか……これは貴様に皆殺しにされた団体……『暁の晩餐』のマーク！そして俺達は貴様に

、

「

「知らね。」

ゴキリ、と喋っている最中の男の首をへし折る。ダラリともがいていた手足が垂れる。無造作に投げ捨ててソレを肉塊の山の一部にする。学園長に電話を入れた。

「あーもしもし。ちょっと後処理を頼みたいんだけど。」

☐

☐

「ああ、また俺絡みだよ。まあこればかりは俺の仕事だ。」

☐

☐

「別に？ 怨まれる事には慣れてる。じゃあ後はよろしく。」

携帯を切ってポケットにしまう。そして後処理を任せたマグナは今度こそ帰路に着いた。

返り血で体を紅く染め、
紅い水溜りを踏みしめて。

観客一人の最終幕（後書き）

マグナが死ななかつた、何故？

それは気合で防御したんです、はい。

ラカンと同じですよー胡散臭くないですよー

特使と買い物と不良と（前書き）

バイトを始めてから充実した休日になってるんですが・・・執筆時間
間がとりにくいです・・・。頑張りたいです。

特使と買物と不良と

「マグナ先生、ネギ先生、学園長が呼びですよ。」

吸血鬼事件から数日、ネギが氷漬けにされたこと以外は何の事件も無く時間は過ぎていった。

そして今は朝のHRなのだが、どうにもネギは来週の京都への修学旅行をかなり楽しみにしているらしく、少年らしくはしゃいでいる。

鳴滝姉妹と一緒にしゃいでいるところを見ると、まるで仲のよい兄妹のように見える。他のクラスメートもそのはしゃぎ様をみて、微笑んでいる。

どうしてネギがこんなに楽しみにしているのか。世界的に有名な京都の町に行けるということもあるのだろうが、最たる理由としては多分紅き翼の隠れ家に行けるということだろう。

学園長がネギに吸血鬼事件のネタバレをし終わった後、学園長がワザとらしく京都に父親の手がかりがあると呟いていたただけなのだが。

幼いネギはその下手な演技に気づかずに現在まで舞い上がっているという訳だ。と、舞い上がっているネギとそれを微妙な目で見てい

るマグナの所にしずな先生がやってきて二人を呼んだ。

学園長が呼んでいる、ということを知った二人は何だろうと思いつながら学園長室に入って話を聞くことにした。

「え……し……修学旅行の京都行きは中止ー!？」

と、ネギは学園長の口から出た言葉に驚愕と絶望の叫びを上げた。

マグナはその学園長の爆弾発言にやれやれと肩を竦めていたのだが。

京都の変わりにハワイ、という学園長のフォローも聞こえないほど落ち込んだネギは驚くほど優雅な動きで壁に向かって絶望する。その行為を軽く咎めた学園長は人差し指をピンと立てて説明を続けた。

「まだ中止とは決まっとらん。唯、先方がかなりイヤがっておつてのう……。」

「先方？京都の市役所とかですか？」

ネギの答えに学園長はうーんと唸る。何と説明したらよいのか、と呟いてから学園長は話を再開する。

「『関西呪術協会』・・・それが先方の名前じゃな。」

「か・・・関西呪術協会・・・？」

聞き覚えの無い名前にネギは疑問の声を漏らす。

学園長の話 요약してみれば、どうやら関西呪術協会と学園長が理事をしている関東魔法協会との仲がかなり悪く、魔法先生が一人付いてくるといったら修学旅行での京都入りに難色を示してきたらしい。

学園長としては喧嘩をやめて西と仲良くしたいらしい。そのためにネギを特使として京都に行ってほしい。特使という名目があれば、相手は難色を示すだろうが京都入りを拒むことは出来ないからだ。

唯・・・と学園長は付け足した。

「道中相手の方から妨害行為があるやもしれん。彼等も魔法使いである以上、生徒達や一般人に迷惑がかかる行為はせんと思うのじゃが・・・どうじゃ？」

その問いに、ネギは迷い無く首を縦に振った。

「っは、何が特使だ。あっちのトップは爺の義理の息子だろうが。」

「ほっほっほ。じゃが義理の息子といえど体制があるじゃろう？わしと婿殿二人が仲良くなったとしても下の皆は納得せん。だからコレはある意味チャンスなんじゃよ。」

ネギが気合十分に修学旅行への準備の為に学園長室を飛び出していった後、マグナは胡散臭い顔を学園長に向ける。学園長は飄々とした態度でそう答えた。

「ま、俺はどうなっても知らん。俺に被害が来なければ、な。」

「そうじゃな。お主はそういう人間じゃったな。じゃが今回の修学旅行、何かありそうでな……。」

「……………」

「修学旅行といえど気を抜かずに行動して欲しい、もしも生徒達に何かあったら大変じゃからな。」

「……まあ年長者の意見は頭の片隅にでも置いておくさ。」

じゃ、俺も準備があるから、とマグナはそれ以上何も言わずに扉を開けて出て行った。学園長は一人マグナの反応に笑みを零していた。

マグナの生徒達を思う気持ちは人一倍強い。思う気持ちは強いからこそ、あのような生徒達への接し方ができるのだ。ああいう風には、例えばマグナも生徒達を守るために動くはず、と学園長は考えたのだ。

マグナの気持ちを利用した、といえはそこまでだが、学園長はこれでよかったと考えていた。

悪役になるのが、生徒を守ることが出来るのなら。

学園長室を出たマグナが来たのは麻帆良ではなく、東京だった。珍しくマグナ一人で色々な店を物色している。

しかし買うのはアクセサリーなどの華やかなものではなく、質素なYシャツや適当に見繕った下着、後は必要最低限の生活用品だった。

買い物であらかた終えたマグナは袋をぶら下げて、スターブックスというコーヒーショップで買ったコーヒーを片手に街をぶらついた。

妙に自分に視線が集まるな、と思いながらマグナは歩きながらコーヒーを啜る。

視線が集まる理由、それはマグナの容姿にある。銀髪蒼眼、髪の毛はショートという、唯でさえ視線を集めそうな容姿をしているのに顔はイケメン。これは視線を集めざるをえないだろう。女からは熱い視線を、男からは嫉妬の視線だが。

声を掛けてくる女子高生や大学生の女子の誘いの声をのりくらりと避けながら視線を彷徨わしていると、見覚えのある女子三人が目の前で街頭を隠れ蓑にして何処かを熱心に見ていた。

「おい。」

『ひゃあ!』

マグナが声をかけると、その三人はよほど見ている光景に集中していたのか、驚きの声を上げた。そして声の主であるマグナを見ると、素っ頓狂な声を上げた。

「マグナ先生?!」

「どうしてここに?!」

「いや、買い物以外有得ないでしょ?」

柿崎、桜子がマグナに質問するが、一人早く冷静になった釘宮が二人に突っ込んだ。マグナはその光景に苦笑しながら買い物袋を持ち上げる。

「そつだ、唯の買ひ物さ。」

「へえ……つてこんなことしてる場合じゃなかった！」

納得したような声を出した桜子が急に声を上げてまた街頭に隠れてある一角をみる。柿崎も同じ行動をするのを見届けてマグナは釘宮に聞いた。

「なあ、アレ何やってんだ？」

「ああ、見れば分かると思うよ？」

ニヤニヤしながら釘宮は二人のしている方向に指を指した。その方向に目を向けると、

「……ん？ありゃあネギと近衛じゃねえか。」

「そう、わざわざ原宿まで二人きりで来て、しかも仲良く買ひ物！
コレはずばり……。」

「デーと」あー、あいつ等プレゼント買ってんのか。「……え

「？」

マグナの気抜けしたような答えに阻まれた釘宮は間抜けな声を上げた。マグナの声が聞こえたのか、桜子と柿崎もマグナの方を見た。

「ちょ……どういふことなのマグナ先生?!」

「いやな、昨日ネギに女性に贈る誕生日プレゼントは何がいいかって相談されてなあ。俺はそんなの分かんねえから仲のいい女子とプレゼント買いに行ったら? って言ったんだよ。多分そのプレゼントを買いに来てるんじゃないかねえかな、と思ったんだが……。」

その理由に三人は脱力してその場に座り込んでしまった。

「なんだあ……唯のプレゼント選びかあ……。」

「せっかく面白_sゲフンゲフン……二人を応援しようと思ったのに……。」

「何かそついう感じだとは思っただけどねえ……。」

この三人のようなお年頃の女子生徒は恋バナとかに興奮しやすい。

いやえ面白えな……。と今度はマグナがニヤニヤしていると、よろよると立ち上がった三人に声をかけてくる人物が居た。

「なあ姉ちゃん。俺たちとお茶しないかい？」

「俺たちが奢るからさあ。」

いかにも不良という風体の男の集団が三人に声をかけてきたのだ。マグナには気づいてないようで、三人に詰め寄るような形で声をかけてくる。

三人は嫌そうな顔をして後ずさる。それを追うような形で男達にじり寄ってくる。どうにかして男達を撃退したい三人が後ずさっている、誰かに当たった。

「おっと。」

マグナだ。疑問を顔に出して三人を見るマグナ。と、柿崎が何か思いついたようにマグナの背後に隠れて声を出した。

「悪いけど、私達この人と待ち合わせしてたんだ！」

その言葉にマグナは、は？と呆けた声を出した。柿崎の行動に桜子と釘宮も何か思いついたのか、柿崎と同じようにマグナの背に隠れて声を出した。

「遅かったじゃん！待ったんだよ！」

「そーそー。待ちくたびれちゃったよ。」

え、え？と突然の行動についていけないマグナ。そしてナンパしてきた男達は、マグナを見て威嚇してきた。

「あぁん？何だ手前エ？」

「その姉ちゃんのスレか？ちょっと貸してくれねえか？じゃねえと・
・・。」

バキバキと指を鳴らして威嚇する不良共。ああ、そういうことね。とマグナは気づいてジト目で隠れている三人を見る。手の平をすり合わせて謝ってくる三人を見ると、怒る気も無くなったのか、ため息を吐いて不良に向き直る。

「んあ？やっと姉ちゃん達を貸してくれんのか？」

「貸すわけねーだろ馬鹿共が。」

「……………あ？じゃあ覚悟は出来てんだろうな？」

何処から拾ってきたのか、バットや鉄パイプを取り出して臨戦態勢をとる。マグナはそれに動揺することなく煙草に火を付けると、戦闘態勢をとることなく言った。

「適当に來い、軽く流す。」

それを挑発にとった不良達は、マグナに襲い掛かった。

十数秒後……。

「クソ！今回は見逃してやる！」

「勝ったと思うなよおおおおおお！」

「もう勝負ついでるから。」

マグナにぼろぼろにされた不良達がそんな捨て台詞を残して逃げていく。マグナはパンパンと服に付いたほこりを払いながらそう返した。

「いやぁ……センサー強かったんだねえ……。」

「まあこういう奴等を撃退できる程度にはな。」

ギョツと煙草を携帯灰皿に押し込むと、地面においてあつた買い物袋を拾い上げた。

「こういう奴等に絡まれんなよ？今度も俺が居るなんて限らんからな。」

「へーい、分かりやしたー。」

軽い返事を返す三人にマグナはまたため息をついた。

修学旅行まで、あと二日。

修学旅行・出発編

現在の時刻、AM4:00。

携帯で確認してみると、そんな表示が目に入った。画面のバックライトがまだ醒めない目に突き刺さる。

パタンと携帯を折りたたみ、体をムクリと気だるげに起こす。そして、首を動かして扉の方を見る。と、そこには腰に手を当て、笑みを浮かべたエヴァンジェリンがそこに佇んでいた。

「……おい。今何時だと思ってやがる。」

「んなもん知るか。さっさと準備をしる。」

マグナは如何にも不機嫌さをかもし出してエヴァンジェリンに問うが、エヴァンジェリンはそれを軽くいなし、そう言つとさっさとマグナの部屋から出て行ってしまった。

窓の外を見てみれば、まだ街灯がついている。そう言われてしまったマグナは流石に二度寝を決め込むわけにもいかず、のろのろとクローゼットに近づいて支度を始めた。

何故マグナがこんな時間に叩き起こされたのか。何故エヴァンジェリンはこんなに楽しそうにしているのか。

それは今日が麻帆良学園中等部の修学旅行の日だからであった。

「まったく、貴様は今日が私にとって最高の日になるのを知っているだろうに。こんな時間まで惰眠を貪りおって……。」

「普通の……奴は……こんな時間に……駅には来ないぞ……。」

未だ眠気がマグナを襲う中、エヴァンジェリンと茶々丸、そしてチャヤゼロを頭に乗せたマグナは集合場所である大宮駅に来ているのだが……。

「茶々丸、今何時だ……？目がまだ冴えなくて時計が見えん……」

「現在の時刻は5:00、皆さんが集合、出発するまで後4時間です。」

「4時……。」

ドサリとそばにあったベンチに腰を投げ出すように座る。茶々丸も静かに座った。

「あのバカ、いくら楽しみだからってこんな早くにくるこたあねーじゃねーか……。」

「ケケケ、マアシヨウガネーヨ。御主人ハコノ日ヲメチャクチャ楽シミニシテタカラナ。ダカラツテコンナ時間ニ来ルトハ予想シテナカッタガナ。」

相当眠いのか、だんだん瞼が閉じていき、頭も前後に揺れだした。頭に乗っているチャチャゼロは振り落とされない様に、マグナの髪の毛を引っつかんで耐えている。

それに見かねた茶々丸は、下からマグナを覗き込むように体を倒す

と、

「時間になったら起こしますので、マグナさんは寝ていても大丈夫です。」

「そうか？じゃあ頼む……わ……。」

気休め程度に開けられていた瞼は完全に閉じ、体の力は抜けて上半身が倒れた。

茶々丸の背中に。

ドサリ、と茶々丸の背中にマグナの上半身が凭れ掛かった。覗き込む姿勢をとっていたため、背中にマグナの体の感触が伝わってくる。

流石肉体だけで英雄になっただけはある。無駄な脂肪は付いていない様だ。が、ボディビルダーのような荒々しさは感じられない。スラッとした体はきつと計算して作った肉体なのだろう。

茶々丸はそこまで分析してからハツと我に返る。普段よりも、肌の感度が上がっているのに気が付いた。それにモーターの回転数も上がっている。

自己診断プログラムを開始するが、結果は異常なし。異常がないはずなのに、異常がある。

とにもかくにも茶々丸はマグナを支えながら自分の体を起き上がらせるその際に頭に乗っている姉のチャチャゼロを自分の頭に移す。

どうにかマグナの体を安定させると一息つく茶々丸。胸の部分にある主機閉部に手を当ててみると、何時もよりも運動が激しい。顔もなんだか火照ってきたように熱くなる。

こんなプログラムは茶々丸には無い。こんな反応はまるで人間ではないか。

私？ハカセ達に作られたロボットである私が人間の反応を？

ありえない。と茶々丸はその思考を切り捨てる。自分はロボット、人間ではない。たとえ人工知能があつたとしても、ありえない。ロボットは感情を持つわけが無いのだから。

そう考えながらも、茶々丸は隣ですやすや眠っているマグナから視線を外せない。

どうして私は彼から視線を外せないのだろう。どうして私は彼を見ると体に異常を起こすのだろう。どうして私は……

彼と、いつまでも一緒にいたいと思うのだろう。

その答えは未だ出ず。誰も答えることも出来ない。それは彼女自身の問題だから。そう分かっていながらも、茶々丸は自分の中にそう問う。

唯、時間だけが過ぎていく。

「うおっ！これが改札機というものか！ということとは・・・あった！あれが券売機か！素晴らしいぞ・・・まさにコレが文化の発達というものか！・・・おお！電車が来たようだ！ああ、早く時間よ過ぎろ！そして私を電車に乗せていけ！」

「我が世の春が来たあああああああ！」

「ううむ・・・話を聞いてくれません・・・来ます、コレ・・・」

「……さ、魚ああああ……」

「……なあ、茶々丸さんよ。コイツは何の夢を見てうなされてるんだ？」

「私にも分かりかねますが……そろそろ時間なので、起きてもらいます。」

ゆさゆさとマグナの肩を揺する茶々丸。その横で先ほど来た千雨はマグナの寝言に呆れていた。

「無駄でしたの……退きません……媚び諂いません……反省しません……ハッ！」

ようやく目を覚ましたマグナは辺りを確認、と千雨を見つけるとようつ、と挨拶をした。

「今何時だか分かるか？」

「つと今は……8:30だな。」

「もうそんな時間か……まあいい。俺は先生方との打ち合わせが

あるから、ちょっと行って来る。」

「分かりました、行ってらっしゃいませ。」

ぺこりと茶々丸が座ったまま礼をする。マグナは寝ていて歪んでしまったネクタイを直しながら先生達の輪に入っていった。

マグナが輪の中に入ると、丁度打ち合わせが始まる場所だった。新田先生が作ったパンフを取り出して修学旅行の行程の最終確認をする。と、ふと視線を下げるとネギが肩にオコジヨ　カモを乗せて楽しみをこらえきれないといった表情で居た。

うーん、とマグナは頭を掻いてネギの耳元に口を寄せ、小声で喋った。

「（ネギ先生。）」

「（！・・・ってマグナさん、如何したんですか？）」

「（修学旅行が楽しみなのは分かりますが、ちゃんと最終確認をしておかないと引率に困りますよ？まして今日はクラスで名所を回る予定ですから・・・。）」

「あ、そうですね！すいません、すっかり京都のことで頭が一杯に……。」

「（教師も京都に行けるとはいえ、教師の目的を忘れちゃいけませんからね。）」

まあ目的が京都観光だけではないだろうが、と心の中でマグナはそう呟いた。吸血鬼事件の後、エヴァンジェリンはネギに京都にある『紅き翼』の隠れ家があると言ったらしい。それに伴い今回の京都修学旅行。外国人憧れの京都に行けるだけではなく、父親の手がかりを掴むことができる。だからネギはこんなにはしゃいでいるのだろう。

まったく、見た目相応の子供だな。とマグナは内心苦笑する。と、そんなことを考えている内に最終確認が終わったようだ。マグナも別なことを考えていた割には一応大切なところはチェックしてある。

各自担当しているクラスを纏めて新幹線乗り場に連れて行く。ネギもマグナもクラスを纏めるが、如何せん修学旅行という一大イベントに興奮している生徒を纏めるのに少し時間がかかった。

新幹線がホームに着き、全員乗り込んでいくのを見届けていると、不意にマグナの携帯が震えた。

ちよつと失礼。とネギに断りを入れて離れて携帯を取り出す。誰かを確認せずに電話に出る。

「もしもし、俺だ。」

「。。」

「ああ、首尾は上々……っつーか今出発するところだ。首尾もクソもあつたもんじゃねーよ。」

「。。」

「あーはいはい、その計画は頭に入ってる。そう何度も確認しないでも大丈夫だ。」

「。。」

「わーってるよ。協力はする、だが俺の名前は出すな。それに俺は表には出ない。面倒なことになるからな。……それじゃ、そろそろ新幹線が出るから、切るぞ。」

ボタン、と電話を切って携帯を畳む。ホームに残っている生徒が居ない事を確認すると、マグナは何事も無かったかのように新幹線に乗り込んだ。

ドアが閉まり、風景が右から左へとスピードを増しながら流れて行くのを見ながら、マグナは笑みを浮かべていた。

車内にて（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

『遅えんだよ！このダラスが！テメエを倒すのはこの俺なんだよ！』
って言うてくれてもかまわないんですよ？へへへ・・・

と、前置きもそこそこに。今回の話は車内での話なので、（内容が）
薄い！短い！話となっております。ご了承ください。

あ、後最後の方の誤字は誤字ではありません。ネタです。ネタを知
りたい人はブロントさんでggると幸せになれるよ！

車内にて

麻帆良学園という地を離れ、見慣れぬ京都に行くというのは年頃の少女の心を攪るのか、車内は生徒たちの声で溢れかえっていた。

マグナが車内に戻ると、既にネギとしずな先生が話を始めていた。と、後ろから車内販売のカー트가来た為脇によって避ける。

「ケガには気をつけ・・・へぶっ!?!」

話を続けているネギにカー트가直撃した。たぶんマグナの影にネギが収まって見えなかったのだろう。声を上げて車内販売をしている女性に気がつかなかつたネギもネギだが。

あはははは、と生徒達からそんな笑い声上がり、マグナもついクスリと笑ってしまった。当たったネギもその笑い声につられて笑う。

皆、この修学旅行が心の底から楽しみだと信じて疑わない。だが、それは関係のない生徒達に限られるのだが。

話も終わり、皆思い思いの行動をし始める。マグナも教師に割り当てられた席について本を読み始める。ちなみにタイトルは『どんとこい、超常現象』である。

ペラリ、ペラリ、と本を読み進めていると不意に背後から金髪の髪の毛が流れてきた。本の上にかかったので髪を払いながらうっとおしそつに言う。

「エヴァ、読書の邪魔をするな。」

「何をしようが私の勝手だ。それに京都に行くんだ、何故貴様は本など読んでいる。もっと旅を楽しまんか。」

「新幹線の中で何を楽しめと?」

そう切り捨てると本に意識を戻す、が、その本は既に手の中にはなかった。キヨロキヨロと本を探すと、あった。しかし、真名の手の中に、だが。

「『どんとこい、超常現象』……^{先生}師匠が読むべき本ではないとは思っただけだね。」

「だーってる。何読もうが俺の勝手だろ。」

取り返そうと手を伸ばすと、ひょいと避けられてしまう。そしてそ

のまま手の届かないところまで逃げられてしまった。

ぐぬぬ、と悔しげに唸ると腰を持ち上げて取り返そうとしたその時、
誰かの悲鳴が車内に響き渡った

「き、きやああああああ!？」

その声に一旦本を追いかけるのをやめてそちらに顔を向ける。と新幹線の中では決して見られない光景が広がっていた。

ぴよんぴよんといたるところから出てくるカエル。お菓子の箱から、バスケットの中、挙句の果てには水筒の中からもカエルが飛び出して皆パニックに陥っていた。

そのカエルはマグナ達のいる席からも出てきていた。ため息を吐きつつマグナはそこかしこから出てくるカエルを片っ端から引っ掴んでネギたちのいる方向へ持っていく。

古菲の持っている袋に放り込む。と、だんだん収集がついてきたのか、ついにマグナの持っているカエルが最後になっていた。

ひよいとカエルの首元を掴み、カエルに視線を合わせてポツリと咳いた。

「そついえばカエルって鳥のささみの味がするんだってな。」

それは喧騒騒がしくカエルの処理に当たっていた生徒達を凍りつかせるには十分だった。ヒクヒクと顔を引くつかせるもの数名、ちょっと引くもの数名。

マグナはそんなことに気づかず、ぺいっとカエルを古菲のもつ袋に投げ入れると自分の席に戻っていった。

「おい、今のは流石にないぞ……。」

呆れ気味にマグナに話しかけるのは長谷川千雨。マグナの座る座席の背もたれに寄りかかりつつ半眼でマグナを見る。マグナは本を取り返すのを諦めたようで、深く座りなおすと大きく息を吐く。

「ジョーク、ジョークだったの。ったく、最近の子供はこんな冗談も通じないのか。」

「ハードルが高すぎるぞ。」

「バーカ。ハードルっていうのはな、高けりゃ高いほど潜りやすい

んだっつーの。」

そついいながらかなりの速度で通過していくツバメ型の式神とネギを見やりながらそう言った。

千雨はネギ達が走っていったドアに指を向けて、マグナに目で訴えかける。いいのか、と。

それに答えるのは適当にひらひらと振るマグナの手。千雨は肩を竦めるとマグナの座る座席に下にあるレバーを足で操作してくるりと反転させる。そこにはやはりというべきか、いつもの面々が座っていた。

「さて、じゃあちよつと可愛い生徒達と遊んでもらうか、先生？」

ニヤリと口を歪めるのはエヴァンジェリン。手元でトランプを弄びつつ足を大仰に組んでいる。その姿からはまさにカリスマが漂うが、マグナは冷静に注意する。「

「あのな、そんなミニスカートで足組まないほうがいいぞ。パンツ丸見えだ。」

なっ！？と顔を赤くしてスカートを急いで押さえつける。それに何

を言っまでもなくトランプをその手から取り、切り始める。

くっとも何も反応がないマグナに苛立つエヴァンジェリン。千雨はそのやり取りをみてまたため息を吐くと、マグナの横に座った。

「さて、何のゲームをしようか。」

途中感じた魔力を無視するようにして、トランプを始めた。

「くっそ！トランプ強すぎるだろ！」

「ありえん（笑）」

「何故目を逸らす。おい、紀伊店のか。」

「おい馬鹿やめろ、この話題は早くも終了ですね。」

「着実にアンタのせいでネタが広がりつつあるな……。」

「俺は悪くぬえ！俺は悪くぬえ！」

「だからそれがネタだっつってんだろーが！このダラズ！」

「（・・）」

一日目・前半

新幹線に揺られること数時間。ネギ率いる3-Aは、目的地である京都についた。マグナは座りっぱなしで固まった体を解す様に大きく伸びを一つ。

ゴキゴキ、と骨が鳴って心地よい。ついでに首も回してコリを解すと、マグナは京都に着いたことでさらにテンションがあがった生徒達の下へ。

ヒヤッホイ！だとかイエーイー！だとか大声で騒いでいるので拳骨をまき絵に叩き込んで黙らせる。

「他の人たちに迷惑だ。テンションがあがるのは分かるが、もう少し慎め。」

「は、ハイ……」

「何で私だけ……」

ネギが押さえられない部分はマグナがフォローする。もはや、これは定番の形になっていた。まき絵の呻き声を無視して説明するようネギに促した。

ネギはマグナにありがとうございます、と礼を言うと、修学旅行の諸注意を話し始めた。

教師陣は諸注意を既に頭の中に入れていたので、マグナは軽く聞き流しながらボーっとネギが説明する姿を眺めていた。

喜びを隠し切れないようで、ニコニコと笑いながら説明を続けるネギ。憧れの京都、偉大な父がいた京都。様々な思いがネギにはあるのだろう。

こりゃフォローが大変になりそうだ。とまた大きく伸びをした。

諸注意が終わり、各クラスごとにバスに乗り込んで目的地に向かう。
3-Aがまず向かったのは有名どころの清水寺。

清水寺は元来尊堂にいる観音様に能や舞を見てもらうための装置であり、国宝にも認定されている。よく小説や本、TVなどでこの清水寺から飛び降りる、という表現で有名だが、江戸時代にはここから実際に飛び降りたという記録が234件も残っている。だが、その生存率は85%と意外に高い。

という神社仏閣仏像マニアだという夕映の比較的どうでもいい説明を小耳に挟みながら、マグナは皆の声援に答えて飛び降りようとす
る楓に拳骨を入れ込んで止めさせる。

あー、とかなり効いたらしく、頭を抑えて蹲る楓を尻目にマグナは
柵に近づいて京の街を見渡す。まだ少し冷たい春の風を感じながら、
その美しさにほう、と感嘆の息を吐く。

と、そんなマグナを見て生徒達がコソコソと。

「おー、流石マグナ先生。見た目外国人みたいなのに和風とよく似
合ってるね。」

「ねー。美形だし、身長も高いから何を背景にしても似合いそうだ
ね。」

「ま、性格が性格だし。蛙みて食べれるなんて言ってたんだよね・・・」

「聞こえてるからな。後蛙が食べれるっていうのはジョークだ。」

ビクウ！とひそひそ話をしていたまき絵、裕奈、美空が体を強張らせる。後ろにはいつの間にもやら移動したらしいマグナが半眼で見下していた。

あ、あ、と言葉を詰まらせる3人にデコピンを一発ずつ。楓と同じようにおでこを抑えて蹲った。

それを無視してマグナはネギと委員長、それに数名の生徒達がいなことに気がついた。マグナは近くでやれやれ、とデコピンを見ていた千雨に、

「千雨、ネギはどこ行った？」

「ああ、それなら近くにある『恋占いの石』って一所にいったらしいぞ。」

「『恋占いの石』？」

「『恋占いの石』とは地主神社にある石のことで、10メートルほど離れてたつ、ひざの高さほどの2つの守護石です。片方の石から反対側の石に目を閉じて歩き、無事たどりつくことができると恋の願いがかなうと伝わる、いわゆる“願掛け”の石です。一度でたりつければ恋の成就も早く、二度三度となると恋の成就も遅れ、また人にアドバイスを受けた時には人の助けを借りて恋が成就すると言われます。若者や海外からの参拝者にもよく知られ、この石で恋を占うことが地主神社参拝の大きな目的のひとつとなっています。江戸時代の文献にも、「老若男女、終日嬉嬉としてたわむる」の記述が今も残っています。

最近の研究では、縄文時代の遺物とされ、人のご縁を永く見つめてきた歴史ある石です。」

「お、おお、茶々丸。説明ありがとう。」

ペコリと礼をする茶々丸。と、マグナは茶々丸の主人であるエヴァンジェリンの姿が無いことに気がついた。

「エヴァンジェリンは何処行った？」

「マスターならあそこ。」

ツイと茶々丸の視線が柵のほうに向かったので、マグナもその方へ目を向けると、エヴァンジェリンが柵にもたれかかっていた。

エヴァンジェリンに近づいて柵に腰を預ける。

「いつもの尊大っぷりはどうしたよ。」

「別に、いいだろ。今は京都に来たということを実感しているだけだ。」

そういつてエヴァンジェリンは体を起こした。そーかい、とマグナは呟いてエヴァンジェリンと一緒にまだ残っていた生徒
といつてもいつものメンバーだが
と一緒にネギ達に向かったと思われる地主神社へ足を進めた。

「これが『恋占いの石』、か。新しい・・・惹かれるな・・・。」

「惹かれるなっつーの。」

ベシツと千雨のチョップが頭にささる。マグナが何故そう呟いたのか。その理由は目の前の光景にあった。

「何だ何だ!？」

「こんなところに落とし穴が!？」

『恋占いの石』を試そうとしたらしいまき絵と委員長が何故か落とし穴に嵌っていた。しかも蛙のオマケ付き。ネギと他の生徒達に手を借りて涙目で這い出ているところだった。

「え、何。あれ仕様じゃないの?」

「違う!何処の神社に落とし穴があると思ってんだよ!」

「1111。」

「……………」

真顔でそういうと、千雨は疲れたように肩を落とした。と、やっと落とし穴から這い出たようで、委員長率いるお調子者達は、急なハプニングにもめげずに次の目的である音羽の滝に向かって行った。

「右から健康、学業、縁結び、だと思っぞ。」

「流石女子中学生っていうところが、縁結びにしか行ってねーぞ。おい、お前らのクラスメートだろ。如何にかしろよ。」

「あんな奴ら私はしらん。」

「依頼してくれれば。」

「拙者は何も見てないでいじめるよ。」

しれーっとそう返す一同。溜め息を大きく吐いたマグナは、せめて他の観光客の迷惑にならないようにと伝えるために集団に近づいていく。

「おーい、お前ら。せめて他の人の迷惑にならないよう・・・うつ！」

とマグナの鼻を突く刺激臭・・・というより酒臭さ。その臭いの原因は何故かぐでんぐでんに酔った生徒たちから出ていた。

考えうる可能性は・・・と先ほどまで生徒たちが飲んでいた水に目を向ける。一見普通の水に見えるが、マグナが水を手にとって口をつけると、

「日本酒じゃねーかこれ。」

間違いなく日本酒。異変に気づいた楓が屋根に登っていたらしく、ひょいと屋根から顔を覗かせた。

「マグナ殿、屋根の上からこれが。」

「日本酒の樽・・・。」

楓から手渡されたのは日本酒の樽だった。振ってみると中身がまだ残っているらしく、チャポンと音がした。

マグナは樽を片手にネギ達が酔った生徒たちを移動させた茶屋に向かった。と、ここで見回りのためか、瀬流彦先生と新田先生が二人組みで歩いてきて、鼻をひくつかせた。

「ん？何か酒臭くないですか？」

あわわわわとどうやって誤魔化そうかと頭をフル回転させているアスナとネギだが、マグナが間に合ったようで、横から手に持った樽を見せながら、

「音羽の滝の上から流れてきたこれが原因で生徒たちが酔ってしまったんでしょう。すみませんが生徒たちをバスで休ませたいので少し手伝ってもらえないでしょうか。」

「な、お酒が音羽の滝に！？これは酷い悪戯ですね……。分かりました。瀬流彦先生、生徒たちをバスに運ぶのを手伝ってください。私はこのことを神社の人に伝えてきます。」

流石長年教師をやってきただけはある新田先生は、テキパキと指示を出すと走って関係者に話をしにいった。

ネギがお礼がしてくるので軽く手を振って返すと、生徒たちを運ぶように言う。ネギは思い出したように慌てて生徒たちをバスへ運ん

でいった。

マグナは生徒たちを丸太を運ぶように両肩に乗せると、ネギと同じようにバスへ生徒を休ませに向かった。

結局旅館に着いたのは夕方、酔って寝てしまった生徒達をそれぞれ部屋へ戻した時には、既に他の先生達は風呂に入った後だった。

「あ、いたいた。マグナ先生。」

「ん、しずな先生、どうかしたんですか？」

「いえ、マグナ先生はまだお風呂入ってませんよね？教師は生徒達

よりも早く入ることになっているので。」

「あー・・・確かそうでしたね。分かりました。じゃあ生徒達のほうも一段落したので、今からちよつと入ってきます。」

しずな先生に露天風呂への道のりを教えてもらうと、マグナは自分の部屋に戻って着替えを持つ。ネギの荷物も開いていることからネギも風呂に行ったのだらうと予想する。

まあ男同士だし、何も問題ないしいいや。とマグナは旅館のスリッパに履き替えて露天風呂に向かった。

闇の密会

脱衣所に来たマグナは早速風呂に入ることにした。手際よく服を脱いで籠の中に入れてタオルを片手に風呂場へのドアを開け、そしてその光景を目に焼き付けようとし。

「あ」

「あ」

この浴場が混浴だからか、ネギと刹那が先に湯に浸かっていた。だが、普通に仲良く入っているわけではない。

刹那の右手がネギの首に、そして左手は股間の部分に伸びている。濁り湯でよく見えないが、あれは絶対に握っているだろう。うん、あれはきつい。

泣き顔でこちらを見てくるネギ、うるたえた表情の刹那。マグナは二人を交互に見て、フイ、と気まずそうに目を逸らすと、そのまま

「あ、スイマセン。お楽しみの途中でしたか。スイマセン、すぐ出て行きますから。」

スススス、ガッ！

閉じようとしたドアの間に白く、細い指が挟まれた。そのまま力強くドアを開けようとしてくる。マグナはその指に対抗して逆に閉めようとする。

「違います！誤解ですよマグナさん！」

「いやいや、そういうプレイの途中だったんでしょう？ホントスンマセン。空気読めないでスンマセン。」

「何で敬語なんですか！？ちょ、本当に誤解ですって！」

激しい攻防。そしてそれを破ったのはある女の子の悲鳴だった。

「この悲鳴は・・・！」

「このかお嬢様！？」

聞こえてきたのはこのかの悲鳴。女湯の脱衣所から絹を裂くというか、間の抜けたというのか、何ともいえない悲鳴だった。

だが、その悲鳴にも刹那はすぐさま反応し、ネギに吹き飛ばされたのである。夕凧を手に取り、水の上を駆けるように脱衣所に向かった。ネギも少々面食らったような表情をしていたが、自分の生徒のピンチだと理解すると、刹那の後を追った。

そして対決する相手がなくなったマグナはというと。

「あーあー、まったく派手に斬ってくれちゃって……どうすんだよこの岩。」

マイペースに風呂に浸かり、刹那が斬岩剣で斬ったであろう岩を見てそう呟いていた。

先程までそんな騒動があったので、昼の疲れを癒すためにもじっくり温泉で温まったマグナは浴衣に着替えて外に出ていた。だが、別

に散歩というわけではない。俗に言う密会である。

人気がない森の中をスタスタと浴衣姿で歩いていく様は異様な光景だった。

少し歩いていくと、開けた場所に出た。そしてそこには白いテーブルと椅子が二脚、テーブルの上のランプの光によって照らされていた。

そして既に先客がいた。白い髪に能面のように感情がない表情を貼り付けて、静かにティーカップに二人分の紅茶を注いでいるのは、マグナの密会の相手であるフェイト・アーウェルンクスである。

「よう、月明かりに紅茶なんて洒落てるな。」

「やあ『道化師』、丁度紅茶が入ったところなんだ。君もどうだい？」

「じゃあ貰おうか。」

勧められるままに椅子に座ってフェイトと向き合う。

「砂糖は？」

「いや、風呂上がりだし、砂糖はいらない。」

「そうか、砂糖を入れると紅茶の風味が損なわれてしまうからね。」

変なうんちくを披露するフェイト。マグナはそれを半分聞き流しながら自分呼んだ理由を問うた。

「何で俺を呼んだ？」

「いや、最終日の確認をしようと思ってね。準備や確認は何度しても足りないぐらいだよ。」

「そうかい。」

やれやれといった風に肩を竦めるマグナに、フェイトは表情を変えずに計画の確認を始めた。

それに適当に相槌をしながらマグナは、どこに目を向けるわけでもなくフェイトの話の聞き流していた。

その態度にフェイトは眉一つ動かさない。それだけマグナの力量を見極めているということだろう。

そしてようやくフェイトの確認が終わると、マグナは椅子に座ったまま背骨を伸ばすように大きく背伸びをした。

その後ろに刀を振りかぶった少女がいても、だ。

振られた刀の音はそよ風によって揺らされる葉の音でかき消され、その凶刃は間違いなくマグナの首を刎ねようと刃を月光に煌めかせた。

自分の首に刃が迫っていることに気がついていないようで、そのままマグナの首を刎ねるかと思われた。

だが、その前にマグナの手がその凶刃を止めていた。まるで鏝迫り合いをするように手刀の形にした手を刀に押し付ける。だが、マグナの手は切れない。

そのまま何事もなかったかのように椅子から立ち上がるとその刀を力をこめて弾いた。雑草の上を滑り、踏みとどまる襲撃者の姿を月光が照らした。

「いやあ、殺^とつたかとおもたんですがなあ。」

春だというのにマフラーを首に巻き、ロリータファッションの少女。その少女の名前は月詠、刹那と同じ京都神鳴流の剣士だ。だが、その実力は今の刹那では到底太刀打ちできない高みにいるだろう。

妙に間延びした口調で眼鏡の位置をずらすその表情はまるで愛しい恋人に会ったかのように惚けた表情でマグナを見ていた。だが、その感情は恋慕のそれではない。

典型的な戦闘狂^{バトルマニア}。血肉沸き踊る殺し合いの中で自分が生きていると実感できる類の人種だ。これが厄介な性格で、マグナは事あることに今のような襲撃を受けている。

「うまく殺気を隠してたようだが、それだけじゃあ俺は殺^とれないぞ。」

「それが何なのかぜひご教授願いたいんですけどお？」

「お前には絶対に無理だ。」

そう言葉を交えながら二人は刃を交わしていく。月詠は刀で、マグ

ナは手刀で相手の刃を弾いていく。だが、傷を負うのは月詠だけだった。受けきれない手刀が、避け切れない足刀蹴が、月詠の体に切り傷を作っていく。

だが、彼女の顔に焦燥はない。ましてや苦悶の表情すらない。口元を苦痛とは逆に歪ませる姿からは痛みや恐怖を窺い知る事など出来ず、自身が放った斬撃を潰す毎に爛と輝く瞳が何よりも雄弁に全てを語っていた。

斬ろうとするたび手刀で受けられ愉悦の表情を浮かべる。逆に体を斬られるたびに悦楽の顔を覗かせる。

それはまさに『狂気』と呼ぶに相応しい。

だが、薄い。これだけの狂気があってなお、薄い。

こんなモノではない。もっとだ。もっと狂え。もっと犯せ。もっと楽しみ。もっと嗤え。もっと欲せ。モツと浸かれ。モツト墮ちろ。

そうでなくては絶望オレの道化師を倒すことなんて出来はしないのだから。

と、そこまで諮詢してから不意に気がついた。貫くように出された

刀を横に弾いていったん距離をとる。スツと額から米神にかけて汗が一筋流れる。

感化、されたか……

クツ、と薄い笑みを顔に張り付かせ、再び相対の構え。だが、また刃を交えるための構えではない。相手の攻を叩き潰し、己の拳を相手に叩き込む構え。

月詠はそんなことはどうでもよく、唯まだ戦う意思を見せてくれたことに、また笑った。

そうして月詠はまた月明かりの舞台に立ち、役者と踊るために、足をバネのように縮め、そして跳んだ。

だが、舞台は既に幕を閉じようとしていた。

左右から迫り来る冷たい凶器。しかし、マグナの狙いは武器ではない。頭を少し下げて急所狙いの刃を紙一重で避ける。銀髪が幾本かもっていかれるが、まったく気にせずそのまま拳を硬く握り、同時に搦ち上げる様にして正確に月詠の手首に当てた。

その衝撃に骨こそ折れなかったものの、自分の獲物を手放してしまった。真上に跳ね上げられた二振りの刀を呆然と見る月詠。その瞬

間が、隙。

搗ち上げた拳を月詠の腹に一発。体をくの字に曲げて悶絶する月詠にマグナは続けざまに容赦なく肘を後頭部に振り落とす。

ゴン！とコンクリートを地面に叩きつけたかのような鈍い音が響き、その後直ぐ月詠が倒れる音が鳴った。

マグナの圧勝だった。唯それだけのこと。

「流石だね。」

「・・・何度も来られても困るだけだな。」

「この調子で計画のときもよろしく頼むよ。信頼して

「一つ、言うておく。」

立ち去ろうとしたマグナにフェイトは口を開き言葉を紡ぐが、それはマグナに遮られた。首だけをこちらに向け、鋭い眼光でフェイトを貫く。

「俺はお前に協力しているのは俺なりの目的があるからだ。今は利害が一致してるからこそ協力しているだけだ。俺にとってのメリットが無くなればもちろんお前から離れる。忘れるな」

元々俺等は敵同士だということにな。」

そういうと今度こそ振り返ることなくマグナは去っていった。残されたフェイトはポツリと呟くように、

「分かっているさ、マグナ・ラグナイト・ヴァーミリオン。僕は君達に倒されたはずの存在なのだから。」

フェイトの足元に水溜りが生み出された。そのままそのなかに身を沈める。もちろんそれが自分のみを濡らす事はない。高位の転移魔法だからだ。

そのまま地に溶け込むようにフェイトを取り込んだ水溜りが消えた。後に残ったのは月明かり。

月光が全てを遍く照らす。しかし、闇に身を置いたモノたちまでは照らすことは出来ない。光があるならば、闇がある。正があるならば、負がある。

変えることの出来ぬこの世の理。その世界の中で、生きてゆくしかないのだから。

だから彼は進んで身を墮とす。目的のためならば、手段は選ばない。

そうして彼は望むものを手に入れる代償として、より深い闇の中に進んでいく。もう戻ることの出来ないくらい、深く、昏い、闇の中へ。

二日目

修学旅行二日目。

一人の教師として見回りを行っているマグナは暇そうに欠伸を噛み殺す。

「暇だなあ。」

まあ暇、というより平和が一番なのだが、マグナはダラダラと決められた見回りの範囲を歩き続けながらそう口の中で呟いた。

やっぱりエヴァンジェリン達の誘い、受けりゃよかったな・・・と少し後悔する。

二日目の朝にマグナはエヴァンジェリン達のグループから一緒に回らないかと誘いを受けていたのだ。

だがマグナはそれを断った。流石に決められた役を放棄してまで生徒と回るつもりは無かったのだ。それにそこまで見回りは暇ではないだろうと高をくくっていたのも理由の一つだ。

そう思っていたのだが・・・、

「（存外、見回りって暇になるモンなんだな。）」

事實は小説よりも奇なり。百聞は一見にしかず。案ずるより生むが安し・・・は少し違うか。

どっちにしろ暇なのは事實だ。少し小腹も空いてきたマグナは商品をテイクアウトできる店を探して、幾つか買い食いをする。

もーしゃもーしゃと手早く買ったものを胃の中に収めると、また京の町に見回りという名の散歩に向かった。

一仕事終えたマグナは日が沈む直前に宿に戻った。と、ふとロビーを見るとネギが座っていた。だが唯座っている訳ではない。

何というか、気が無いというか、呆然としているというのか、とりあえず普通ではない状態でロビーのソファに座っていた。

かと思ったら頭を抱えて地面を転げまわるといふ奇行に走るネギ。心なしか顔も赤い。カモも一般人の前で喋れないが、ネギをどうにかしようとしているのが目に入る。

そしてその奇行を見守るネギ親衛隊の生徒達もだが。

その親衛隊隊長である雪広と副隊長佐々木がネギの近くに寄り、話しかける。

マグナのいる場所からでは何を話しているのか殆ど聞こえないが、とりあえずネギが誤爆して誰かに告られた、という事は微かに聞き取れた。

そのままネギはその場を速攻で去る。と、そのネギの行動や言動が怪しいと踏んだ親衛隊らはどこかに向かっていた。

「（何馬鹿な事やってんだアイツ等）」

どうせ碌でもないことでもやらかすのであろうと決め付けマグナは自分の部屋に向かった。

と、部屋に続く廊下で出くわしたのは、

「ん、茶々丸じゃないか。」

「あ、マグナさん。こんばんは。」

いつも礼儀正しく挨拶をしてくる茶々丸にこんばんは、とマグナは返すと、エヴァンジェリンがいない事に気が付いた。

「エヴァンジェリンはどうした？」

「マスターは、現在自室で買ってきたお土産を鑑賞しているところです。」

「お土産買うの早すぎだろ。まだ二日目だぞ……。まだ三日も残っているっていうのに……。」

あの馬鹿が・・・と呆れるマグナは茶々丸に聞く。

「今日はどうだった？ちゃんと楽しめたか？」

「はい。特にマスターが一番はしゃいでいました。」

「ビデオは。」

「録画済です。」

ピシガシグッグッ！

教え込んだネタを挟んで閑話休題

「んで、ネギが何か誰かに告られたーなんて噂が飛び交ってるんだけど、アレどういうこと？」

「推測ですが、恐らく5班の宮崎のどかさんがネギ先生に告白したと思います。」

「その根拠は？」

「はい。今朝マグナさんがマスターの誘いを断った後ロビーに向かったのですが、その時宮崎のどかさんがネギ先生と一緒に回らないか、と誘っているのが見えました。」

「職務はどうしたよ職務は……まったく……まあ宮崎ならいつかやるとは思っていたが、それが修学旅行中だとはこの海のりハクの目にも見抜けなかった……！」

「いえ、未来を予知できない限りそのようなことは不可能です。」

「あ、いや、ネタだからね。そんな真面目に返されるとどういう顔をすればいいか分からないんだ。」

「笑えばいいと思います。」

「うん、まあ、そうなんだけどね。」

茶々丸と別れて部屋に戻る。腕の安っぽい時計を見ると既に時刻は教師が入浴する時間。着替えとタオルをもって大浴場へ向かう。

服を脱いで真つ裸になり、タオルを腰に巻いて露天風呂へのドアを開ける。と、ドアを開けようと取っ手に手を伸ばしたその時、大量の泣き声。そしてガタガタと揺れるドア。

そのドアを押さえつけ、無理やり開けるとマグナに突風が叩きつけられる。薄目を開けて見てみれば、突風の発生場所は風呂の中心にいるネギ。その近くには何故か3-Aのパラッチ、朝倉がいる。

だが、常人には耐えることができなかったのか、突風は情け容赦なく朝倉を薄暗い空へ吹き飛ばした。

おーすげえ飛んだなあ。とボンヤリ見ているマグナ。朝倉の上昇速度が遅くなつたのを見計らって、鋼糸を朝倉に引っ掛けようとする。と、吹き飛ばしたことに気づいたのか、杖を堂々と使って朝倉を助けるネギ。

少し拍子抜けしたマグナはネギ達から距離をとってそのまま湯に浸かる。突風で吹き飛ばされた湯気がまた出てきたお陰で、幸いにも気づかれることは無かった。

そのまま着地、そしてスクープだと写真を撮ったはずの携帯を確認する朝倉だが、不幸なことにその携帯は衝撃で壊れていたらしい。絶叫を上げる朝倉。だがその絶叫が仇となる。

ネギの泣き声と朝倉の絶叫が聞こえたのか、31Aの生徒達が入ってきたのだ。

真っ裸でいるネギと朝倉。お年頃の女子中学生が勘違いするのも無理は無い。哀れ朝倉は皆にぼこぼこにされていった。

うっ……と呻く朝倉に気づかれないように浴槽をでる。ここで朝倉に見つかれば先ほどの事をスクープだと根掘り葉掘り聞かれるからだ。

無事男用の脱衣所に辿りついて着替えの服に着替える。そして何食わぬ顔で脱衣所を出ていった。そして事情を聞かれるネギを横目で見つつ、食堂に向かった。

就寝時刻にて。

「くっそー……新田の奴、朝まで自室から出るなんて殺生だよ……。」

「くっくっく……怒られてやんの」

「あ、朝倉さん！あなた今までどこに行っていましたの？！この卑怯者！」

「まあまあ少し落ち着いて。私から皆にちょっとした提案があるんだよね。」

「……提案？」

「そ。このまま自室で寝るだけなんてせっかくの修学旅行がもったいないじゃん？一丁派手に3-Aでゲームをして遊ばない？」

「何を言ってるんですか！そんなこと委員長として許しませんよ！」

「ゲームってどんなゲームなの？」

「ふっふっふ・・・よくぞ聞いてくれました！その名も・・・！」

「名づけて！『ドキッ 女だらけのくちびる争奪！修学旅行でネギ先生orマグナ先生とラブラブ大作戦！』」

二日目・夜

「……ん？」

妙な魔力反応がマグナの感覚を過ぎていく。だが、妙だ。別に攻撃用の魔力反応でもないし、だからといって妨害、補助系の魔力反応でもない。

こちら一帯を取り囲むようにして発動されている。辿っていくと、主に東西南北の反応が一番強い。敵襲、ではなさそうだが。

「放っておく訳にもいかない、か……。」

「まったく、と心の中で悪態を吐き、原因究明のためにまずは確信犯と思われるべき人物の元に向かった。」

所変わって旅館の廊下。

誰もいないはずの廊下に、問題児の集まりである3・Aの連中等が集まっていた。それもこれも、全て朝倉の提案した特別企画の参加者達だ。

「あぶつぶぶ・・・お姉ちゃあぁん・・・正座いやですうう・・・」

「大丈夫だって。僕らはかえで姉から教わってる秘密の術があるだろ？」

「そのかえで姉と当たったらどうするんですかぁ・・・。」

1斑代表選手 鳴滝風香・史伽姉妹ペア。

小柄な体、悪戯のスキル、すばしっこさ。戦闘には不向きだが、身を隠し、相手を罠に嵌めるには絶好の条件を持つペア。散歩部と長瀬楓に教わった忍術を武器に戦うことになる。その術が実践向きかどうかはさておいて。

「一意になつてしまたらどーしよアルかねー！？ネギ坊主とはいえワタシ、初キスアルよー！」

「んー……。」

2班代表選手 古菲、長瀬楓ペア

全班中トップクラスの運動神経を持つペア。大格闘祭の優勝者と、甲賀最高位である中忍が組んでいるこのペアは優勝候補といっていだらう。付け入る隙があるところといえは、どちらもバカレンジャーであることぐらいか。

3 班代表選手 雪広あやか・長谷川千雨ペア

「あーかったりい。なあ委員長、帰っていいか？面倒くさいんだけど。」

「つべこべ言わず援護してくださいな！ネギ先生の唇は私が死守します！」

死守というよりかは自分が奪いたただけの委員長雪広あやか、既にバクティオ仮契約する為の企画だと見抜き、それをマグナに報告に行きたい千雨。既にこの時点で雪広が孤立する形になってしまっているが、ネギへの偉大な愛でどうにか他の班を相手取ることができるのか。

「よおおおっし！絶対勝つよっ！」

「えへへ〜ネギ君とキスかぁ……。」

4班代表選手 明石裕奈・佐々木まき絵ペア

どちらも運動部というだけあって、3班ペアには劣るものの、運動神経には安定感がある。まき絵がバカレンジャーの一人だが、うまく裕奈がフォローできれば優勝候補の一つに食い込むことができるだろう。

「ゆ、ゆええ……。」

「全く、ウチのクラスはアホばっかなんですから……せっかくのどかが告白したときにこんなイベントを……。」

5班代表選手 綾瀬夕映・宮崎のどかペア

全班中最低クラスの運動神経を持つ二人。だが、図書館部で鍛えられた行動力と、二人の頭脳を上手く使えば、全ての班を出し抜くことも可能である。大穴の二人がどのような行動を起こすのか。

「つと、こんなもんでいいかな？煽り文句もバッチリだし、そろそろ始まるよ、カモっち！」

「・・・なあ、朝倉の姉さん。やっぱりマグナの旦那をターゲットに入れるのはヤバいんじゃない？」

「いまさら何言ってるのよ、もう始まっちゃうし、マグナ先生ならきつと許してくれるよ。」

「朝倉の姉さんは知らねえんだ・・・マグナの旦那の真の恐ろしさを・・・！」

「・・・？まあいいや。さあ、始まるよ！」

修学旅行旅館での、ラブラブキッス大作戦が始まった。

コンコンと、ある部屋のドアをノックする、が応答がない。マグナはあれ、と思つてまたノックするが応答はない。

ここはネギの部屋なのだが、どうにも反応がない。生徒達の見回りにでも行つてゐるのだろうか、と考へている内、ドタバタと喧騒の音が聞こえてきた。

なんだろう、とそちらに行こうとすると、こちらに近づいてくる生徒が一人。長谷川千雨である。面倒くさそうな表情で、片手を挙げて、よう、と気さくに近づいてくる。

「消灯時間過ぎてるぞ、自分の部屋に戻つとけ。新田先生に見つかる前にな。」

「言われなくてもそうするつもりだけどな。・・・なあ、今3-Aでやってる企画の事、知ってるか？」

「企画？変な魔力反応がここら一帯を覆つてゐることに關係してるのか？」

「やつぱ知らねえか・・・まあいい。それにも關係することだ。今朝倉のバカとネギ先生の使い魔・・・だっけか、そいつらが手え組んで、クラスの中とネギ先生を仮契約させようとしてゐるらしいぞ。」

「ああ、どっかで感じたことがある反応だと思ったら・・・仮契約時の反応か・・・。」

ほれ、あそこ。と千雨が指差す方向には、上手くカモフラージュされたビデオカメラ。反対側を見ると、やはりビデオカメラが設置されていた。

「うわ、嫌に本格的だな。・・・まあ部屋にネギもないし、この企画は失敗だな。」

「ところがぎつちゃん。企画の対象にアンタも入ってるぞ。」

「・・・えー・・・。」

「一応報告と警告さ。せいぜい他の奴等と仮契約しないようにな。ま、狙ってる奴等は選手だけじゃないから、気いつけな。」

「は？それどっいう意味だよ。」

そのマグナの問いには答えず、ヒラヒラと手を振って去っていった。

今度こそ自分の部屋に戻るつもりなのだろう。

千雨の最後の言葉の意味が分からず、うーん、と考え込むこと十数秒。まあさっさと部屋に戻るか、と決めたマグナはその一步を踏み出そうとし、

バキン、というガラスが割れる音を聞いた。音のしたほうを見てみると、どうやらこちらを映していたビデオカメラのレンズが割れたらしい。そして地面に落ちるレンズとBB弾。

それだけで分かる。誰がこんなことをしたのかを。

素直にその方向を見ると、

「やあ、奇遇だね。師匠。」

「やっぱりお前か、真名。」

クルクルと手の内で拳銃を弄ぶ龍宮真名だった。そして、やっと千雨の言っていた言葉の意味を理解したのだった。

「お前も、このバカ企画の参加者か？」

「まさか。こんな金にならないことはやらないさ。でもね……。」

薄く、笑う。ゆっくりとした足取りでマグナに近づき、

「師匠との仮契約カードは欲しいのさ。」

細い、それでいてしなやかな腕をマグナの首に回す。いくら真名の身長が高いとはいえ、流石にマグナの身長と比べれば低い。

中学生にも関わらず、発達した乳房をマグナの体に押し付け、誘う。だが、そこは歴戦の英雄。その誘惑に惑わされず、微妙な顔をしながら真名を引き剥がした。

「ストップ。これ以上はノーサンキューだ。」

「……つれないなあ。」

「中学生に誘惑されて理性吹き飛ばすほど、甘く生きてきた覚えはなくてね。悪いが、もう7、8年経ってから誘惑することだな。」

「発育には自信があるんだけどね。」

「発育がどうこの問題じゃなくてな、年齢の問題だっつーの。」

「ま、誘惑程度こたなので仮契約できるとは思っていないさ。後やるべきことは・・・分かるだろう?」

断られたにも関わらず、嬉しそうにそう尋ねる真名に、やっぱりか、と溜息を吐くマグナ。

仕舞ったはずの拳銃、そして二つ目の拳銃を取り出して構え、狙う。

対するマグナは自然体。ガリガリと頭を掻いて逃げる算段を立てている真つ最中だ。どうしてこうなった、と自問自答することをやめられないマグナの背中に、

「やあ、マグナ先生。奇遇だな。」

知らない声ではない。むしろ聞きなれた声だ。振り向けば・・・というより既に背中に重みを感じる。軽い。肩から金髪の髪の毛が流れてきている。マグナはその人物の顔を見るまでも無く、うんざりとした声色で、

「奇遇じゃねーよ、エヴァ。後噛むな。」

「クツクツク・・・今日の目的は噛むことじゃないぞ？まあ、分かっ
つていそうだがなあ？」

耳元でくすぐったい吐息がかけられ、ゾワツとする。そして頭に手が置かれ、グググ・・・！と力強く無理やり顔を背けられ、その目の前にあるのはエヴァの妖艶な笑み。

そしてその顔が段々近づいていき・・・そして・・・

「あばあッー！」

思いつきりのけぞった。というのも、マグナは別段何もしていない。実行したのは真名である。今度はBB弾ではなく、実弾らしい。らしい、というののは、撃ったときに薬莢が落ちたことと、エヴァに当たって潰れた弾丸が落ちたからだ。

「私を差し置いて何をやっているんだい？」

「っち、邪魔者がいたか・・・。」

「さて、邪魔者はどちらかなあ？」

「……ふ、フフフフ……面白い……まずは貴様から潰してやる、龍宮真名ああああ！」

「やってみな、吸血鬼風情がああああああ！」

そしてそのままリアルファイトに突入する二人。とりあえず開放されたマグナは、戦闘の場所を移すためエヴァンジェリンと真名が外に出るのに使った窓を閉めて鍵を閉める。

ようやく一息つくくと、次は朝倉の所か、と歩を進める、その進行方向に。

「……………」

「ああ、茶々丸か。エヴァンジェリンの加勢に行かなくてもいいのか？」

「はい、龍宮様もマスターもお遊びだと判断しました。私が加勢するのは無粋かと。」

「・・・まあいいか。朝倉の部屋、どこか分かるか？アイツらを締めなきゃならん。」

「はい。存じ上げてます。こちらへどうぞ。」

先導して歩く茶々丸の後ろを付いていきながら、何気なくマグナは茶々丸に聞いた。

「茶々丸は企画に参加しなかったのか？まあそれをいうならエヴァもだけど。」

「マスターは『マグナの奴だ、誰彼構わず仮契約する訳がない。とつかしたら殺す。』と仰った後、マグナさんを探しに部屋を出たので、私も付いていきました。」

「なるほど。んで、さっきの場面に出くわしたって事か。」

はい、と頷く茶々丸。と、目的地に着いたのか、ある部屋のドアの前で立ち止まる。ここです、と案内してくれた茶々丸に、マグナは礼を言つと、

「ああ、そうだ。一つ頼み事していいかな。旅館中に設置された力

メラを回収してくれないか？」

「はい、お任せください。」

ぺこりと一礼。心なしか、少し了承の言葉に力が入っていた気がするが、元凶の直ぐ前にいるマグナにそんなことが気づくはずもなく、ドアを開けた。

部屋の中にいるのは食券を袋の中に詰め込む最中だったのか、こちらを見て顔を真っ青にする朝倉。そしてクッションの中に頭を突っ込んで現実逃避をしているカモ。

そんな姿を見てマグナはニイと口の端を歪めると、部屋の中に入っていた。

「さあ、肅清の時間だ……。」

シネマ村

「な、何かドアが開いたと同時にものすごい何か漏れ出してるんだけど……………」

「もうダメだあ…………おしまいだあ…………逃げるんだ…………勝てるわけがない……………」

「ちょ、カモつちどうしたの!?いきなり震えだして……………」

「コーホー…………コーホー……………」

「ひい!何か人体には決して出せないような音が!こんな部屋にいられないよ!私は窓から逃げ……………」

「られると思っていたのかあ?…………なるほど、中々粋がいいな。」

「え、ちょ、仮にも先生が生徒に手出しを……………」

「ん?何のことかなあ?…………まあい、変な企画に俺を加えた罰として、お前の体で新秘孔のテストをしてやるわ!」

「秘孔って……えええええ！まって！謝るから、謝るから！」

「お前ならいい木偶になってくれそうだ……さあて、どの秘孔から試してやるつか？」

「え、マジで？マジでヤルつもりなの？うら若き乙女の体に大人が触る何　ほげえ！」

「この秘孔ではなかったか……。」

「ちょっと……今はマジで痛かったんだけど　ひぎい

「！」

「んん？間違つたかなあ……？」

「お、乙女に有るまじき醜態と声を　ひでぶー！」

「ガタガタガタガタガタガタ」

「あれ、朝倉。何か雰囲気変わった……………」

「フ、フフフフ……………分かる？」

「分かるって……………そりゃあ……………」

「見よこの肌のツヤ！張り！そして滑らかさ！未だかつてないほどまでに素晴らしい肌を私は手に入れたのよ！」

「あ、ホントだ！凄い！どうしたの急に、うらやましいなあ……………」

「フフフ……………」

「（朝倉の体で新秘孔の究明してたら変な秘孔見つけちゃった……」

日は変わって修学旅行三日目。

修学旅行の中間日であるこの日は全班自由行動となっており、それぞれの班ごとに行きたい場所などを決めて自由に京都を回ることができる日だ。

だが、いかに自由日といっても修学旅行に先生の自由日など存在しないのが学校というものだ。

よってマグナもそれに洩れず、一人で京都内を見回っている。幸い一人にしてもらったのが僥倖か。一人だと気楽でいい、というのがマグナの持論だ。

他の先生からのマグナの信頼は来た日が浅いにも関わらず信頼は中々されているほうだ。今回もマグナを信頼しての一人行動というところか。

見回りする前に、お決まりというのか何というか。やはりエヴァンジェリンや真名の誘いを受けたが、上手く回避。その時に茶々丸が少し悲しそうな顔をしていたのが心に刺さったが。

偶に会う他クラスの生徒達から手を振られたり、喋りかけられたりするのを返しながら見回りという名の散策を再開する。

よほど珍しいところに行かない限り、生徒達に会わないと思ったのだが、意外とマイナーな神社のほうにも生徒達は訪れていたことに少し驚きつつ、近くにあった茶屋で一休みする。

京都ならではの茶菓子をパクつきつつ、茶を啜る。甘味にほのかな茶の渋みと苦味が合わさって最強に感じる。

「どうも、ご馳走様でした。」

店員に礼をいいつつ、料金を払って歩き出す。目的地など決めていない。フラフラと見回りのように見せて散策するだけだ。

茶を啜っている最中に感じた魔力、よりかは靈力に似た力を感じたが、マグナはそれには関与しない。それには。

「さあて、次はどこに行こうかな。」

懐から京都のパンフレットを取り出しつつ、他の先生には悪いと思いつつも、いながらもマグナは次に行く場所に通した。

途中他の先生や生徒達に会いつつ、京都内を散策して満喫していたマグナは、急に感じた殺気に、口元を歪めた。

「おっぱじめやがったか……………！」

忘れるはずもない。この殺気の波長、この狂気。間違いない、毎回会うごとに戦った月詠だ。

口に運んでた煎餅をバリリと噛み砕き、人気のない場所に移動すると、およそ誰の目にも止まらぬ速度でその殺気のほうに向かって駆けた。

向かった先は観光地で有名なシネマ村。

シネマ村は京都でのドラマや映画撮影に使われていたセットをそのまま観光地にしたのだ。時代劇の衣装を借りれたり、殺陣などのシヨ―もやっているため、中々の人気を誇る観光地だ。

そんな有名な観光地の正門横、『日本橋』に月詠はいた。いや、月詠だけではない。恐らく決闘を申し込まれたであろう刹那に木乃香、そして何故かクラスのメンバーと大勢のギャラリ―。

何でいるんだよ、と眉を顰めたが、おおよそ何か勘違いしてここに来たのだろうと検討付けて頭を抑える。

本来いい役者は月詠と刹那、そして木乃香だけのはずだ。計画のズレ、というよりかはこのクラス相手に計画など無意味に等しいのかもしれない。

と思っっているうちに刹那と月詠の戦闘が始まったらしい。ギーン！と金属音を響かせて一合二合とどんどん刃を重ね合わせる。周りは殺陣のシヨールか何かとしか思っっていなく、感嘆の声を上げて見守っている。

クラスのメンバーはどうしたのかというと、月詠が事前に出していた大勢のマスコット型の式神と平和的な戦闘を行っている。

誰も刹那と月詠が相手を切ることを目的とした真剣で戦っていることに気づくことはない。それがたとえ相手を殺すことになるうとも、最も、相手を殺す、ということを考えているのは月詠ぐらいだが。

「（しっかし、今回はイレギュラーが多すぎる。もしかしたら不足の事故、なんてものが起きる可能性があるにはあるかもしれない、か）」

持参した帽子を目深に被り、刹那と月詠の殺陣を見ているギャラリに紛れ込みながら思考する。

いざとなつたら自分がフオーにいくしかないのだが、それはなるべく避けたい。刹那や朝倉といったマグナが魔法使い側の人間で、人外の力をもっていることを知っている者ならまだしも、何も知らぬ観客やクラスメートにそれを知られては不味い。

黒いマントに仮面を被って登場する、というのもありではありだが、ここの雰囲気にもそぐわない。時代劇という設定でこの場面は成り立っているのだから、西洋の奇術師が登場するなんてあり得ない。

「（顔を隠せて、なおかつここの雰囲気にあつた衣装って……………あ）

目に留まったのは衣装貸しの暖簾が掛かった小屋。もしかしたら、もしかしたらアレがあるかもしれない。

一抹の期待を胸に、マグナは衣装屋に向かった、

ギチリ、と異形の怪物の引く弓の音が響く。

その矢が向けられている先には忍者の格好をしたネギと木乃香。いや、ネギは実態ではないため居るようで居ないようなもののだが。

シネマ村の白の天守閣。その二人は追い詰められていた。異形の怪物と、そしてその怪物を召喚したであろう女、天ヶ崎千草にだ。

ニタニタとしてやったりの笑みを浮かべ、

「さあ、早いところお嬢様を

」

と一旦ここで言葉は途切れた。何てこともない。唯風が吹いて中断されただけだ。流石に天守閣の上にいるだけあって、風当たりが強い。木乃香もよろけてしまい、ネギに支えられていた。

そう、その場を動いて。

千草が従えている妖魔には『一歩でも動いたら撃つ』というように

命令してある。だが、それは本当に撃つのではなく、けん制の意味を込めて言ったのだ。

もちろん千草はそのことを理解してネギたちに言ったし、妖魔にもそれが分かっている筈だと思っていた。だが、

非情にも矢は放たれた。命令をあまりにも忠実に守ってしまったが為に。

放たれた矢を止める術を持つものはこの場にはいない。千草も、式神のネギも、そして勿論木乃香も。

狙い過たず矢はその場を動いた木乃香に向かって放たれ、そして。

矢は木乃香にあたる直前で真っ二つに切れた。

何故？それは木乃香の前にいる人影が持つ獲物。まるで雪原のように白く、美しく煌くその刀

夕風。

刹那が、矢を斬り飛ばしていた。

静かに、刀を下ろし、木乃香に微笑んだ。

「大丈夫ですか、お嬢様？」

「信じてたえ、せつちゃん。」

花の咲くような笑顔と共に木乃香が笑う。その顔を守れたことが嬉しくて、安心して、そして。

この笑顔を奪おうとした奴等が憎くて、憎くて。

「ネギ先生、木乃香お嬢様を安全なところへ。」

「でも刹那さんは……………」

「私なら大丈夫です。いざとなったら逃げます。今はお嬢様の方を。」

「……………分かりました。どうかご無事で！」

刹那の覚悟を受け止めたのか、ネギは木乃香を連れて天守閣を下りていく。木乃香は千草と妖魔、そしてやっとのこと来たのか、月詠

をけん制している刹那に不安そうな顔を向けた。

その顔に、刹那は唯微笑を浮かべて答えるだけ。大丈夫だと。安心してくれと。そう語っていた。木乃香は姿が見えなくなるまでその顔を浮かべていたが、天守閣から降りてしまえばその顔は見えなくなってしまうた。

天守閣に残ったのは刹那に月詠、千草に妖魔。

圧倒的に刹那の不利。

だが、

「お嬢様を逃がしはったか……………まあええ。ここで刹那はんを潰しておけばお嬢様を奪うのにも余裕ができる。」

「ウチは先輩とやり合いたいだけ……………ああ、後殺り合いたいだのお方が……………」

その二人の言葉に、刹那はフツと笑った。

そして何も言わずに刀を構える。何度も練習した形に、何度も戦場

を潜り抜けてきた型に。

その構えに月詠も恍惚としながらも両手に刀を構える。千草も妖魔に命令を下し、自身も札を構える。

そして、

「ハアアアアア！」

刹那は飛び込んだ。それと同時に、月詠もその目を武人としての目に変えて刹那を迎え撃つ。妖魔は矢を、千草は札を投げつける。

そして二人が激突する。しかし、鉄と鉄が打ち付けられる金属音は聞こえない。何故か、それは二人の間に誰かが入り込んで止めたのだ。

編笠をかぶり、黒い衣を着て、そして交差させた手でそれぞれの刃を止めていた。

「……………双方引け。ここは戦場いくさばではない。無関係の者を巻き込むつもりか。」

刃を引こうにも指先だけの力で止められ、それは叶わない。それは月詠のほつもそつらしく、あれえ？と気の抜けた声と共に引こうとしていた。

低い声、そして漏れ出す圧力。近くにいるだけで肌が粟立って仕方がない。

「ツチ。しゃあない。月詠はん、ここはその虚無僧の言つとおり、引きますえ。相手が悪い。」

「ええ？ウチこのままこのお方と殺り合いた

。」

「いいから！」

不満そうな顔とともに、『絶対殺り合いましょー』と暢気な声と共に、月詠と千草はそのままその場から去っていった。

「あ、あの。この度は助かりました。」

刹那は敵が完全にいなくなったところを確認すると、虚無僧にお礼を言った。虚無僧は何も言わず立ち上がり、去ろうとしていた。刹那はそれを止めようとしたが、それはできなかった。

虚無僧は無言で膝を曲げると、そのままその場から消え去るようにして居なくなってしまったのだ。相当のやり手だと感じると共に、違和感を刹那は感じていた。

あの去り方、どこかで見たような……………。

少し悩んで結局分からないと結論付けると、刹那は木乃香の元に戻るため、天守閣から飛び降りた。

そこには、守ることができた笑顔があるはずだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372/>

魔法の使えない魔法使い

2011年8月19日19時28分発行